

通称「吉田の会」による地政学関連史料

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水内, 俊雄 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180105-057

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	通称「吉田の会」による地政学関連史料
Author	水内, 俊雄
Citation	空間・社会・地理思想. 6 卷, p.59-112.
Issue Date	2001
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	
DOI	10.24544/ocu.20180105-057

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

通称「吉田の会」による地政学関連史料

本邦に於る官撰地誌編纂の概要（室賀信夫）	……(64)
印度支那半島に於る英仏の侵略とその政策（室賀信夫：昭和14年12月）	……(67)
皇戦地誌に関する意見（昭和15年2月5日）	……(74)
皇戦地誌とは如何なるものとなすべきや（浅井辰郎）	
皇戦地理学について（柴田孝夫）	
地誌は如何にあるべきか（松井武敏）	
皇戦地理学の意義（別技篤彦）	
皇戦地誌をして如何なるものたらしむべきか（野間三郎）	
皇戦地誌についての私見（室賀信夫）	
皇戦地理学素描（米倉二郎）	
學戦原理（無署名：昭和15年2月）	……(84)
東方問題の基礎条件（野間三郎：昭和15年8月）	……(89)
シンガポールの軍事地理的考察（室賀信夫：昭和16年1月）	……(98)
西貢港の地政学的位置に就きて（室賀信夫：昭和16年8月）	……(106)

解題

水内 俊雄*

通称「吉田の会」は、京都帝国大学文学部地理学教室の小牧教授、室賀助教授を中心にして、軍部、将校OBの「皇戦会」からの資金援助を受けながら、吉田山の西麓、吉田上大路の民家を借り上げ、調査、読書会、研究会、本の出版を行なってきた、非公然の集まりのことをさしている。1939(昭和14)年から終戦時まで存在した。今回の史料は東京方面の古本屋で見つけられた資料の一部であり、執筆者と内容からして「吉田の会」が関わった作業を②のなかで活字化したものと推定される。このような推定のもとに本雑誌に翻刻することになったが、この史料の翻刻にあたっては後述のような問題を含むことは承知の上で印刷に付し、あえて日本の地政学研究に一石を投じることにした。

翻刻に至る経緯を述べると、駒沢大高講師の石崎尚人氏が、東京方面の古本屋で「軍事史料」一式として売りに出されたものを発見し、連絡を受けた神戸大助教授・大城直樹氏がこれに着目し、入手したものである。ただし、軍事研究者から先約が入っていたため、この度の入手史料は現物ではなく、石崎氏が懇意の店主から売却前に譲り受けたコピーである。近年に東京方面で逝去された当時の「吉田の会」のメン

バーの蔵書が古本屋に出回ったものと推測されるが、確証は得ていない。現物は、すべて縦書きタイプ印刷で仮製本されており、軍部資金を背景にした潤沢な予算のもと、会での発表が活字化され、当事者、軍関係者をはじめとして少部数出回ったものと思われる。今回発見された史料はその一部に当たるとと思われる。このコピーは、2000年10月の科研(基盤研究(B))①「地政学・植民地主義との関連から見た近代日本の国家形成および地理・空間の思想」代表 水内俊雄の研究集会(鹿児島市)において、大城直樹氏によってコピーが配布されその経緯が紹介された。執筆者、内容からして地理学史上級の非常に貴重な史料であり、誰の目にも触れたことのないものであるとの判断もあり、本雑誌に翻刻することが研究集会で決定された。

本来であれば、こうした経緯や解題めいたものは、それにふさわしい人が当たるべきであるが、十分な調査を行なう時間がなく、とりあえず史料として公開することを優先するために、以下の手順を取った。著作権の問題では、ご本人、ご遺族からの承諾は取っていない。この点に関しては、いく人かの方に相談したが、その対応に対して一貫した意見や統一された同意を得ることができず、水内の責任で、承諾を経ず翻刻、公開に踏み切ることにした。この点の責はすべて水内が負うものである。校正に十分な時間が取れず、ワーブ

* 大阪市立大学

口の辞書制約もあり、翻刻も不完全なものにとどまっていることお許しいただきたい。

以下に紹介する史料については、若干の情報整理と筆者の推測や理解を述べてみたい。もちろんこの推測については今後論証してゆく必要があることは当然である。今回の史料については、表2に、「吉田の会」を中心とするメンバーによる著作や活動と一緒に整理し、表1の全国的傾向の整理と対照させながら、どのような位置付けにあるのかを探ってみた。

山野正彦(1999、1123頁)は、「1939年春から小牧教授の指導下に、地理学教室教員と卒業生有志が集まって、世界各地の地理学・地政学を研究するグループが発足した」と記している。これが「吉田の会」であり、浅井辰郎が述べる「総合地理研究會」(75頁)である。表2に記したこの会の活動を見るに、当時教室の講師であった室賀信夫は「印度支那半島に於る英仏の侵略とその政策」と題してすでに発表を活字化している。付記には「本篇第四章に充つべきものなるか、之については前回報告中に詳述したるを以て今省略に従ふ。前回報告中「列強との関係」の章を主として参看せられ度し」とあるように、研究会は昭和14(1939)年7月以前の時点で既にスタートしていたようである。そしてこの報告は、昭和16年刊の『世界地理政治大系』の『印度支那』となって引き継がれる。野間三郎においても、表2のように昭和15年8月にヨーロッパ、ロシア、トルコに関する「東方問題の基礎条件」を発表するが、これも昭和17年刊で『土耳其・シリア・パレスチナ・トランスヨルダン』の上辞につながる。「吉田の会」の第一の目標が、こうした時局にかなう地誌を刊行することにあったことはこれで裏付けられよう。

小牧自身に関して、京都帝国大学文学部の威風堂々たる史学科の中で、地理学の「学問」らしさをどうも発揮できなかった煩悶を、時局を利用して地政学に飛びつくことで打破したかったのではないかと推測される。そしてその打破の際に実践的に国家経略に携われるかのように思われた地政学を背景にした躍動する地誌の開陳がもっとも早道のように思われたのではなかろうか。表1のようにすでに東京の地理学者を中心に多くの世界地誌関連の叢書、講座本類が公刊されながら、京都ではいまだ発信されないという劣勢に対して、小牧、そして室賀は「皇戦会」の資金をバックに、攻勢に打って出たものではないかと推測される。

今回の史料で最も注目すべきことは、地誌の革新について、そしてそこで語られる皇戦地誌、皇戦地理、学戦というタームの頻出と、その内容の叙述を目にすることができたことである。もちろん皇戦とは、この「吉田の会」の経済的支えであった軍部将校OBの「皇戦会」という会名と密接に関係したし、「皇戦会」の地理的研究機関として(後掲 浅井辰郎分 75頁)、皇戦が何たるかと表明することは危急であり、義務でもあったろうことは容易に推測できる。今回発見された資料では、会の主だったメンバーの所信が昭和15年2月の時点でそれぞれ表明されており、その意味で非常に貴重な発言を知ることができる。

小牧をのぞき、この昭和15年において、皇戦地誌に関する意見を述べたメンバーの最年長が室賀の33歳、別技は32歳、学年では最年長であった米倉はまだ31歳、そして最年少は川上喜代四の24歳であり、室賀をはじめ米倉、別技、野間などはもう教職についていたが、今で言う大学院生クラス年齢層の意見であったことをまず念頭にしておきたい。そしてこの発言は、推測ではあるが、会に出席していた陸軍将校あるいは将校OBの前で述べられていた可能性もある。大学院生クラスが、軍将校の前で意見陳述をするという状況をも十分に考慮しておかねばならないであろう。

いくつかの推測を今後の研究課題という形で述べてみたい。まず昭和16年以降に大量生産される小牧地政学的一端を今回の皇戦地誌意見に多くみることができる。かの地政学の多くのエッセンスはこの意見に述べられているのではなかろうか。久武は筆者あての私信の中で(2001年3月11日付の手紙)、「皇戦地誌に関する意見」は、おそらく小牧実繁が書いたと思われる「学戦原理」と対応しているものであろう。とすると1939年以前の室賀信夫の論稿や報告がこの皇戦地誌に関する意見や「学戦原理」に与えた影響関係を推測することができる。室賀信夫がやはり「皇戦会」の実質的リーダーであったろうと思われる」と推測している。すでに地政学的論考を昭和12年の時点であげていたとされる米倉や(村上、1999)、昭和10年にすでに『太平洋を繞る国々』を執筆していた別技の動向とともに、今後論証されるべき課題であろう。

特にこの室賀の役割については、戦後の精緻な地図史研究を見ても、戦前における京都学派的『世界史の哲学』に代表される、ヨーロッパの克服作業の中での

地政学に与えられたその地理学的批判という役割を室賀が認識していたかもしれない。今後の研究課題の最も本質的部分に思われる。

文章全体に見られる、精神主義高揚の唱和に関しては、軍部将校の前での沮喪を許されない緊張感がそうさせたかも知れないという要素も感じられる。しかしいずれにせよ、主任教授の号令のもと、弟子たちが生真面目にフォローしようと、短期間に相当な努力をして、担当地域に関する書物や資料を収集し読み込んでいったのではなからうか。その努力とそれを補う博識を30歳台前後に出しえた個人の資質と時代の状況を、室賀を中心に今後解明してゆくことは非常に重要な作業となろう。

基本のトーンは近代ヨーロッパが作り上げてきたものの否定、それは学問的枠組みそのものに対して、そしてアジアの植民地になしてきたものに対しての両者の否定であった。そして歴史学だけでは達成し得ない、総合の科学としての地理学が、近代ヨーロッパが敢行してきた世界歪曲の現状を指摘し、それに代わりうる革新の大東亜に行き渡る皇道宣布の学的尖兵としてふさわしいという論調に支配されている。

それは室賀の表現では「國家の倫理的意志と關係して打樹てらるべき」(後掲 室賀分82頁)であり、野間は「かくて必然に我々の地理學は大なる希望と憧憬を與へるものであるが故に、今假りに地理神話と呼ぶるゝもよいであらう。神話と呼ぶ、それは合理性を缺く故ではなく、國民の魂を永久に大なるものへ驅り立て、目標を見失はんとしては再びそこに歸つて自己の行手を見通し再出發の途につくを得しめるが故にかく呼ばれるのである」(後掲 野間分80頁)。

千田(2000, 206頁)は、室賀の昭和10年代の講義ノートを閲覧した上で、表紙に「郭燕帖」とはられたあるノートを見つけて次のように述べる。「『郭燕』とは『郭善燕説』からとったもので『道理に合わないこと。道理らしく説くこと』という意味である。…中略…。もしかしてこの貼りつけは、戦後になって、室賀は地政学に向かったことに対する反省の念からなされたものではないだろうか。反省ということばで室賀を括ることから抜け落ちる視座は気になるが、この室賀の念を既に触れた京都学派の世界史の読み直しの中で位置付ける必要がある。同時代に東京帝国大学の地理学教室に学生として在籍していた石井素介氏からの筆者

への私信(2001年2月6日のメール)にもあるように、「この時代の思想状況については、表面に出た文章や記録だけから簡単に一刀両断して貰いたくないもの、というのが率直な感想です」という発言を、大学紛争も経験しない筆者などは十分に考慮せねばなるまい。

山野(1999)はより厳しく評している。小牧およびその門下生の当時の所産に対して、「古典の引用や二次的な統計によった外国の記述は、フィールドの香りを欠いた、生氣のないものといわざるを得ない。古典の知識の含蓄だけが虚しく感じられ、悲劇的ですからある」(1133頁)。「実証主義的・野外科学的スクールと、精神主義的・書齋科学的スクールの志向の相違」(同1125頁)が、戦後の地理学の命運まで決したという結論は、筆者には十分に納得される。

山野が詳述した今西錦司学派との対照には本論では触れていないが、山野の言う「悲劇的ですからある」という解釈については少し異論がある。むしろ、京都帝国大学史学科の文献史学の大きな伝統に、新興の地理学に学問的拠り所をなかなか見出せなかったこと、小川琢治の漢籍の素養と同時に自然科学者であったというマルチタレントでとてもビッグな初代地理学の教授の文学部に得てしまった後継のしんどさを物語る当然の結果でなかったらうか。それは地理学教室の悲劇ではなく、ポスト小川の宿命であったのではなからうか。こうした宿命からして文学部の地理学にまっとうな意味でのフィールドワークを求めることは、史学科地理学教室の性格からして、考古学以外に無理ではなかったらうし(小牧が接した留学中の地理学やまた考古学のフィールドワークはどのようなものであったらうか)、短期間のうちに現地に行くこともほとんどできず、主任教授の意向に対処するとすれば、行かずして文献だけで外国地誌を描くしか方途は他になかったのではなからうか。

しかしこうした地理学に野外科学的スクールを引き寄せる理系的雰囲気があったことは、同時の地理学の講義に地質学からの多くの出講があったことからもうかがえ、それとは直接関係はしないが、川喜田二郎を始めとする、フィールド学派を地理学教室から生み出す学問の雰囲気があったのかもしれない。なんとなく自然科学に一番近いように思われて地理学を専攻したという村上次男の回想(村上、1999)にもうかがえよう。それを野外科学的スクールと、書齋科学的スクー

ルの志向の相違というはっきりした対立点として仕立て上げるよりは、茫漠とした総合科学的な地理学が、宿命的にそして自動的にフィールドワークをその内に取り込まざるを得なかったし、かといってそれに対する専門技術や知識を教育されているわけでもなかったのである。そうした学問状況に、30歳前後の気鋭の地理学研究者といえども取りうる選択肢は限られていたのではなかろうか。今西らの探検学派に対しては、その言葉の身体的にもつ意味からすると、それを身体化できない地理学者にとっては、こうした探検の成果に当面对抗してゆくには、東洋西洋に関する広範な歴史的素養に加味した地政学的なアジテーションでしかなかったかもしれない。

しかし科学としての地理学の確立を精神主義的に高揚した「吉田の会」であったが、現在の社会科学的な視角から地理学の科学性を見る限り、表1に見られるような経済学出身で地理学へのアイデンティティを有していた江澤譲爾や川上正鑑、あるいは石田龍次郎らの研究のほうにより多くの学問的な洗練、地理学的な概念の精緻化を感じてしまうのは筆者だけではないと思われる。またより政策的な関与として、「吉田の会」のメンバーに、総力戦を見通せるような生産・労働関係や、国土計画に実際踏み込める教育や情報も有していなかったのが真相ではなかろうか。政策的関与のないことを問うのはないものねだりと言ってもやむを得ないであろう。せいぜい別技の「皇戦圏内の生産地域の分散配置等経済的新秩序建設には必ず地理学者の意見を尊重せしむる如くする」(後掲 別技分79頁)といった指摘が精一杯のところであったろうか。

最後にこうした地政学に対する久武の所見の引用で

もって、この解題を閉じたい。今日隆盛の批判地政学の立場からこの日本地政学の問題を位置付け直さねばならないと筆者も痛感しているが、そのひとつは久武(2000、77-78頁)も指摘する、日本地政学が希求した大東亜の「本然の姿」と、それを正統化する「歴史的正義」の問題である。「小牧や村上のいう「本然の姿」が、即マルチカルチュラリズムというわけではないが、深く即応しているのは事実である。しかし、私が注目したいのは、「本然の姿」が前提にしている「経済的アウトルキー」と「同化侵蝕」を拒否する、あるいは意図することが持つ対外的な攻撃力ということ、そして「本来の姿」に収斂される歴史の糸の選りすぐり方という国内(民族内)の操作が同時におこなわれていくということである。いわば対内的な文化的距離の極小化が同時に対外的にはそれが極大化されるということである」。マルチカルチュラリズムは、しばしば極端なエスノ・ナショナリズムに結びつくことを意味するが、こうした議論の地平においては、小牧も今西を俎上にのせるだけでなく、当時の、そして現代日本、現代世界の地政学的状況への真摯な思考がわれわれにも求められていることを忘れてはならない。

参考文献

- 千田稔(2000)『邪馬台国と近代日本』NHKブックス
久武哲也(1999、2000)「ハワイは小さな満州国—日本地政学の系譜—」現代思想 27-13、28-1
村上次男(1999)「日本地政学の末路」空間・社会・地理思想 4
山野正彦(1999)「探検と地政学—大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向—」人文研究 51-12

表1 通称「吉田の会」メンバー以外による地誌、地政学関係の主な著作など

昭和10年	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年
*改訂版 世界地理風俗大系 1935-1940?)(飯本信之、石橋五郎、小内通敏、佐藤弘他)	*支那研究・北支中支の風物(藤田元春) *新支那地誌(国松久彌)	*大陸支那の現実(藤田元春) *新瀧州地誌(国松久彌) *世界地理(1939-1944)(石田龍次郎編)		*タイ国地誌(能登志男) *新南洋地誌(国松久彌) *国勢新東亜地理(国松久彌) *改訂新版 新東亜地理(国松久彌) *地政学(岩田孝三)	*南方地理研究(立命館大学文学部地理学研究室) *東亜地政学の構想(川西正鑑) *地政学研究(江澤譲爾) *南洋地理大系(飯本信之、佐藤弘編) *南方共栄圏の全貌(佐藤弘編)	*東亜共栄圏の地理(国松久彌) *国防地政学(岩田孝三) *南方地政論(江澤譲爾) *地政学概論(江澤譲爾)	*国防地政論(江澤譲治、国松久彌、佐藤弘) *地政学と大東亜共栄圏の諸問題(国松久彌)

表2 通称「吉田の会」メンバーによる著作や活動など

()は昭和14年で迎える年齢	卒業年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年	備考
小牧 実繁(41)	T11		*近世探検史 *日本地政学宣言	*支那及満州国現勢地理(編著)	*日本地政学宣言(改訂増補) *日本地政学 *統日本地政学宣言 *地理学上より見たる大東亜 *東亜の地政学	*大東亜地政学新論(編)	*日本地政学覚書 *世界新秩序建設と地政学 *大南方地政論(昭和20年:室賀と)	SC:日本
米倉 二郎(30)	S6		C8:2月	*東亜地政学序説		シンガポールへ	*満州・支那(世界地理政治大系)	
別枝 篤彦(31)	S7		C5:2月	*蘭領印度(世界地理政治大系)	ジャワへ			SC:太平洋
室賀 信夫(32)	S8	B:7月	C7:2月	F:1月 G:1月 *シンガポール *印度支那(世界地理政治大系)			*大南方地政論(昭和20年:小牧と)	A:執筆時期不詳
川上 健三(30)	S8							
松井 武敏(29)	S8		C4:2月					SC:アフガニスタン・イラン・イラク・アラビア
朝永陽二郎(31)	S9		C2:2月					SC:アフリカ
御子柴 幸一	S10							
野間 三郎(27)	S11		C6:2月 E:8月		*土耳古・シリア・パレスチナ(世界地理政治大系)	DT:西亜の支配者		SC:欧羅巴
浅井 得一(26)	S11				*印度(世界地理政治大系)	*ラングーン・カルカッタ DT:印度のアジアへの復帰		
浅井 辰郎(25)	S14		C1:2月 満州建国大学	ボナベ調査、 山西学術調査				
柴田 孝夫(26)	S14		C3:2月					SC:中南米
内藤 玄匡	S14							
川上喜代四(23)	S15				*北極と南極世界地理政治大系) 小牧と			SC:北アメリカ州
三上 正利(25)	S15					DT:シベリアとバイカル		SC:シベリア。 蒙疆・西藏

注

「吉田の会」のメンバーについては、浅井辰郎による「別枝篤彦名誉会員のご逝去を悼む」地理学評論 70-9、1998年による。

表中の略記:

- A 本邦に於る官撰地誌編纂の概要
- B 印度支那半島に於る英仏の侵略とその政策
- C 皇戦地誌に関する意見
 - C1 皇戦地誌とは如何なるものとなすべきや
 - C2 皇戦地誌とは如何なるものとなすべきや
 - C3 皇戦地理学について
 - C4 地誌は如何にあるべきか
 - C5 皇戦地理学の意義
 - C6 皇戦地誌をして如何なるものたらしむべきか
 - C7 皇戦地誌についての私見
 - C8 皇戦地理学素描

- D 學戰原理(無署名:昭和15年2月)
- E 東方問題の基礎条件
- F シンガポールの軍事地理的考察
- G 西貢港の地政学的位置に就きて

DTは『大東亜地政学新論』での分担執筆地域上のコアメンバー以外の執筆者は、藤田元春(支那)、兼子俊一(蒙疆)、堀川侃(印度支那)、吉田敬市(朝鮮水産)、村上次男(ハワイ)、和田俊二(大洋州)、河地貫一(豪州)、村本達郎(ニュージーランド)、藪内彦彦(中支)

SCは『世界地理政治大系』で執筆予定の地域で未刊行分地名に下線が入っているのは軍務先、出征先

参考文献:山野(1999)

本邦に於る官撰地誌編纂の概要

(報告 室賀)

一、明治以前の官撰地誌

本邦に於る官撰地誌編纂の濫觴は周知の如く是を和銅の古風土記に求むべし。是より先履中紀四年の條に四方の志を達せしむと見ゆるを以て其の初見となすものあれど、寧ろ之は實際行政上の必要より爲されたる地方記録にして、後世の太田文或は檢地帳に類するものなるべしと推測せらる。之に對し風土記は實に一貫せるイデオロギーを以て統一せられたる純然たる地誌たる面目を存するもの、蓋し奈良朝に至つて我が國家の体制全く整ひ國威漸く揚ると共に國家意識の勃然として昂揚するものあり、この時に當つて國史を編纂して國体を明かにすると共に、之と並んで皇國の地誌を集成し、この「うましくに」が如何に皇化に浴したるかを顯揚せんとせしは、誠に時宜を得たるものと認めざるを得ず。之を現存古風土記に就いて見るに、詔勅に應じて諸國の産物、地の沃瘠を記載するも、尚諸國に於る神々の説話を記載すること多く、大和朝廷によりて之らの國土が如何に經營せられたるかを明かにするに力点を置きたるものゝ如し。古風土記中最も漢風を存すと稱せらるる常陸風土記に於てすら、その語るところは此の新附の地に於る大和民族の地理的發展にあり、かゝる國土への認識ありてこそ、初めて皇化蝦夷地を潤し、國威遠く肅慎に及びしに非ずや。

然るに其後幾許もなく風土記散佚し、平安朝以降又地誌の撰述を見ず。(醍醐天皇の延長年間再び風土記を録上せしむといふも、之に就きては筆者異見あり、姑く取らず) 當時の知識階級も亦我が國土に関する正しき認識を失ひ、却つて儒生、僧侶等は外來文化の思想戦に眩惑せられ、古來葦原中津國と稱へられし我國を以て粟散邊土の小國と觀じ、偶々日本を優れたりとする者も佛法弘通の國なるが故に勝るとなす。(かゝる中世の邊土觀に就きては内田秀雄學士的好論文あり、史林二二ノ一) 思ふに佛教に於てはかの須彌山を中心とする雄大なる世界觀あり、後世徳川時代に於ても印度を中心とする世界圖(南贍部州万国掌集圖)が我が國僧侶の手によりて作成せられたる如き、その影響の長く且つ深きを知るべし。

一方支那にありては古く禹貢あり、漢書以降歴代の正史みな地理志を載せ、元以降明清に至るまで別に一

統志の撰述あり、世界を擧げて中夏の屬國視せしこと周知の事實なるが、三千年以來不斷に培はれたるかゝる思想が、今日に至るまで支那人の世界觀に如何に有力なる影響を及ぼせしかは論を俟たざるところなり。さればこそかゝる學戰に壓倒せられ、自ら東夷と稱して慚づることなき日本人を出し、畏多くも皇室の御先祖を吳の泰伯の裔とする奢すら現はるゝに至りしなり。(鎌倉時代の僧釋圓月の日本史に見ゆといふ。江戸時代に入り林道春等もこの説を支持せり) 前述の邊土思想といひ、日本人にして而もかゝる驚くべき謬見に陥りたるは、全く支那印度の總力戰的地理學に對向すべき一篇の皇國地誌を缺除したるために外ならず。幸にこの間にありて元寇を卻け、南北朝の正閏を明かになし得たりしもの、實に我國を神國なりとする國民的信念の支持ありしに由る。而してかゝる信念を傳へたるものは平安朝以來博士家に傳授せられたる日本書紀等の史書にして、若し之らも風土記同様散逸したらんには、神皇正統記の一篇すら今日あるが如き形に於て存せしや否やも計るべからず。固より尊嚴なる我が國體は一、二史書の逸亡によりて云爲せらるべきものに非ずと雖も、なほ國史地誌の學戰に於る極めて重要な意義を知るべきに非ずや。

かくの如くにして我國の官撰地誌は風土記以來久しきに亘り遂に中絶して又顧みられず、倭寇の發展、豊公の朝鮮征伐、或は御朱印船の海外貿易等によつて漸く海外意識の昂揚を見たるも、指導者その措置を誤まり、この間に得られたる地理的意識も、それが西歐に於る當時最新の知識と軒輊するところなかりしにも拘らず遂に學戰的に体系化せらるゝに至らずして已み、そのまゝ鎖國の時代に入れり。

江戸時代は國內交通の發達、一般文化の上昇に伴ひ、多數の藩撰地誌を初め各種の地理的著作を簇出せしめたるが、その体例に至りては多く漢土地誌のそれに倣ひ、こゝにも學戰に於る敗退の跡を見る。且又その統一的日本地誌に於ては僅に林羅山の本朝地理史略一卷(寛永二十年)を存するのみにして、それも當時來朝せる朝鮮信使の求に應じて撰せられし小地誌に過ぎざりき。

其後將軍吉宗時代の實學勃興に伴ひ、五畿内志の如き統一的地誌の萌芽を見たるが、この機運はやがて幕府の尅大なる日本地誌編纂事業となりて結實せり。即ち文化七年大學頭林衡(述齋)本邦地誌の風土記以來

全く廢れたるを慨し、幕府に建議して昌平坂學問所に地誌取調所を置き、多數の學徒を各地に派遣し、夥しき資料を蒐集し、まづ江戸府内、武蔵、相模等の地誌を撰せり。新編江戸府内風土記稿若干卷（今傳らず）、新編武蔵國風土記稿二百六十卷、新編相模風土記稿一百二十五卷これなり。更に伊豆の調査に及びしも不幸にして中心人物たる林述齋歿し、幕政又漸く傾きて遂に業半途にして中絶せられぬ。初め述齋の地誌編纂を企劃するや先づ資料の蒐集に努め、各種の地誌、地圖、氣候、社寺縁起、金石文等に至るまで凡そ地誌編纂の用に備ふべき各種の典籍を網羅し、同時に松平冠山侯、間宮士信等をして是が解題書を作成せしむ。編集地誌備用典籍解題二十八卷付録一卷は即ちその成果にして、収載書二千餘部、誠に誇るべき日本地理學書誌なりとす。

かゝる用意の下に編纂せられたるこれらの地誌は、その豊富なる資料とその正確なる實證性に於て實に千古の價値あるもの、今日撰せられて明日棄てらるゝ雑地理書と類を異にする所以も亦茲にあり。思ふに地誌に於る資料への高き評價は既に和銅の古風土記に於ても見らるゝところなるが、その殊に精覈周到なる點に幕府地誌の特色を存せり。然れどもその編纂の時たるや恰も江戸時代の爛熟期にあり、この大編纂事業も確然たるイデオロギーを有し得ず、空しく支那史誌の後塵を拝したるは最も遺憾なりといふべし。

二、明治政府の地誌編纂事業

述上の如き幕府地誌の精密なる實證的學風を貴重なる遺産として繼承し、加ふるに明治維新の大理想を盛りて和銅以來の闕典を補はんとせしもの實に明治政府の地誌編纂事業にして、既に題して皇國地誌といふ、その意圖するところを見るべきなり。然れ共この大事業も亦半途にして中絶するの已なきに至りぬ。今その顛末の概略を記して参考に供せんとす。

明治維新の大業成るや、二年勅して三代實録以降絶えたる國史の官撰を命ぜられ、史局を舊和學講談所に開設せしめられる。總裁は太政大臣三条實美にして、これ今日東京帝國大學内に存する史料編纂所の濫觴とす。翌五年改めて太政官正院歴史課並に地誌課を置き、修史と並ひて地誌を編纂せしめらるゝことゝなれり。これ實に沼津兵學校頭取陸軍小丞塚本明毅の三条侯に

建議するところその上文を起草せしものは河田龍氏にして、地誌課開設と共に塚本氏は陸軍より轉じて初代の地誌課長となり、河田氏亦之に従ふ。爾後相携へてこの大業に盡瘁せし両氏の功績は眞に没すべからざるものあり。

かくして同年九月太政官布告を以て皇國地誌編纂の旨を宣すると共に直ちに府縣に令して各種資料の蒐集を開始せるが、恰も明治六年ウイーンに於て萬國博覽會開催せらるゝや、地誌課に於て伊能忠敬の實測圖による日本地圖を作成し、之に略地誌を附して遠く奥國の首都に送り、同國政府より賞牌を送らるゝところなる。蓋し本邦方輿の學初めて異域に輝き、以て學戰の端緒たり得たりしも、事小なるが如くにして而も逸すべからざる意義を有すとなすべきなり。この際地圖に附したる略史を根幹として之に改訂を加へ、日本地誌提要七十七卷成る。その首卷二冊に塚本氏の上表文を附して上に獻せしは明治八年一月にして、その全く刻成せられたるは十年春なりき。

是より先、六年五月官制に變動あり、地誌課を内史に屬し、塚本氏少内史となり、業漸く緒に就かんとするの時、宮城大災に遭ひ、舊幕府より引き繼ぎ或は其後蒐集せし地誌課の圖書盡く烏有に歸す。紅葉山文庫舊藏の伊能忠敬實測圖原本の如き貴重なる資料を失ひしも實にこの時にあり。當時者の落膽想ふべきに非ずや。然れ共課員等この災厄に屈せず再び資料の蒐集に専念し漸くにして略々舊態に復するを得たりしも、其後頻りに官制に變動あり、地誌課は正院より内務省地理寮に移され、次で修史局（歴史課の後身）に合併せられしも、塚本氏と修史局總裁伊知地正治と議合はず、明治十年十二月急に地誌編纂のこと廢せらるゝに至り、塚本氏、河田氏共に官を辞す。この間地誌課再び災あり、大なる抱負を以て出發せし皇國地誌の事業も備に辛苦を嘗めしこと、當時者の爲に同情の念を禁じ能はざるものあり、幸にしてこの事業は直ちに内務省地理局に引繼がれ塚本氏等入官に復するを得て日本國郡沿革考其他數部の書を編纂し、又各種の地圖を刻せしが、明治十八年最大の功勞者たりし塚本氏遂に宿願たる皇國地誌の刻成を見ずして卒し、地誌編纂の方針にも若干の變更を見るに至れり。

是より先明治八年皇國地誌編纂の方針を決定し、各府縣に編輯費用を給し、管下の各村にて村誌を撰して郡に集め、各郡にて又郡誌を撰して之を上らしめ、然

る後之を基として地誌課に於て各國誌を纂輯し、以て全國地誌を大成せんとせり。然れ共各府縣の調査遅々として進捗せず、遂に明治十六年地理局櫻井勉氏この計畫を廢して各地の調査資料並に關係圖書類を地理局に收納し、塚本氏の没後櫻井氏自ら局員を率ゐる安房に至りて實地調査を行ひ、安房國誌三卷を撰して明治十九年之を上梓せり。次で局員を關東を中心とする各地に派遣し、十九年秋より二十二年春に至つて東京、武藏、相模、上總、下總、常陸、上野、下野、甲斐、三河、尾張等の諸國誌を脱稿するに及びしが、恰も局長櫻井氏徳島縣令に轉出して再び中心人物を失ひ、右の稿本いづれも公刊せらるゝに至らず、翌二十三年地誌課は文部省に移管せられ、更に帝國大學に屬して史誌編纂掛となり、重野安禎博士の統括するところとなりしも、僅に前記地誌提要の補修等に止まり、見るべき成績を擧げ得ずして二十六年遂に史誌編纂掛も停止せられ、地誌課開創以來孤壘を守りし河田氏も官を辭し、かくして二十年間に亘る皇國地誌編纂の事業も全く中止の已なきに至れり。

かくの如く塚本、櫻井、河田氏等の苦心にも拘らず、上司人なく皇國地誌の本義を解せずして地誌課を冗物視し、各府縣亦之に熱意を示さず、編纂の當時者亦運當の方途を誤り、遂に奈良朝以來の大業を中絶せしむ

るに至りしは痛恨に堪へずといふべし。而してこの事業に於て地誌として世に残せしものは前記の如く日本地誌提要と安房國誌の二部のみにして、前者は倉卒の間に作成せしもの、後者もその内容は維新政府の事業たるに相應せざるものゝ如く、いづれも地誌として高く評價せらるべきものに非ず。蓋し安房國誌の如きは府縣の遲滞を憤りし櫻井氏の拙速主義の所産とも見るべく、苦心蒐集せし資料を考慮するの遅なかりし爲、遂に後人を益すること少き小地誌たるに終りしは惜しむべきところとなす。後代の學者がこの地誌課の事業中大に裨益せらるゝところは寧ろこれらの地誌よりも之が編纂の準備として行はれたる各種の予備的副産物にして、例へば塚本氏の三正綜覧の如き、又河田氏の地誌目録の如き然り。殊に地誌目録は恰も前述の幕府に於る編集地誌備用典籍解題にも比すべきもの、二千四百部に達する地誌の書目として今日に至るも極めて貴重なる價値を有す。

かくして官撰地誌は全く廢せられしも、明治末年吉田東伍氏の大日本地名辭書（實は辭書といふよりも歴史地理的地誌といふべし）、山崎直方、佐藤傳藏兩氏の大日本地誌あり、斯業全く民間に移りて以て今日に及べり。

印度支那半島に於る英佛の侵略とその政策

(昭和十四年十二月)

(擔當 室賀)

一、植民地獲得の経緯

印度支那半島(註一)に封する白人勢力の侵攻は夙くポルトガル人によって記録せらるゝも、現在見る如き近代的植民地の建設は主として十九世紀以降英佛兩國によりて成就せられたるものなり。

英佛兩國が先進葡蘭諸國を追ひ南東アジアの海上に觸手を延ばせしは既に十七世紀の交にあり。佛蘭西は頻りに宣教師をこの地方に送りて宗教侵略を開始し、續いて佛國東印度會社の活躍となり、一六八五年には泰國ブーケット島錫探掘の獨占、半島西岸ソクラーの領有その他の重大權益を収め、一六八七年には軍艦三隻兵千四百を送りて盤谷その他に駐屯せしむるに至れり。このことは當然佛國東印度會社との利害の衝突を來し、この間泰國內には有力なる攘夷黨の擡頭を見、遂に一六八八年泰國史上有名なフアウルコン革命(註二)となりて、英佛兩國ともに一時タイ國より政治的野心を抛棄するに至りしものなり。

その後この地方の商權を掌握せしものは和蘭なりしが、これより後約百年を経て十八世紀末葉、英國は再び印度支那半島に侵略の歩みを進め、一七五九年マラッカを占領し、一七八六年英國東印度會社は僅か六千佛の年金を以てピナン島をケダの酋長より割讓せしめ、更に一八〇〇年海賊の跳梁に名を借りて對岸ウエルスリーを奪取し、茲に初めて馬來經略の基點を築き得たり。然れども富饒にあつてはかゝる港市の占據は専ら自國貿易發展の爲の根據地となるに止まり、なほ大規模なる土地領有を意味するに至らざりしものゝ如し。

英國のかゝるマレー半島經略に封し、佛國亦時を同うして安南國に策動するところありたり。佛蘭西は十八世紀の中葉安南王との間に國書を交換し、ツーラン附近に於ける居留地獲得、軍艦派遣等若干の地歩を占めたりしも、本國に於る七年戦争の紛紜、印度に於ける英國との角逐の敗退等によりその侵略策も漸く消極的たらざるを得ざりしが、當時交趾支那に布教せるアドラン僧正ビニョー・ド・ペーヌこの形勢に慨然たるものがあり、恰も安南に内亂あるに乘じ、廢王阮福映を援助して佛蘭西と攻守同盟を結ばしめ、その代償と

して崑崙島の領有その他の權益を取得せり。これ一七八二年の秋、恰も英國のピナン島を得てマレーに最初の據點を築きし翌年に当たる。廢王阮福映はかくして佛蘭西の援助により安南統一に成功し一七九九年帝位に即きたれば、佛蘭西の經略は當然なほ進展すべかりしに、佛本國の大革命により再び頓挫の已なきに至れり。されどビニョー・ド・ペーヌの打ちたるこの一石は纏て後述する如きナポレオン三世の安南經略の礎石となりしもの、傑僧の雄圖空しからざりしといふべし。

十九世紀に入るや英佛の勢力は初めて本格的に印度支那半島に浸潤するに至る。英國は一七〇〇年代に於て略々印度經營の實を収め、更にその鋒を東に延ばして大規模なる行動を開始せんとせり。かの一八一九年に於けるラツフルスの新嘉坡占領は實にその一具現にして、茲に英國の東洋侵略は新たなる段階を劃せるものといふべし。世人説をなすものこの新嘉坡占據を以て維納會議の決定によるマラッカ抛棄の代償なりとするも、この不毛の小島に上陸せしラツフルスの腦裏を歸去せしものは、想ふに些々たる南洋貿易の利に非ずして實に支那への全面的進攻なりしならん。蓋し支那は當時勃興期にありし資本主義諸列強の垂涎して已まざる好餌たりしのみならず、英國の勁敵たる露西亞は夙くシベリアを領有し北方より極東を睥睨するの勢を示せり。この勢を挫き老大清國を自家藥籠中のものとせんには、英國は道を何回に取り南支那に先づ勢力圏を樹立せざるべからず。況や炯眼なる當時の英國政治家は、露國のバルカンに南下する力を阻まば勢の趨くところ自から東方事態急を告ぐべきことを洞察せるに於ておや。されば新嘉坡の經營は實にかゝる英支を結ぶ南海ルートの上に巨然たる大礎石を置き、その東洋政策の基點たらしめんと欲せしに他ならず。

かくして英國は一八二四年の倫敦條約により再びマラッカを和蘭より讓受け、三六年政廳をピナンより新嘉坡に移し、四周の土侯國と通商条約を結びてその保護下に入れ、緬甸への工作と相並んで着々その體制を整ふところありき。かの一八四〇年の阿片戦争の勃發は實に絃上の英國の意圖を明かにせしものにして、又一面より見れば、かゝる南洋に於る經營の成功を背景とせしものと斷じ得べきに似たり。その結果一八四二年英國は香港を正式に清國より讓渡せしめ、更に四六年にはラブアン島をボルネオ酋長の手より奪取して新嘉坡と共に犄角の勢をなし、かくして南支、南洋に

於る英國の制覇は概ね實現に近づきつゝありき。

果して一八五四年クリミア戦争によりて圖南の志を挫かれし露西亞は、東して支那の邊境を犯さんとす。英國は之を防衛し極東に於る自己の覇權を確固たらしむべく腐心し、アロー號事件、巨文島占領等屢々事を極東に構へしが、遂に我が日本の實力を認識して之に倚頼するの上策なるを信じ、こゝに日英同盟の締結となり、かくて明治廿七、八年戦役に於て我が國が露國の野望を全く挫折せしめしこと人の知るところなり。

この間に於て英國はその對東洋進出根據地としてのマレー經營を怠らず、殊に一八六九年の蘇士運河開通によりこの地が一層その重要性を加ふるに至るや、七四年ベラ酋長よりデインデインスを略取し、且つベラ、スランゴール、ネグリ・スムビラン、パハン諸國に英人顧問を置くに至れり。かくして英國の勢力は北上して泰國に及ぼんとし、更に緬甸と連ねて支那雲南省を窺ふ形勢を示すに至りしも、こゝに意外の強敵ありてかゝる英國勢力に拮抗せしものあり。これ即ち、安南に於ける佛蘭西勢力なりとす。

前述の如く佛蘭西は本國に於ける大革命の勃發によりて一時安南より退治するに至りしが、ナポレオン三世帝位に即くや蓋にビニョー・ド・ペーヌ等の採りし、政策を復活し、再びこの地に魔手を振はんとせり。然るに安南は既に佛蘭西との修交を悦ばず、基督教を排斥して宣教師を殺害するに及び、一八五九年、佛蘭西は之を口實として西班牙と聯合し、艦隊を派してツーランを攻撃し、翌年交趾支那の要地を占領せり。かくして一八六二年西貢條約なり。佛蘭西は交趾支那三州と崑崙島を割讓せしめ、ツーラン港その他の開港、メコン川溯江權等の重大權益を収め、翌六三年にはカムボヂヤをもその保護國となし茲に確固たる侵略の地歩を占め得たり。而も勢威更に北に延びて遂に一八八四年安南の宗主權を支那より奪ひて之を保護國とし、一八九一年この地に印度支那聯邦を組織するに至れり。

かゝる佛蘭西の安南經營の一半の目的が亦支那への進出にありしこと瞭然たる事實にして、佛蘭西は夙より支那奥地の資源に垂涎し、こゝに入るルートとしてメコン川の水運に着目せりといふ。然るに一八六六年、ド・ラグレ・ガルニエ等によりて行はれたるメコン川探險は、四川省への溯江に成功せしにも拘らず、その政治的經濟的價值に於て悲觀的なる報告を齎さしめ、その結果佛蘭西の關心は更に北してトンキンのデ

ルタ、紅河、黒河の水路に移り、安南保護領化の後、佛蘭西勢力の政治的中心は西貢より北上して河内に樹立せらるゝに至れり。まことに越南は滇粵の唇齒、唇齒既に敗れて支那は南部諸州に對する佛蘭西の功勢を防ぎ得べくもあらず、一八九五年三國干涉の報酬として南支三省の鑛山採掘權と鐵道敷設權を與へ、更に一八九九年廣州灣租借權、雲南鐵道敷設權を許容せしも亦勢の然らしむるところといふべし。

然るに南支那は固より香港を有する英國が自己の勢力圏たらしめると欲するところ、雲南鐵道の敷かるべき紅河のルートも亦英國の窺かに垂涎せしところなり。蓋し英國は緬甸より雲南へのルートを延長して一は揚子江の上流に連絡せしめ、他は紅河ルートに結んで印度支那半島半島の基底部を横斷せんと欲す。而もこれらの希望は地の利を得たる佛蘭西勢力の擴大を防ぎ、一方佛蘭西の力が安南より西して泰國に及ぼんとするや、これが阻止に努力し、十九世紀末葉より今世紀の初頭にかけて英佛勢力は南支並に泰國に於て相拮抗するの形勢を示せり。日露戦役の當時、佛蘭西が頻りに露國に好意を示せしは、その一半の理由をかゝる東洋に於る英佛兩國の關係に求め得るところなりとす。

十八世紀末に於ける印度支那半島の形勢を見るに、英國は既に緬甸、馬來を略取し、佛蘭西は安南に宗主權を確立し、この二頭の豺狼の爪牙を腹背に受けてし泰國の運命こそまことに風前の燈の如くなりき。果して佛蘭西はまづラオスカもと安南なりしを口實として一八九三年こゝに出兵し、泰國よりルアン・ブラバンの地方を奪取し、更に之に満足せずシヤム灣東岸チャントプリ州地方の軍事占領を行ひたり。かゝる佛蘭西勢力の西漸を悦ばざる英國は、一八九六年佛蘭西と折衝してその侵略の阻止に成功し、相互の許諾なくして泰國に出兵せず、又他國の侵略には共同して之を防衛することを約し、更に一九〇四年再び英佛協商してメナム川を境として兩國の勢力範圍を決定し、且つ相互に泰國の獨立を保障すべきことを規定せり。かくして泰國は緩衝國として終にその獨立を維持し得たりしも、貪婪なる英佛兩國の魔手は之を以て已むべきにあらず、一九〇七年佛蘭西は治外法權撤廢の代償としてカムボヂヤ西部の地帯を蠶食し、一九〇九年英國も領事移審權廢止に代へてマレー半島に於けるハリス、ケダー、トレンガム、ケランタン四州を割讓せしめたり。こゝに至つて印度支那半島に於る土地獲得の葛藤は一應安

定し、今日見るが如き國境を現出せしめたるものとす。

之を通観するに英佛兩國の印度支那半島に於ける侵略は凡そ三期に分つことを得べし。その第一期は十八世紀に於ける縁邊要地の占取にして、即ち英國の卑南島奪取、佛蘭西の崑崙島及び西貢地方への工作に現はるゝところなり。而してこの時代は主として南洋に於る自國貿易の發展に重きを置きたるのゝ如し。その第二期は十九世紀に於ける發展時代にして、英國は新嘉坡占領に初まり半島南部の諸州を保護領化するに至り、佛蘭西も遂に交趾支那を領有しカムボジャ、安南を保護國とせり。第三期は今世紀初頭に於る固成時代にして、英佛それぞれ泰國の領土を掠め以て現在の國境を形成すると共に互に泰國に於ける勢力範圍を劃定し、一應の安定に入りたるものなり。

而してこの第二期發展時代に於て英佛兩國とも銳意この地方の植民地獲得に力を注ぎしが、而もその眞意は必ずしも馬來或は安南の資源、貿易にのみにあるに非ず、寧ろ支那は極東に對する工作基地たらしむることを一半の目的とせしに既に述べしところなり。思ふに印度支那の藩屏たり。この地を豺狼の吞噬に委ねて何ぞ禹域の全きを保せんや。歴代支那王朝の強盛なるもの常に印度支那諸邦をしてその正冊を奉せしめしは史乘に明かなるところ、今英佛兩國の極東侵略がこの地を基點とする所以の偶然に非ざるを知るべし。今や日本が東亞新秩序建設に邁進しつゝあるの時、支那を窺視するこれら舊勢力の印度支那半島に於ける存在が果して許容せらるべきものなりや否や。退嬰を事とする堂上君子の三省を庶幾する所以なり

(註一) 本篇に於ては泰國、英領馬來、佛印を主とし、緬甸は擔當者米倉君に譲りてたゞ關涉するところに止む。

(註二) Constantin Faulcon は希臘人にして當時の泰政府に有力なる位置を占め、英國東印度會社の勢力と拮抗する爲佛蘭西勢力と結びしが、遂にこの年處刑せらる。因にフアウルコンの妻は日本人なりといへり。

二、英領馬來に於る英國の政策

英國の馬來侵略が、この地の極東或いは太平洋に於ける活動根據地としての高き評價に基くものなりしことは既に述べしところなり。このことは今日に至るまでこの植民地に對する根本方針として不變に堅持せら

れ來りしものにして、かの新嘉坡要塞の築造こそかゝる英國の意圖を明白に具現するものといふべし。新嘉坡軍港の問題は華府軍縮會議以後初めて世人の注意を惹きし如きも、而もこの地に軍事施設の行はれしは夙く一八八二年にあり。殊に一八九〇年より九三年に至る間その強化の爲に海峡植民地は年々十萬磅の釀金を行ひしことありて、既に今世紀の初頭には堂々たる大艦隊を容るべき金城湯池を現出し居たりしなり。

かゝる軍備の充實と相並び、英國はまづこの地經濟的開發を第一の主眼とし、僅々半世紀の間に見事なる植民地を形成し、且つこの狭小なる半島を以てゴム・錫に於ける世界制覇を完成せり。而もかゝる經濟開發の眞の意味は坊間にいふ如き利潤の占取のみならず、寧ろ馬來自身の政治經濟的實力を育養し、以て亞歐連絡の關門たり南洋海面の總括者たる馬來の地理的位置の優秀性を強化せしめんと欲せしものと解すべし。従つて馬來に於る英國の政策は、この植民地自體の繁榮を希求し、極端なる本國主義に奔ることを避けんとするものゝ如し。これ後述する佛印於る佛蘭西の政策と好箇の封照をなすもの、大盜と小盜と自からその氣宇を異にせるを知るべし。

英國當局者がその開發の當初より馬來の熱帶農業に留意せしことは、かの有名なる新嘉坡植物園の創立が既に一八二二年に溯るを以つても知り得べし。この植物園が新種の移入と栽培とによりて如何に馬來農業の發展に資したるかを想えば、その設立を珍花ラフレシアにその名を残すラツフルスの植物学に對する個人的嗜好にのみ歸せしむるべきに非ず。馬來はその領有當初の胡椒栽培をより甘蔗、珈琲等各種の變遷を經、ゴムに至つて大なる成功を收め、他方古來有名なる錫鑛の大規模なる採掘を開始し、兩者相並んで共に世界産額の四割内外を産出し、以て斯界に君臨するを得たり。殊に一九三〇年以降の世界不況に際しては、この受難期を巧に利用し、ゴム、錫共に國際限産協定を結び、競争生産國をして強制的に之に加入せしめ、自ら最高の割當量を享有すると共にこの協定の事實上の支配者たる位置を獲得せり。(註一) この大生産力とこの巧妙なる工作とを得て新嘉坡は初めてその自由貿易港たる機能を充分に發揮し、近隣諸國のゴム、錫は滔々として馬來に流入し、その仲繼貿易に委ねるに至れり。而もこの兩者はいはゞ南洋地方の特産ともいふべきものなるが故に、馬來は世界に於るゴム、錫の供給に絶大

の勢力を得、以て兩者の商權を壟斷しつゝあり。現世界に於けるゴム、錫の最大消費者はアメリカにして、その需要の大部分を馬來に仰ぐが故に、人屢々馬來の斯業を支配するものは米國産業なりと説くも、吾人は寧ろ米國産業の隆替を支配するものは馬來のゴム、錫なりといはんと欲す。英本國は故らにこの兩産物を馬來より購求せず、却つて蘭印、ポリヴイア等の外國に求め、馬來産品の過半を米國に送りつゝあることは、思ふに米國を馬來に緊縛せしめ以て南洋に於ける英國權益の番犬たらしめんとする狡智に出づるものと斷ぜざるを得ず。而もかゝる好諂なる詐略を実現せしめ得たるものは、要するに前述の如きマレーの地理的位置の優秀性と之を支持する大生産力にありしことを俟たず。これ實に英國當局者が不斷に馬來經濟開發に専念したる實に他ならざるなり。

馬來經濟開發に於てその樞軸をなしたるものは英國の資本投下にあり。R. Kindersley が一九三一年末の推定によれば英國の對マレー投資は實に一億八百萬磅に達し、そのうち九千萬磅はゴム栽培に投下せらる。殘る千八百萬磅も鑛業或は交通設備等に充用せらるゝものなれば、この巨額の資本は全く馬來の産業にその全部を投下せらると稱するも過言に非ず。加ふるに日米並に華僑の投資も多額に上り、相共に馬來經濟今日の賑盛を招來せしものなり。

かゝる經濟發展の爲の具體的方策としてまづ注目せらるべきものは、驚くべき交通網の整備にあり。鐵道は延長一〇六八哩、現在西岸線と中部線と二條の縦貫線を主要幹線とし、いづれも盤谷と直通して泰國を新嘉坡のヒンター・ランド化すると共に半島の大動脈たるの運命を有するものなり。之に對し道路は延長七五〇〇哩、極めて高度の整備の準備を見、産業地域に於ける毛細管たと共に又横斷鐵道なき今日に於て東西兩岸の連絡にも重要な役割を演じつゝあり。現在鐵道並に道路の分布は西海岸に密にして東海岸疎なれど、東部の漸次開發せらるゝに伴ひこの方面への建設も進行中になるが如し。G. M. Andrews の計算によれば、鐵道一哩當人口三九七七人、道路一哩當面積五千方哩にして、この數字は我が日本を凌駕し、アジア諸國第一位にあり、以てその如何に高度の發達を遂げしかを知るべし。

一方産業の發展に緊要なる勞働力の問題に對しては如何。馬來半島の土着民は所謂馬來人なるが、人くち

稀少、且つ能力低く、英國の近代的植民地建設に参加する資質に缺くところあり。さればこの目的の爲に英國は從來この地に發展せる支那人及び印度人を勞働者として拉致し來れり。一九三五年末に於る英領馬來の人口四五七萬にして、そのうち土着の馬來人は四五・九%を占むるに過ぎず。之に對し外來民たる支那人は三〇・七%、印度人は一〇・三%に達す。而も支那人は能力に於て最も優れ、各方面に著しき進出を示し、殊に熟練勞働者は之を措いて他に求め難き状態にあり。されば英當局も移民の保護には充分の注意を拂ひ、印度人に對しては移民基金制度を設け、支那人に對しては華民保護局を以て之に當らしめ、且つ州議會等にも支那人を参加せしむる等各種の手段を講じつゝあり。併しながら馬來産業かその勞働力を全く海外移民に仰ぐことは、その隆々たる外貌のうちに秘められたる最大の弱點にして、充分なる注目に値すといふべし。

英國が地政學的因由により馬來の經濟的繁榮を希求し、従つてその政策は産業開發に主眼を置くことかくの如し。されば馬來に對する英國の態度が極端なる本國主義に奔らざるは寧ろ當然といふべきも、之を以て英國の呼號する如くこの地に植民地搾取なしとするが如きは全く單なる詭辯に過ぎざるものなり。土着民たる馬來人はケダー、ケランタン、パリス、トレンガヌ等北部諸州に於て政府よりの土地讓渡に特典あり、一應の保護を受くるが如きも、實はその能力の低劣さによりて近代的植民地建設への参加を阻まれし馬來人をこの地方に迫込み、移民による人口の急激なる増加によりて不足せる食料即ち米の生産を行はしめんとするものに他ならず。又英領馬來の政治組織は直轄領たる海峡植民地と九つの保護國とに別れ、後者は從來の主によりて組織されし政府と州議會を有し、或る程度の自治を認められるゝも、之も實はかの divide and rule の一形式に過ぎず、小王國を對立せしめて馬來人の結束を拒む一手段たるものなり。但し馬來人には見るべき民族意識なく、馬來植民地建設に當り英國が恰も無人の野を開くが如く意のままに之を遂行し得たりしも、一にはかゝる馬來人の無抵抗によるものと信ぜらるゝところにして、されば中途に於て英當局者は寧ろ領内統一の方途に出でんとせしが如し。かの聯邦州の結成の如きその一具現なりしが、其後再び地方分權主義に復歸し、現在にありては聯邦州も非聯邦州とその實質

に於て大差なきを見る。されどかゝる分権主義の復活は固より地方自治の尊重にも非ず、又民族的問題の懸念にも非ずして全く財政的搾取の意圖よりなされしものなり。即ち直轄領植民地と保護領との間に自ら差違あらしめ、一方各保護領の發展に藉口してその州に經濟開發の費用を負擔せしむる爲には地方分権主義によるを最も便宜なりとするに由る。海峡植民地と聯邦、非聯邦諸州を問はず、産業開發の爲の費目が最大を占むるはこの植民地に對する英國の根本方針の然らしむるところとして怪しむべきに非ざるも、海峡植民地にあつては治安、教育、衛生等の社會的施設に對する費目比較的多く、歳出の二五%に近きに對し、他の保護領諸州にありては僅く一〇%を超えず、歳出の殆ど全部が直接間接に開發費に充當せらるゝを見る。殊にジョホール州の如きは歳出の二四%に當る年額五〇萬磅の英本國への獻金を課せられつゝあり。而も各州は之を以てなほ足らず、更にそれぞれ公債を負ひて開發費に充つ。然るに海峡植民地は、これ亦公債を有すと雖も、その半は新嘉坡及び卑南の市政府及び港務委員會に、他の半は馬來聯邦州に再貸付せられ、寧ろ之によつて利鞘を収むる立場にあり。

かゝる直轄領に厚く保護領に薄き政策の一例を吾人は更に一九三三年の新通貨法に見出すことを得べし。從來馬來に於る通貨發行は海峡植民地に一任せられ、他の保護領諸州は之に關する責任を課せられざりしも、この新法案によりて諸州を之に參與せしめ、各州それぞれの比率による All Malaya Fund を新たに設定し、紙幣發行額をカバーすべき Currency Fund の収入による剩餘金をこゝに繰入れ各州の要求に應じて拂戻をなすも、不足の時はこの All Malaya Fund より Currency Fund へ繰戻すこととせり。されば現在の如く幸にして Currency Fund に餘剩額ありて之を一般植民地會計に繰入れ得る時は各州その割合に應じて利益に與かれども、不足の時は補償の義務を有するのみか、萬一支拂不能の州ありとしても連帶責任によりてその分も他の各州が分擔する規定なるを以て、通貨を發行する海峡植民地當局は之によつて基金の安全性を著しく増加せしめ得たれども、保護領諸州は何ら關知せざる白人の資金運轉の爲に強制的に損失補償の義務を負ふに至りしものなり。

なほ馬來諸州の支出はその大部分を租稅收入に仰ぎつゝあるものなるが、零細農民たる馬來人には殆ど擔

稅力なく、主として外來移民たる支那人の負擔によること注目すべき現象なりとす。これ即ち支那人の商業と産業とが馬來發展の基金をつくと稱せらるゝ所以にて、勞働力の供給と租稅の負擔とに中樞的位置を占むる英領馬來の華僑問題こそ將來利目に値するものなりと思惟す。されば、前述の如く英當局も支那人の保護には充分意を用ひつゝあるが、而も非人道的なる阿片專賣制度を布きて之を支那人に賣付け、彼らの孜々たる勤勞によりて得たる所得を搾取することを忘れず。海峡植民地に於ける阿片收入は實に租稅收入總額の四〇%に及ぶ。而も酒、煙草も回教徒たる馬來人は多く之を嗜好せざるを以て、之も大部分を支那人の負擔するところと見做して大過なきなり。

之を要するに英領馬來に於る英國の植民地政策は經濟力を充實し、この地の優秀なる地理的位置を強化せんとするにあり。されば馬來は單に馬來それ自體としてみらるべきものに非ずして、西に印度を控え東に支那濠州を擁する英國東洋政策の重要據點として考察せらるべきを要す。この地に存する「香」上銀行、渣打銀行、有利銀行等の如きも、馬來經濟開發の爲のいはんより寧ろアジアに於ける英國金融網の有力なる一翼たる點に注意せざるべきものを有す。一般に馬來經濟はかゝる地勢學的根據に立ち、總力戰的形態を採る。東亞新秩序建設の側壓たるもの、決して新嘉坡の海軍根據地のみに非ざるを知るべし。

(註一) ゴム限産協定加入國はマレー、蘭印、英印、セイロン、ビルマ、北ボルネオ、サラワク、タイにして、蘭印、タイを除き總て英帝國領なれば、こゝに有するマレーの發言權の大なるは言を俟たず。

錫は協定參加國七カ國に對し決議投票數廿票を次の如く割當れらる

馬來 五、ボリヴィア 四、蘭印 四、タイ 二、コンゴ 二、ニジェリア 二、佛印 一、

即ち英國系はマレー、タイ、ニジェリアにて常に確實に九票を有し、その他の一國と結べば過半數を得て自己の欲するまゝの決議を採擇し得べし。

三、佛印に於る佛蘭西の政策

佛蘭西が東部印度支那半島に侵略を行ひしは、その企圖するところ南支並に支那奧地への經濟的發展の爲の根據地獲得にありしこと先に續述せしが如し。この

點は馬來を以て極東政策の基地とせる英國の方策と極めて類似するところありしも、その後の植民政策は英國の馬來に於けるが如き一貫せる根本方針なく、結局土民の搾取を主體とする極端なる本國主義に奔せり。

併しながらこの兩者の相違は又土着民族の問題にも歸せらるべきものにして、英國は能力低き少數の馬來人より成る馬來に於て見るべき民族的抵抗を感じざりしに反し、佛蘭西は、人口二千三百萬を數へ過去に於て比較的高度の文化と複雑せる歴史を有せる有力なる土着民族を統御すべき難事業に逢着せしことを考慮するを要す。而も佛蘭西は當初よりその統治政治に動搖ありて一定の方針を得ず、同化主義と保護主義とは統治者間に於て常に對立を見、總督の頻繁なる更迭と共にその政策も變し、徒らに植民地の民族問題を複雑化せしむるのみなりき。

併しながら結局勝利を得たるものは保護主義にして、その出張者として、その實現者として輝かしき名を佛印統治史上に残したるものは De Lanessin Paul Doumer 等なりき。ことに十九世紀末より今世紀初頭に至る Doumer の總督時代に於て佛印は全く面目を一新せりといはる。當時の佛印は嚴格なる同化主義と多數の佛人官吏の私慾の爲に疲弊沈滞し、開發は何ら進捗せず、西貢港の如きも四十年以前の舊態にあり、新嘉坡の急速なる發展に比すべくもあらざりき。

Doumer は着任以來直ちに之が改革を企圖し、まづ政治に於ける土民の傳統を尊重すると共にそれぞれの地方的事情の相違によつて統治すべく努めたり。かくして交趾支那は直轄植民地として、カムボヂヤは土王の支配する保護國として、安南は實質上植民地に近き保護國として、又トンキンに地方團體を中心とする自治國として統治せらるゝに至れり。然しながらかゝる土民の傳統と地方的事情を考慮せる保護主義が決して土民の福祉を欲するものに非ずして實は土民をして徒らに反抗に奔らしめたる同化主義の弊害を修正し、以て佛蘭西政權の強化を企圖せしもの、されば Doumer は更に第二段の工作に入り、聯邦機構を鞏固ならしむる爲關稅、通信、交通、公共事業、裁判などを聯邦政府の手に收めんとせり。この案は各州の完全なる獨立を否定するものとして烈しき反對運動を招きしが、政府は之を押し切り、その企圖を實現せしめ、かくして印度支那聯邦は完全なる政治的統一體となり、總督の權限も著しき強化を見たりしなり。

かゝる政治工作に成功せし Doumer は更に經濟工作にも鮮かなる手腕を示せり。當時の佛印財政は年々巨額の赤字に苦しみ、之を改革すべく Doumer の採りしものは間接税の徴収なりき即ち阿片、アルコール、鹽の專賣にして、之によつて莫大なる收益を擧げ聯邦財政を歳入超過に轉ぜしめ得たりしが、之が土民の利益を犠牲として行はれしものなること後に詳述するが如し。かくて財政の基礎を固め、更に公債を募りて道路、鐵道、港灣等の工事に着手せしが、之もその政治的意味を多分に有し、國內經濟開發は寧ろ第二義たるの觀あり。例へば當時計畫させられし鐵道はかの雲南鐵道と佛印縱貫線となるが、雲南鐵道の政治的は言はずもがな、縱貫線にあつてもその主眼は聯邦諸州を一線に連絡し、且つ二大據點たる西貢、河内を結ばんとする統治上の目的に出でしが如し。道路は主としてトンキン及び交趾の平野に分布し、産業開發の爲に貢獻するところ大なれども、なほマレーに於る道路網の發達に比すべくもあらざるなり。

かくの如く Doumer の政策は佛蘭西統治權の強化と土民搾取による財政の確立に向かつて集中せられたれば、産業の發展は多く顧らるゝところなく、土民農業は無視せられ、且つ本國と競争的なる一切の産業は抑止せられたり。瀉炭礦の衰退、海防セメント工業の没落は一にかゝる政策の現れに他ならず。更に未墾地の開發、貿易の發展についても當局者は熱意を示すことなく、要するに Doumer の方策は疲憊せる土民を鞭うつて専ら政府の収入を目前に増加せしむることにも努めたるものといふべし。

Doumer 去りて後もこの方針は遂に渝るところなく踏襲せられ以て今日に至りしものにして、以後善政を謳はれし Sarrant 等のなせしところも結局同化政策時代の遺物に若干の改革を與へたるに過ぎざりき。

されば、佛蘭西の佛印に對する工作の根本に存するものは土民の搾取にて、その一、二の列を擧ぐれば、まづ人頭税の賦課の如き、その最も著しきものなり。トンキンに於ては十八歳以上の土民男子に年ニピアストル五十セントの人頭税を課す。これ實に土民が一日十二時間労働によりて取得に述べしところなるか、その爲に行はるゝ阿片專賣の如き、非人道的搾取として最も排斥すべきものゝ一なるべし。禁止論なきに非ずといへども何ら實效なく、河内のみにて阿片窟千を算すといふ。害毒の滲透知るべきに非ずや。又アルコール

ルは古來土民が自家用に醸造しその粕を以て養豚の飼料に充て居たりしもの、之亦專賣となるや土民は品質粗悪にして而も高價なる酒類の購求を強制せられ、従つて苛酷なる刑を以て臨むも密造者絶えず、遂に暴動事件まで惹起せしことあり。地租その他の直接税もいづれも重税にして、従つて之が軽減を要求する聲高きも常に拒否せられ、土民の言論は極度に壓迫せられつゝあり。一方土民には強制的に兵役を課し、第一次歐洲大戰に於ては十萬の土民軍を戦火に曝さしめたりき。かゝる徵發制度は常に兵役に止まらず、労働力にも及び、政府はその必要とする公共事業を行ふに當り、労働者並にその輸送機關を徵發するの權限を有す。これは各地の理事官又はその代理者の一片の命令によりて行ひ得べく、而も官吏並にその荷物の輸送にも適用し得らるゝもの、全く土民を奴隷視せる惡法なるに驚かざるを得ず。なほ一般に労働者は契約期間中旅行の自由なく、又白人に雇傭されし労働者並に婢僕は一定の登録帳、寫眞、指紋その他の書類を有する義務ありと規定せらる。白人が土民の人格を無視すること極まれりといふべし。

されば土民の白人に對する怨嗟の聲絶えず。偶々之を緩和すべく當局の行ふ懐柔策も却つて酷しき反感を呼ぶ結果となるは寧ろ當然なりといふべし。その一例は土民官吏の制度にして、當局者は特に下級の官職を増設し、これに土民を採用してその歡心を買はんとせしが、かゝる土民官吏は却つて大衆に對し苛酷の態度を以て臨み且つ收賄を事として却つて一般土民の怨を買ひ、やがて民族的獨立運動を温醸せしむるのみなりき。又政府はこの地に於てフランス的教育を施したる土民青年を本國へ送り、以て本國文化の進歩を知らしめ、歸國後官吏として利用せんとせしも、彼らの多くは滯佛中共産思想に感染し却つて民族解放運動の主力となりし爲、現在はかゝる土民青年の留學を禁止するに至れり。

この現状にあつてこゝに駐割する佛蘭西人官吏はこの地の開發に熱心ならず、例へば、一九一一年の佛人官吏五六三名のうち完全に土語を解するもの僅に三人なりしといふ。この怠慢は殆んど一を得て傳統となれるが如く、彼らはこの遠隔の地にあつて専ら自己の保

身に努め、無事任期を了へ年金を得て故郷に歸臥することのみ夢みつゝあり。而してかゝる多數官吏の年金、年俸、退職金等は年々甚だ多額に上り、以て佛印財政を壓迫しつゝあるなり。

經濟開發は今日に至るも著しき進展なく、たゞ傳統的なる米への偏倚經濟を營みつゝあるが、最近の世界經濟の情勢に刺戟せられ漸くゴム等の栽培の發展を見たり。然れども資本家のこの地に事業を開かんとする者、まづ政府の補助金を申請し或は利權の獲得を圖らざるはなく、政府より利權の提供を見ざれば開發事業は行はれざるのみか、この爲に利權を繞る疑獄の發生さへ稀に非ず。これ英國が植民地に於ける利權請求者を白眼視する態度と霄壤の差ありといふべく、従つて佛蘭西の佛印に對する投資は七十億法とも百億法とも稱せられ馬來に於ける英國の投資と軒輊するに足るも、その實績に於て著しき相違あるはかゝる精神的弛緩を最大の原因となすべきに似なり。

貿易に於ても又極端なる本國主義にして、この地を佛蘭西商品の市場として確保することにのみ努め、ひたすら外國商品の流入を怖れて爲に佛印自體の經濟的發展を阻害するを顧慮せず、従つて佛蘭西は却つて佛印物資の本國流入に苦しむに至れり。

之を要するに、印度支那に於ける佛蘭西植民地經營は成功を以て稱せらるゝも實はかくの如き嚙ふべき矛盾に滿つ。馬來か經濟開發を第一義として馬來自身の經濟力を向上せしめしに反し、佛印は萬事を犠牲として土民の搾取による政府收入の増加にのみ専念し、爲に經濟的發展は著しき遅延を見、佛蘭西當初の意圖たりし支那への進出もその豫期せる効果を擧げ得ざるのみか、今は印度支那自體をも防衛する實力なく、往時タイ國に於て争ひし英國に専ら追隨し、その協力の下に纔に領土の安全を保ちつゝあるものにて、これ畢竟誤まれる本國主義の罪に歸すべきものなりと信す。

以上

(附記) 泰國に於ける英佛兩國の工作は、本篇第四章に充つべきものなるか、之については前回報告中に詳述したるを以て今省略に従ふ。前回報告中「列強との關係」の章を主として參看せられ度し。

皇戦地誌に關する意見

(昭和十五年二月五日)

目次 (水内加筆)

- 皇戦地誌とは如何なるものとなすべきや (浅井辰郎)
- 皇戦地誌とは如何なるものとなすべきや (朝永陽二郎)
- 皇戦地理學について (柴田孝夫)
- 地誌は如何にあるべきか (松井武敏)
- 皇戦地理學の意義 (別技篤彦)
- 皇戦地誌をして如何なるものたらしむべきか (野間三郎)
- 皇戦地誌についての私見 (室賀信夫)
- 皇戦地理學素描 (米倉二郎)

皇戦地誌は如何なるものとなすべきや

(浅井辰郎)

一、皇戦に於ける地理學の地位

皇戦とは千差萬別の形態、方面に亘つて東洋に滲潤しある歐米的恣意を弱化、改悛せしめ、以て東洋の特性を發揮し、全世界の渾然たる調和、人類の正當なる生活を齎さんが爲に我が日本の起したる最も歴史的なる戦争なり。

従つてその手段は歐米的恣意の多種なる以上に多面多様に亘るべき國家總力戦たるべからず。

國家總力戦の基礎何處にあるべきか、古へ既に「地ハ政ノ始ナリ」と云はれしを俟つ迄もなく、そは大地なり。海、陸、空三者を平面的且立体的に綜合せる土地空間なり。總力戦の基礎たる土地を理解し、これを應用する事恰も「自家藥籠中のものと爲す」者は總力戦の勝者にして即ち優れたる政治家 (最も廣義の) たり得る事最も明らかなり。

地理學とは土地理解の方法を尋ね、且萬人をして土地を應用せしめんが爲、土地を正確に記述するを既に人類發現以來一敢て過言といふべきに非ず一使命とするものなり。地誌と云ひ、ジオ・グラフィヤ (地を描く) と云ひ、共にこの使命を語源とし、今日に至るものなり。なほこの土地とは單に自然的土地のみに限らず、その上に生起する人間をも含む事當然なるを茲に附言す。

皇戦と地理學の間に前述の如き不可分の關係あるは今更贅言を要せざらんも只、今日の我が國の地理學がかゝる要請に應じ得ざる點あるは亦多言を要せず。即

ち現下地理學の皇戦の要請に應じ得ざる點は至急に改革補填せられざるべからず。此處に狹義の皇戦地理學、或は皇戦地理學中至急完成さるべき部門存在す。

皇戦は既に始まり。正しく廣き地理學全体 (換言せば廣義の皇戦地理學) は暫く措き、次には至急革新、補填さるべき狹義の皇戦地理學の特性を記述し、批判を仰がんとするものなり。

二、皇戦地理學の研究法 (土地理解法) に於ける特性
イ、あるべき姿の決定と記述

今日迄の所謂景觀地理學なるものは土地を有機的に理解せんとする點、適切なれども、唯土地の現状に注目するを主とし、その土地に對する既往の人間の恣意、或は意志による土地相變改の可能範圍を明らかにする事少なかりしと言ふべし。即ち未だ歐米的恣意の剔抉も、最適度の應用もその土地に對し行ひ得ざるなり。茲に於て皇戦地理學はこの點を改革、補填し、土地を眞に理解する一方、具体的一例としては國土計畫にも參與し得べき態勢を備ふべきなり。

ロ、日本及び東洋地理學史の再建

前項の土地理解の正否も、將又、土地に對する歐米的恣意存在の有無も之を實證し得べきものは地理學史を以て尤となす。然して吾々に土地の力の大なると共に人間意思の強大なるを示し、吾々の土地に關する革新的前進を鞭撻するもの又地理學史を措いて他なし。歴史は理論を實證すると共に情的にも人間を鼓舞せしむるものなればなり。

日本及び東洋地理學史の解釋に一貫せる理念を有せず、現状の説明も附會に過ぎざるものゝ如し。今、日本、東洋の地理學史を再建し、歴史諸事象の解釋に皇戦理念を以てし、茲に現在に向け流るゝ如く展開する日本東洋地理學史を建設するを得ば只に地理學史の大收穫たるのみならず、又以て皇戦理念の公正眞實なるを實證し得べし。

三、皇戦地理學の應用方面の特性

上述の如くして得らるべき土地の理解、實證は世界各地域に就て行はれ、その結果は皇戦地誌として記載、保存され、萬人の應用に資すべきなり。

應用方面は無限に庶幾からむも次の如くも分類さるべし。

イ、對外的應用

一 例 ……………世界新分割

窮極の世界は知らず、暫くの間現時諸國家の生存するに方りては世界は各種氣候帯を同様に含有し、夫々國家生活を完全に近く營み得べき、南北に長き國家となるべしと云はるゝ如く、この世界は先づ數個の圈に別るべく、その折の土地分割は勿論地理學の應用を俟つものなり。

ロ、對内的應用

既に行はれつゝある皇戰の最大基礎として、地理學は新たに認識、要請さるべきであり、又次第にされつゝあり。皇戰會に地理研究機關の出現せるは偶然ならずして必然といふべく、従つて總力戰政府の出現には恐らく地理省の新設も實現すべし。明治の内務省地理局は生育せずしに終りしかど、總力戰に渾然たる地理學の確保は必要にして地理省といふ如き機關は早晚設置せらるべからず。

然してかゝる機關の任務は土地理解の研究法など時々に進化發展すべきものは大學等の研究機關に任すにせよ。

(1) 最善の研究法により世界各地の地誌の編纂を行ひ、以て政治、經濟、軍事、思想、學問等の各方面に學の對し、最善の地理的資料を供給すべし。

(2) 皇戰は恐らく期限を切る事なく續行さるべきものにして、人間數世代を閲して次第に理念に近づくものならん。之れより考ふれば現在の第二世より以下子々孫々を旺盛なる皇戰理念を以て教育する事、最も効多し。斯故に兒童は幼より或は皇戰地理學史の探檢譚に新取の氣象を養ひ、或は簡單なる土地理解の法に造化の妙を悟り、以て長ずるに及びては旺盛なる大國民的信念と、廣い地理的理解、理解の下に皇戰の達成を一日も早く計るべきなり。斯る地理神話をも含みたる地理學史の完成は實に國民を知的のみならず情的にも鼓舞するものにして國家永遠の計としては甚だ有意義なるものと思ふ。

四、むすび

新秩序の爲の皇戰に當り、綜合地理研究會は、直接に皇戰會を支持する他、地理方面に對する皇戰理念の体得とその普及を使命とし、同時にその研究作品を通しての皇戰理念の國民的覺醒をも責務とするものなり。舊秩序の崩壊、新秩序の建設と多難なる事は云ふを俟たざれども吾等日本國民の一として力を盡さむ事を決

心し居るなり。

以上

皇戰地誌とは如何なるものとなすべきや

(朝永陽二郎)

一、皇戰地誌の目的

皇戰とは皇道に即する世界維新の實現を目的とする戰である。即ち、歐米諸國の利己的なる思想の下に打ち建てられたる歪められた現今の世界の秩序を人類の道義に基づいて再建し、眞正の秩序を創る爲の戰である。

然るに、この歐米によつて建てられたる既成の秩序は武力にのみならず、政治、經濟、文化等の全能力を擧げて、換言すれば總力を以て造り出したものであり、またその維持の爲には益々その總力を強固にして、それを打破せんとするものに對して戰はんとするのである。故に、我國に於て、それを打破し、新なる皇道世界の秩序を建設せんとする爲には亦、歐米以上の總力を發揮して、これに對抗せねばならぬ。

皇戰地誌(地理)は、この總力戰の一部として在るのみならず、それ自身、その研究に於て總力戰的でなければならぬ。茲に從來の學問的興味のみを基礎として打ち建てられた地理學との相異が存在する。

二、皇戰地誌の進むべき方向

然らば、皇戰地誌(地理)が如上の目的を達成する爲には如何なる方向に發展せしむべきであらうか。

第一には、皇戰地誌(地理)が皇戰に參與し、總力戰の一部として在る以上、皇戰を行なふべき全日本國民をして、歐米によつて狭められたる世界に對するその視野を廣くひらかしめ、皇戰の眞意義を悟らしむる役目を有たねばならぬ。

第二には、皇戰地誌(地理)は歐米の地理學を優に凌ぐものでなければならぬ。學問的興味に終始する事を拒否するとはいへ、その學問性は一段と高められねばならぬ。

第三には、皇戰地誌それ自身が總力戰的であるためには次の如くであらねばならぬ。即ち、地理學は元來、抽象的な學問ではなく、具体的な、或は實際的な學問であり、それ自身すでに實用的な性質を具備してある

學問である。然るに従來の地理學に於ては、地理學のこの重要な性質、即ち應用的に研究する點に於て甚しく不充分であつた。従つて、此點を發展せしむることによつて、換言すれば、地理學を政策的なものに迄發展せしむる事によつて地理學はその總力を發揮し得るのである。即ち、皇戰地誌（地理）とは、

（一）従來、稍々もすれば、現在ある姿の記述に止めたものより進んで、

（二）本來ある可き姿の把握—歐米が如何にして現在の姿をつくり出したかに對する研討、之れより更に進んで

（三）將來あらしむ可き姿の描出—皇道に基く新しい世界秩序の姿の研究—新秩序を打ち建てるに當つての歐米に對する對策の研究、こゝ迄進むべきものでなければならぬ。以上の三者を一連の下に、常に皇道の精神に基いて研究する事が皇戰地誌（地理）の進むべき方向であらう。

三、皇戰地誌實際研究に當つての一手段

以上、皇戰地誌（地理）の進む可き方向に就て述べた。次に實際研究に當つての手段に對する私見を述べて、本論文の結びとしたい。

皇道は、世界を蔽ふものであり、皇戰はそれに法つて新しい世界の秩序建設を目的とする戦であるから、それは全世界に互つて行はる可きものである。従つて、皇戰地誌（地理）の研究對象となる可き地域も矢張り、全世界に互るべき事は言を俟たぬ。然し乍ら、此の大事業を爲すに當つて、我國強力なりといつても、現在その力は無限に存在するわけではない。即ち、一步々々着實に、足場を固めて進まねばならない。故に、目下その對象となるべき地域には自ら輕重が存在するであらう。皇戰地誌（地理）が、皇戰に參與する以上、その研究對象となるべき地域の輕重も亦これと歩を一にするべきであらう。その輕重の決定は衆知によつて行はれなければならないが、今、その試案として大約、地域の重要なものより列挙すれば次の如くである。

（一）支那大陸（滿洲大陸・蒙古を含む）

世界新秩序建設の第一歩として。東亞新秩序建設の對象地域として、この地域の研究は最も重要なべし。

日本

東亞新秩序並びに世界新秩序建設の中心をなす

ものとして、日本自身の再建設はゆるがせに爲し得ざるべし。

（二）南亞細亞・シベリア

世界新秩序建設の第二歩として。並びに東亞新秩序建設を援助するものとして。

（三）近東地方・中南米・アフリカ

世界新秩序建設の第三歩として。並びに東亞新秩序建設を援助するものとして。

（四）オーストラリア・北亞米利加・歐羅巴

世界新秩序建設の最後のものとして。並びに、東亞新秩序建設を援助するものとして。

偕て、以上の如く、世界全体を對象としつゝも、その中に地域の輕重も認める事が許されるとすれば、その研究に當つては、最初には、各人が各地域を分擔して研究するよりも、寧ろ項目別に研究する方が有利に思はれる。何となれば、各人が地域別に研究する時にはとかくその地域のみ研究に止り勝ちとなり、全世界に廣く互る事がおそかにされ、加ふるに、各地域に於ける項目の研究も各人まちまちになり、互ひに連絡が取り難いに對し、各人が項目別に研究する時には、地域によって輕重の差はあれ、一應は全世界に互る研究が行はれる故、各人の連絡が遥にとりよいであらう。又、各人が全世界に互つて或る項目を研究するとすれば、その項目に關しては一地域のみの研究の場合よりも總力戰的であり得やう。又、或る地域に於て政策を建てんとする場合に於ても、その一地域の研究からのみでは不充分であつて、世界に類似を求めるとか、世界との廣い關聯に於てたてられてこそ始めて良き政策となり得るであらう。

而して、以上の如き各人の項目別による總力戰研究が、次に各地域別に集合せられ、全体を綜合する事によつて、各地域の研究は總力戰的となり得、更に亦、それ等を全世界として一つに綜合することによつて、皇戰地誌（地理）は充分その總力戰的な力を發揮し得、人類の道義に基く、世界新秩序建設のために皇戰に參與し、これを勝利に導くであらう。

（丁）

注、皇戰地誌を地理に置き換へんとするのは、地誌が従來、稍々もすれば一定地域内の事象の記述にのみ止まり、その外部との關聯を無視し勝ちであつたに對し、皇戰地誌はそんな狭いものでないから、誤られない爲に、普通もつと廣い意味をもつ地理なる語に置き換へ

んとしたのである。

皇戦地理學に就て

(柴田孝夫)

一、地理學の實踐性

科學の理論と實踐は一身同体でなければならぬ。實踐によって理論を高め、理論によって實踐を行ひ、相扶け相勵まして、より大なるもの、より高きものへと進むものでなければならぬ。その故に理論と實踐とは何れが高く、何れが低きものと區別すべきではなく、兩者の有機的結合の姿に於て始めて科學の價值が存するのである。このことは地理學に於ても全く同様で地理學の理論と實踐の有機的結合の姿の中に地理學の眞の生命が存するのであることは今更言ふまでもない。

特に地理學に於ては、その實踐性はよく言はれるところで、史學のそれと共に重要視されるものである。歴史が凡ての人文事象に對して時間的に縦的な解釋を與へるに對し、地理學は空間的に横的な解釋を與へる。換言すれば歴史を經とし、地理を緯としてあらゆる人文事象が生起するのであつて、地理は全ての人文事象に最も基礎的なものであり、根柢に横はるものである。従つてすべての人文事象の解釋には不可缺のものであり、又同時に將來への企劃の爲にも必要なもので、こゝに地理學が古來實踐の學として尊ばれる所以が存する。

この實踐性は我が國に於ては既に古く和銅撰進の風土記より、江戸時代の官撰藩撰並びに私撰地誌を経て更に明治の皇國地誌その他に至るまでの一貫したる性格にしてこれら幾多の地誌が何れも國家意識の高揚の時代に於て自己反省の具なると共に又政治の用に供せられたのである。

西洋地理學に於ても實踐性は既に古くギリシャ時代よりその萌芽が見られ、特にルネッサンス以後は科學の進歩と共に著しくこの傾向が強められるに至つた。即ちボーダン、モンテスキュー、アダムス・スミス等の國家學者、經濟學者が共に地理的條件の政治、經濟への影響を論じ一九世紀に入つてラツツエルはその著「政治地理學」に於て國家体制或は政治と地理的條件との相互作用の究明をなし、政治地理學を樹立し、政治學者チエーレンこれを更に進めて地政學にまで發展

せしめた。かくてこの地政學は單にドイツのみならず全世界を風靡するに至り、今後も又地理學はその本質に根ざす實踐性の故に益々この傾向を強め行くであらうことは否まれない。

二、皇戦地理學と世界新秩序の建設

學戰は心戰と共に最高の頭腦として武戰、政戰、經戰の上に位置しこれらを指導する。更にこの學戰に於ても又地理學はその實踐的な故を以て哲學、史學と共に重要な役割を演ずる。されば地理學は世界新秩序の建設に極めて重大なる意義を有し來るものである。然らばこの場合の地理學は如何なるものであらうか。從來の地理學が歐米中心主義の著しく歪曲せられたる現實の世界を對象とするに對し、この新秩序の皇戦理念に基く地理學は歪曲せられざる本來あるべき姿の世界を予見し、これを對象とするのである。而して新秩序の地理をうち立て皇道に基く新世界の向ふべきところを我が皇道の宣布、世界新秩序の建設に邁進し、以て皇戦の窮極の目的に寄與する。かゝる地理學こそ眞の皇戦地理學でなければならぬ。

然らばこの皇戦地理學が具体的には如何なるものであらねばならぬか。端的に言へば政治地理學乃至は地政學的な性格を有するものである。それは政治地理學、地政學が地理的條件と政治との相互關係を論ずることが世界新秩序の建設に最も有用なる要素であるからである。しかしこゝに言ふ政治とは舊秩序の歐米的な政治ではなく、最も公明なる皇道に基く政治なることとは言ふまでもない。かゝる新政治地理學或は新地政學こそ皇戦地理學の主要部分を構成するものである。

しかし一方皇戦地理學は經戰指導の爲の經濟地理學、武戰指導の爲の軍略地理學、戰爭地理學をも包含するがそれらは前に述べるところの政治地理學、地政學程重要なものではない。單に皇戦地理學の一小部分を占むるに過ぎないものである。特に軍略地理學は武戰遂行上に重要視されるが故に動もすれば皇戦地理學の全てなるが如くに解せられるが總力戰の立場に於て考ふる時は皇戦地理學の一部門に過ぎない。

三、皇戦地理學の研究法

皇戦地理學は上述の如く、現實の姿ではなく皇道に掩はれた本來あるべき當爲の姿をその研究の對象とする。しかし歪曲されずして眞にあるべき姿の世界は現

實には存在しない。さればその描出には現實に存する歪曲されたる姿を前提とし、これに凡ゆる角度より批判検討を加へ以て歪曲を指摘するより他に途はない。歪曲を指摘して然る後に描出された、あるべき姿の世界を對象として研究をなすのであるがこの歪曲の検討に際し重要な役割をなすは第一に過去の歴史である。歪曲の行はれざる以前の地理を知り、又歪曲の沿革を知ることは歪曲を指摘し、以てあるべき姿を知るの捷徑である。故に皇戰地理學の研究は先づ歴史の研究より始めねばならぬ。しかしこの場合、歪曲指摘の爲の世界觀の所有と炯眼の必要なることは勿論である。

かくて歪曲は指摘され、あるべき姿の世界は描出されてそれに對する新政治地理學的或はその他の研究が行はれて新秩序の建設にその基礎を與へることとなる。こゝに皇戰地理學の窮極の目的は達せられるのである。

地誌は如何にあるべきか

(松井武敏)

新しく誕生すべき地誌、それは既に從來日本の地理思想の裡に脈々として流れてきたもの、或は未だ實現せずと雖も展開の萌芽を藏せしものゝ再生或は覺醒といふ意味をもつものであるが、斯かる地誌が如何なる性格を有すべきであらうか。此れを從來の歐米的世界秩序の中に存する地理思想を媒介として一應反省して見度いと思ふ。(此れを學史的に裏付けるを要するが、それは室賀、米倉兩氏等が試みられてゐるから重複するを以て此處では論及するを避ける)

舊秩序内の地理學では一應地誌に對立すべきものは地理通論と考へられ、而して此の兩者の性格は前者が個性記述的として、後者が法則發見的として特徴づけられてゐる。此の際に於ける地誌は特定地域の諸事象の事實的記述がその任務と考へられ、その結果は百科辭書的事實の羅列に陥るか、或は趣味本意の藝術的記載に墮し、精々百科便覽的利用を有するか又は初等教育的價值を有するに過ぎない。此れとて勿論記述の仕方如何によりて相當の高き價值を有するは否定し得ないけれども、此れを以てしては吾々の文化的欲求を又實踐的欲求を満足し得べくもない。それは時代を裝飾する記念碑とするに足る眞理性の美しさと高さとをすらもたず、豈してや時代を向上せしめて理想境を實現

せしむるに足る改革性の強さと深さとを有し得よう筈もない。吾々の求める地誌は斯くの如き地誌ではない。

上述の如き地誌の缺陷を補ふものとして地理通論が登場する。地理通論は法則發見的である。即ち此れによつて理論の性格を求め、以て眞理性を、理論によつて豫見を期し、以て實踐性を得んとする。併し法則的研究にはそれに固有なる一般化と抽象化とを伴ふ。其の結果は現實より遊離して動もすると實踐的機能なき法則を造りあげ、之を強いて機能せしめんとし、此處に術學的理論を存立せしめ、理論の爲の理論に走り、只智識の遊戯たるの意義を有するに過ぎなくなる虞れがある。從來の地理通論はかゝる缺陷を藏してゐた。されば斯かる地理通論を以て地理の本体となし得ない。もう一度高められた意義における地誌に歸るを要する。一應地誌、地理通論として對立せしものを綜合するが如き觀點に立つことが必要となる。斯かる觀點に立つて考へたる地理を通論的地誌と呼んでもよいであらう。それは地誌に非ざる地理通論を媒介とすることによつて實現されたものなるを以て地誌に非ずして(眞の)地誌たり得たものであり、此れ即ち地理それ自体でもある。吾々のいふ地誌とは一應斯くの如きものである。

併し前述の如き地誌或は地理通論はイデオロギー的に無色を擬しつゝはあるが、竊かに歐米的世界の現状を強化する色彩で塗りつぶされた地誌であり、その現状の強化を正當化せんが爲の理論を追求する地理通論である。然も或る理念によつて之を改革せんとする地理學説が生れ出づれば、之に對し現實を現實の範囲内で研究するのが科學の本体にして、あるべき姿の理念と結びつくは科學の墮落なりとの思想を扶植し、以てその改革的意志を拒否する。又假令斯かる思想的斯曠を打破して時に新しき理念によつて嚮導される現實改革的所説出現すると雖も從來の其れは何れも現實に破綻を示し、到底世界を光被し世界人類にその所を得しむる所以のものではない。其れは常に事實の究明と記述より出發すると雖も、これが一應普遍的なるもの一普遍的なるものの徹底化によつて飛躍的に實現されるものと考へられる理念によつて否定され乍ら、而も普遍的なもの又普遍的の普遍たる理念の限定として、否定的表現として把握さるべきものである。而して其の理念たるや現秩序の歐米的世界觀に非ずして新秩序の日本的世界觀である。此の最後のものこそ吾々の地誌を他の地誌と區別せしむる主眼點である。

斯くて地誌は現實の存在に於ける所事象相互間の關聯を法則的に把握する事によつてその科學性を克ち得ると共に、然かも他の諸科學が統一的全体としての地球表面から其れの構成要素の一部のみを抽出して考察し、一面的、孤立的、抽象的たるを免れざるに對し、地誌は全體的、關聯的、具体的であり、換言すれば総合的總力的性格を有する。而して又實現さるべき理念の表現として地球表面が殊に自然と人文との關聯に於て調和せるか、矛盾を含めるか、顯はにされ、以て之れを維持又は改革すべき條件と方法とが明らかにされる。即ち現状の儘の諸關聯の考究いはば存在の科學にのみ終始せずして、實現さるべき諸關聯の考究いはば當爲の科學としての性格を有する。理論と歴史との學に對して政策學ともいふべき特質を有つ。(この中には理想的世界實現の爲の階段を異にせる諸方法を含む)此れは現状維持的靜觀的たらずして現状打破的改革的意志を藏する。其れは實證的従つて懷疑主義的無氣力なるものに非ずして實踐的な發刺さをもつてゐる。而して更に此れを嚮導する理念たるや日本の世界理念なるを以て之に依り實現された世界は道義的世界にして歐米的世界が個人の利益を基礎として生れたると雲泥の相違を有する。斯くて地人よく調和し、暗黒と陰鬱とに代りて光明と明朗とが訪れ、相剋と欺瞞とに代りて調和と正義とが支配し、萬民其の虜を得て歡喜する。然もその道義的世界は靜態的なものに非ずして絶えずより道義的なものを目指して發展し續ける動態的のものたるを以て世界萬民絶えずより高き理念を仰望しつゝ躍動する。

之を要するに吾々の地誌は部分を部分として見ずして全体との關聯に於て省る限り綜合的觀點に立つべきであり、且つ存在を存在として見るにとゞまらずして理念の實現として觀る限り現實の矛盾を改革せんとするの欲求を含むものたるべきであり、然もその欲求たるや利益のみを求むるに非ずして道義の支配を期する限り、それは道義的(倫理的)世界理念の光被即ち皇道宣布を目指すべきである。斯くてこそ一面性と無力性欺瞞性とを克服し、時代の記念碑としての正義性の明るさが獲得される。殊に現下の世界は矛盾に満ち日本の世界理念に照されて究明されんことをまつてゐる。吾々は理論的には方法的自覺を深め、具体的には實踐的熱意を高めるを要する。而して理論を最もよく理解するには理論を理論として觀るに止らず、理論

を實踐に於て觀る事が肝要である。而して尚實踐に於て理論は深められるべき構造をもつ。されば結局地誌研究の實踐に於て地誌を如何にすべきやを學びとらねばならぬ。

皇戰地理學の意義

(別技篤彦)

一、目的

地理學は歴史的に見ても常に各時代の國家的要求を充さんが爲の實學的役割を爲して來た。支那を始めとし、ローマ、アラビヤ、近世イギリス、或は現代ドイツの地理學は凡て之に屬する。我國に於ても古代や徳川時代の地理學は正にこの種のものであつた。然るに不幸にして最近の我國地理學界はその一部に於てかゝる性格より遊離し、甚だしきは學問的遊戯にすら墮せんとする傾向(例へば文化現象の自然科學的認識等)を生じたが、今やその復古、維新を行ふべきの秋である。所謂「學問の爲の學問」を尊重し、實學的傾向を以て輕しと爲すは近世歐米の一部の考へに過ぎぬ。特に我國に於ては人類生活に有用なること即ち國家に有用なることを意味する。この意味で抑も世界の國と民族とを愛して各々その處を得せしめ、夫々の正しき生命を完成せしむべき八紘一宇の理想實現に當つては地理學は正にその先驅として一代推進力として作用すべきである。何となれば此の、國と民族によつて充填された現實の世界の對象とする學問が即ち地理學であり、又その性質上地理學はいはゞ一切の土地に關係する學問體系の頂點に位するものとも云ふべく、各種の知識を統合攝取して綜合的解釋をなし得る性格を有するからである。かくて今後我々の努力により、日本精神に基づく皇戰地理學を建設して所謂皇道世界學の一翼たらしめ、その思想攻勢を以て皇戰(總力戰)の戰士として或は皇道光被プレーントラストとして皇國の進路を誤らざらしむべく力むべきである。即ちこの皇戰地理學はまた新日本地理學とも稱すことを得べく、内に鞏固なる理念を確立し、結局はこれを皇國民始め世界萬民に宣布するを目的とし、また一面に於てはそれに達する過渡期たる現實の皇戰に當つては、皇戰圏内の勝利を獲得すべき手段、方法を指導する。

二、具體的研究手段の二、三

以上の手段としての皇戦地理學の具體的研究に就ての私見は次の如くである。

第一、通論的研究

- 1、東亞を主とする地理學史の研究
- 2、日本精神による地理學通論の樹立等

これらの結果、例へば政治地理上では日本人の海外發展等につき當然歐米のそれとは異なる類型を見出すであらう。或は經濟地理の方面では從來盲目的に信奉されたデイトリヒやウイツトフォーゲルらの理論に代るものをも見出し得よう。或は佐藤信淵が既にその「經濟要録」で主張せる「氣候の寒暖を審にせし、土性の剛柔を察し、氣候に叶ひ、土性によろしき處のものを作り、天地化育の勢力を盡して土地に遭利なからしむ」の如き思想を更に地理學的に發展さすべきである。而してかゝる理念が完成せば、之に基き地理學の實學的価値を大いに高めることは皇戦地理學の一つの大なる理想に屬し、例へば皇戦圏内の生産地域の分散配置等經濟的新秩序建設には必ず地理學者の意見を尊重せしむる如くする。

更に敵の各種の攻撃は同種の分野の戦ひの部門に於て防止するのが最も容易且つ効果的な事からみて、地理學に於ける舊秩序的、非皇戦的思想があらば、之に攻撃を加ふることも考ふべきであらう。

第二、地誌的研究

地誌的研究の方面としては元來道義に基き、各地方の民族を解放するのが皇戦の一大任務である以上、その成果は直接工作に資すべき重大責任がある。之が爲第一次的には皇戦圏内の各地域につき、その自然條件を始めとし、民族、言語、宗教、教育、風俗等の社會的、文化的状態、資源、金融、財政、貿易、労働等の經濟的状态、行政、軍備、警察力等の政治状態或は國際的關係等あらゆる方面に亘つて調査研究し、その結果舊秩序的勢力の侵略、壓迫の状態を明らかにし、將來該地域に於て皇戦精神に基く民族解放戦を行ふ場合にその文化戦、武力戦、經濟戦、政治戦の現實の戦路上我が爲に利用し得べき条件や間隙を發見し、又それらを所謂本來のあるべき姿に戻す対策を考究する。更に第二次的には「彼を知る」意味に於て舊秩序國家自身についても同様の研究を行ふべきである。而して此等の対策の決定には分擔地域の如何に拘らず、常に全研究員の検討を經、世界史との關聯に於て高所より綜

合して行ひ、進路を誤らぬ如くし、又之が實行には、適當なる機關を通じて當局者に進言する如くせばよいであらう。またこの通論的研究と地誌的研究とは從來の地理學通論と地誌の如き關係に立ち兩々相補ひつゝ進みゆくべきものである。

皇戦地誌をして如何なるものたらしむべきか

皇戦の主動力としての地理學に就ての覺書

(野間三郎)

一、日本民族による世界革新と地理

我々が今關ひつゝあり、その遂行に協力しつゝあるものは、何よりも先づ「日本民族による世界革新」であると規定し得ると思ふ。我々の地理學はまづかゝる性格を當然擔はなければならない。即ち「日本民族」と「世界革新」との二つを焦點とするものでなければならず、之等を最前景に掲げることによつて新時代の創造に積極的に參與せんとするものでなければならない。

イ、日本地理神話

皇道世界維新は先づこの肇國以來の高き使命を擔ふ日本人の覺醒に始らねばならぬ。近世に於る日本の萎縮と近代に於る日本の喪失とより、一轉して眞日本の恢復と日本の擴大とを成就せしめねばならないのである。

近代に於る日本がヨーロッパ的世界の一部としての日本であり、自己自身の視野を失へる日本であつたとすれば、今我々はアジアをもヨーロッパをも覆ふものとしての日本と、廣く世界を眺め下す視野を日本人に與へねばならない。我々の地理學は先づかゝる性格と使命を所有するものでなければならぬ。世界大和の國産は我々の地理學によつて描かれねばならぬ。かくて必然に我々の地理學は大なる希望と憧憬を與へるものであるが故に、今假りに地理神話と呼ぶるゝもよいであらう。神話と呼ぶ、それは合理性を缺く故ではなく、國民の魂を永久に大なるものへ驅り立て、目標を見失はんとしては再びそこに歸つて自己の行手を見通し再出發の途につくを得しめるが故にかく呼ばれるのである。

ロ、近代ヨーロッパの否定と地理學

我々が今關ひつゝあるのは世界革新である。革新で

あるが故に古きものゝ破壊に始る新しき理想の確立でなければならない。

この故に我々の地理學は、古きものゝ否定として先づ近世並に歐米の拒否に出發し、次に日本世界光被の目標を指示するものでなければならない。

近代は一先づヨーロッパ概念の世界を覆ふた時期としてその性格を規定し得る。故に近代の克服としての新しき地理學はアジア概念の昂揚を使命に持つと一先づ考ふるを得るであらう。この新しきアジアはユーラシアよりヨーロッパを除いたものとしてのアジアではない。又ヨーロッパに對立するものとしてのアジアに止らず、アジアが持つ卓越性と世界中心としての意義とその人類復興の運命を明にせねばならない。

然して次に近代資本主義的ヨーロッパが打樹てた世界秩序の克服としてヨーロッパ的世界地理の歪曲の暴露とその拒否が遂行されねばならぬ。

ハ、八紘一宇

近代史の轉換、あらゆる舊價値の顛倒は、代るべき理想と、價値判断の支點とを有せねばならぬ。皇道世界宣布こそ我々の目指すところである。この場合我々はこの理想の偉大と莊嚴を心臆することなく誇らねばならぬ。

皇道世界光被の絶顛に到る途を、荆棘の下に或は峻峻に指摘する道案内をなし、絶顛より見下された世界圖を作製するの任務は我々の地理學の負ふところのものである。地理學にこれをなし得るかとの間は今提出する必要もない。今は唯この高き任務が我々に課せられてゐるといふことのみで充分であらう。

この任務を有する我々の新しき地理學は明に變貌する。大いなる憧憬と廣き視野と高き使命をもつというのみにても。然り、創造の意圖をもつ地理學は、意志を失ひ、近代西歐的眞理概念に眼晦まれたる認識の小天地に踟躕することなく、再び諸學を統べるものとして立現はれるであらう。

世界計畫をも意圖する我々にあつて、東亞の新秩序を考案する諸説を唯遠きに至る第一歩たる發程を先づ考ふるものとしてのみ許容する。所謂東亞綜合體説等に於る視野の狭小が終には皇道世界宣布の大目標を見失はしめざる様警戒せねばならない。

この新地理學の使命の遂行し終られる時は何の日であらうか。地理學は不斷の成長を續けるであらう。

二、皇戰地理の要素

今述べ來つた所により、我々の地理學は先づ「神話としての地理學」と假りに呼ぶ所の性質と、次に實際的な政策或は軍略指導としての性質とを顯著なる二要素とするであらう。

イ、「神話としての地理學」は先づ我國民をして高き使命に醒しめ、彼らの爲に廣き視野を設けてやる。かくて我等が高き使命達成の日に至る迄、この崇き運命の擔手たる將來國民をしてその使命に醒しめ、勇躍せしめ突進せしむる永遠の魂の泉となる。

皇道宣布の大使命は國民を、殊に將來の國民を原動力として絶へざる闘ひが必要である。我々の地理學が單なる政策、政略、軍略のブレインたるに止るを得ざる所以である。

日本民族を永遠に鞭撻すべき魂の糧となると共に、次いでアジア民族をして覺醒せしめ、日本民族の崇き運命に追隨協力せしめ、次では皇道世界光被の目標に達する道を拓く。「神話としての地理學」と稱するものはかゝる目的を有するものであるが、神話と稱する所以はかゝる高き使命と目的を高々と掲げ、萬民救済の日本民族の運命を明に自覺するところの地理學なるが故であり、荒唐無稽を意味するものではない。我々はこれによつて學術性を失ふ如きものを意味してゐるのではなく、却てかゝる高き使命と誇かなる運命の自覺と結合することによつて一段高き學術性が新生するであらう。

ロ、「政策或は軍略の立脚點としての地理」

史代的轉換の爲に我々は近代ヨーロッパの敢行せる世界歪曲の現状を指摘する。現状拒否は先づ革新の第一歩である。次に我々はこの歪曲されたるヨーロッパ的世界を積極的に破壊する爲の具體的戰略を次に提供するであらう。然して終には我が皇道精神がその在り方を示す所によつて世界設計をなすに至るであらう。

ハ、學戰としての地理

我々は「神話としての地理」「政策、軍略の立脚點としての地理」を二要素とすることを述べた。然しこの爲に學術的意義を失ふに至る懼なきことは既に「神話としての地理」中にも述べてをいた。神話或は政策となり終るか、將又學術となるか、取り得るのは何れか一方であつて二者同時でないといふが如き疑を抱く人はもはやないであらう。我々は既にむしろ一段と高き學術性さへ生れることを述べてをいた。高き目的と強

烈なる意志に磨れて新地理學は一段と高き眞理に近くであらう。

之によつて我々は低迷の最中に彷徨するヨーロッパ的地理の學術性を見下し、壓倒し、學術戰の効果を十分に擧げるであらう。

皇戰地誌についての私見

(室賀)

現在我々は世界新秩序建設は如何にして爲さるべきかといふ直接にして重要な課題に直面してゐる。私が今皇戰地誌の問題を取上げるのはこの立場からである。

皇戰地誌といふ命題は所謂舊秩序の地理學と對立するもの、それを克服するものとして提出された。そのには舊秩序の地理學のもつ矛盾が開示されることが必要であつた。然らばそのやうな矛盾とは如何なるものであるか。抑ゝそれらの地理學は新秩序建設の立場から見て如何なる姿相を示すのであるか。

謂ふところの舊秩序地理學に於て先づ指摘せらるゝところはその實踐性の喪失である。之に就ては既に松井武敏學士の高説があるから再説の要はないが、一般に歐洲諸國の地理學は嘗てはその政治的經濟的發展の爲の水先案内たる役割を負ふてゐたと稱せられる。然るに世界史の推移と共にその使命を終へた時、地理學は既に一つの危機に面してゐた。地理學そのものへの反省が起り、獨逸西南學派の影響の下に、方法と對象と、殊には學の Gebiete の問題が頻りに論ぜられたのはかゝる苦悶の現れであつたとも見られ得る。かゝるものゝうちから景觀學が誕生した。

Landschaftskunde の概念は、いふ迄もなく然かく新しいものではないであらう。併し現在我々が見る、而して今日の地理學の主流をなす景觀學はかゝる背景の下に生れたのである。

それが靜的 *statisch* であることは、かゝる景觀學のもつ性格の一つである。それは歴史を拒んだ。少なくとも曖昧のうちに歴史を否定しやうとした。そこでは「作られたもの」「既成のもの」としての側から對象が捉えられ、「つくる行爲」「創造する力」は顧みられやうとはしなかつた。現状を現状のままに、それらが彼らの合言葉であつた。意志は沈黙し、時は停止した。

併し、歴史は間斷なく人々を揺動かしていつた。殊に第一次歐洲大戰のあと、新しい秩序が考へられねばならなかつた。The New World は一九二一年にかうして現はれた。

併し、Bowman のこの著書は Wilson 大統領の理想主義に裏づけされてゐるとはいへ、未だその理念を判然とせしめるには至つてゐなかつた。地理と政治とを結びつけてより鮮やかな實踐に乘出したものは Geopolitik の人々である。

Geopolitiker の仰いで祖とする Ratzel の政治地理學は普佛戰爭後の獨逸帝國の發展と相應するものであるといはれるが、これは一九世紀の獨逸史學とも關聯するところがある。十九世紀獨逸史學は政治史によつて特徴づけられるといはるゝのであるが、それは政治を制度として或は組織として靜態的に見るのではなく、政治する行爲として或は力として考へやうとするものであつた。それは變て Ratzel に於て國家を成長する有機體とする思考に導いたのである。更に Geopolitik の體系を樹立した Kjellén の國家學にあつては、これは更に判然と現はれる。彼はまづ國家についての *juristic conception* の排撃から出發して國家を力として理解した。

Geopolitik がこのやうに國家を行爲する主體として認識したことは、變て地理學に政治性を賦與することゝとなり、その學は又 *dynamisch* な性格を帯びるに至つた。その限りに於て地理學は實踐性を再び獲得し、現在獨逸の發展の爲に一つの役割を演じ得たのである。Geopolitik にあつては、前述の如く國家を行爲する力として捉へることから出發した。そのうちに我々は歐羅巴的な強權主義を見る。かゝるものが吾人を満足せしめ得ないことは當然である。我々の究極の目的は皇道を世界に宣布し八紘一宇の精神を具現するにある。この意味で我々は國家を倫理體として把握しなければならぬ。倫理體とは倫理するものゝ謂である。即ち國家は、恒常なる倫理的規範たるものでなく、かゝる規範を創造し之を實踐する主體たるの意である。日本が生むべき新しき地理學はかゝる國家の倫理的意志と關係して打樹てらるべきことが要請される。それは國家の倫理的實踐の一具現である。國家は、地理し、歴史し、哲學することに於て無限に自らの倫理性を發展せしめ得るのである。

こゝに至つて地理學はもはや Politik を以て呼ばる

べきではない。このことは我々が先に舊秩序の地理學として捨てた景觀學をもう一度回顧せしめる。それは依然として我々に残された貴重な遺産であり、それが地誌的である限りに於て地理學の本流に棹さすものだからである。然しそれは言ふ迄もなく景觀學をそのまま再び採上げることではない。我々は Landschaftskunde と Geopolitik とを、倫理的に於て綜合しなければならぬ。

併し倫理體たる國家は現在まづ非倫理的なるものと戦ひ之を克服しなければならぬ。總力戰を高唱する皇戰イデオロギーはこゝに力點を置いたものであり、この意味で皇戰地誌は現在ではまづ多分に Geopolitik 的であらねばならないであらう。併しそれが戦である限りそれは過渡期であり、皇戰イデオロギーはやがて皇道イデオロギーにまで超克されるべきことを銘記する要がある。

最後にこのやうな皇戰地誌の性格は、かの實學を想起せざるものがあることを附加へておかう。徳川時代の實學者達の理念は經世濟民であつた。彼らの學問はたゞその實現の爲に存した。従つてこのイデオロギーに反する思考に對して彼らは果敢な闘争を惜しまなかつた。又彼等はそれぞれ國學や本草や天文地理の専門家であつたが、併しこの究極の目的の爲には如何なる知識の分野をも攝取するに吝かでなかつた。而もそれは彼らの専門の學を混亂せしめなかつたばかりか、寧ろそれを益々大きくするのに役立つたのである。我々の實際的な研究態度のうちには之に示唆されるところ多いものがあるやうに思はれる。

以上に述べたところは皇戰地誌のもつと思はれる主要な方向の一つを取上げてみたに過ぎない。定義し體係づけることは初めから私の意圖にはなかつた。それは無益でもあり又徒勞でもある。方向がはつきりすれば、具體的なものが歩むことによつて〇ち得られ、前進は又新たな方向を指し示すであらう(二六〇〇、一、二七)

皇戰地理學素描

(米倉二郎)

世界人類をして萬民各々その所を得せしむる世界の

道義的の革命が日本民族の窮局の使命である。現代はそれに達する一階梯たる東亞新秩序の建設に邁進してゐるのであるが、この工作の基礎となるべき學戰體系中地理學の擔ふべき任務は重且大である。

先づ地理學は一應世界諸民族の各々に就いて妥當なる生活領域を劃定し世界新秩序の未來地圖を企畫せねばならぬ。そして東亞地域に於ては一步を進めて地理學の立場から軍事、政治、經濟、文化等に亘つて適切なる政策を示唆しなければならぬ。かくて現在に於ける皇戰地理學は政治地理的軍事地理的色彩が濃厚となる。たゞし、稍もすれば獨逸民族の利己的膨張の理論に墮せんとする獨逸政治地理學の囁に倣ふ事なく、精神に於ては治國平天下、八紘一宇の東洋的政治地理學の傳統を昂揚し、之を組織化する必要がある。かくて皇戰地誌の現時點に於ける體系は凡そ次の如きものとなる。

皇戰地誌學 (興亞地理學)

第一章 興亞地理學の方法

第一節 支那地理學史

第二節 日本地理學史

第三節 西洋政治地理學史

第四節 興亞地理學の方法

第二章 世界新秩序の構想

第一節 大地域政治經濟への動向

第二節 大地域政治經濟の必然性と成立條件

第三節 新世界地圖の構想

第三章 東亞の自然と住民

第一節 東亞の地形

第二節 東亞の氣候

第三節 東亞の住民

第四章 東亞の軍事地理

第五章 東亞の政治地理

第一節 日本の政治地理

第二節 滿洲の政治地理

第三節 支那政治地理

第六章 東亞の經濟地理

第一節 東亞の鑛物資源

第二節 東亞の農牧資源

第三節 東亞の地域區分と産業立地

學戰原理

昭和十五年二月

- 一、總力戰
- 二、皇戰
- 三、學戰
- 四、歴史と地理

學戰とは總力戰の一翼として學問を中心とする戦である。學戰の何たるかを知らんとせば、先づ總力戰の實相が究められねばならぬ。

一、總力戰

(總力戰) 總力戰とは近時盛んに用ゐられる詞であるが、その内容は區々にして一定するところがない。斯くの如きは總力戰の内容が複雑にして了解に困難なるが爲の結果である。

總力戰とは最奥の語義よりすれば、實に宇宙の實相そのものである。

總力とは、宇宙の萬象一として獨立せるものなく悉く相即相入の關係にあることを意味する。無と云ひ、空と云ひ、或は本來無自性と云ふは實にこの意味にすべきであらう。

戰とは發展の實相に名付けて云ふ。辯證法と云ふものもこの戰の論理と見るべきである。宇宙生命の進展是を名付けて總力戰と呼ぶ。即ち宇宙の實相としての總力は具體的には常に戰として顯現し戰は常に總力の具體的様相である。

以上の如きは極めて特殊なる考へ方と思はれるかも知れぬが、總力戰の具體的研究の結果は常にここに到達すべきであり、斯る根底的總力戰觀を缺く場合には、兎角表面の事象をのみ追求して其の本質に徹し難い憾がある。

然し總力戰と普通に云はれる場合には、第一次歐州大戰の後期から自覺されて發展した戦争の形態を意味する。もとより總力戰といふのは茲に至つて始めて發生したと云ふのではない。過去に於けるあらゆる戦争は何等かの形に於いて總力を傾倒せるものであるが、歐州大戰に於いては著しい武器の發達、就中航空機の發達に伴ひ、銃後と戦線の區別がなくなり、外交戰、思想戰、經濟戰等が夫々武力を助けて夫々の分野に於て活動し、從來の戦争と比して深刻にして著しく總

力的なる展開を示すに至つた。而も戦後と雖も武力の建設 — 敵の武力を制限して自己の優勢を保持するが如きも亦一種の消極的建設である — 外交、經濟、思想等各分野に於ける戰は常に熾烈を極めるに至り、武力の發動を除いては戦時も平時も異なるところなきに至つた。斯くして常に總力戰は實施されつゝあり、わづかに武力の顯はなる發動の有無によつて、戦時總力戰と平時總力戰とを別つに過ぎない。

(國家總力戰) 次に國家總力戰とは國家が主體となつて戦ふ總力戰であり、總力戰は主として國家を主體として戦はれるものである。總力戰と國家總力戰とが殆ど同義語の如く用ゐられるのは全くこの故に外ならない。總力戰は必しも國家間の總力戰たるを要しないけれども以下總べて國家總力戰を略して總力戰と呼ぶことにする。以上の如き歴史の見地から云へば、總力戰とは交戦國が計畫的に常に其の物心兩面をつくして其の國家目的の完遂につとむる實踐の形態であると規定し得るのである。

總力戰とは云はば新しき國家統治の一形態である。

以下その内容に就いて簡單に説明することとする。總力戰に於ける總力は本質的には密接不離なる一體の關聯にあるのであるが、是を便宜上次の五類とする。即ち武力、經濟、政治、思想、學問であるが、もとより是は便宜の上からであり、且つ各類が夫々含まれる關聯にあることは總力の本質に鑑みて自ら明らかであらう。

右の場合武力以下の四類は皆夫々の分野を有し本來一體とは云ひながら異なるはたらきをするのであるが、就中武力はその建設維持の經費と發動の消費の莫大なる點、並びに其の直接に人間の生命を指向せるものなること更に能ふかぎり最終的に發動し、若くは發動せざるを以て可とする點より見て特に是を重視し、是を他分野との關聯に於いて總力の根軸となすを妥當とする。

以上の關聯は人體と對比して考へる時に一層明確となる。人體は典型的なる生命體である。今人體を總力とすれば、武力は骨格として全身を支へ、呼吸器官は思想、神經系は學問、血管は政治、消化器官は經濟とも考へられ何れも全身にゆきわたつて是を保護し是を養ふものである。夫等は特殊の領域を持つが、何れかの部分の危局に際しては相依り相助けてこれを中心となす非常の體勢をなし一つが破壊すれば他も亦是にと

もなつて破壊するが故に必然的に全體的相關的である。しかも人體には各機關の輻奏せる所謂急所がある。かゝる急所は現代の總力戦に於いては各分野にわたるのであるが、たとへば石油とか、アルミニウムとか、或は人口等の重要資源とか、地理的にはバルカン半島、トルコ等の地政學的重要地域乃至はインド、蘭印等の物質的重要地域、マルタ、スエズ等の國防交通上の重要地點等にあたり、かゝる項目や地域は極めて多く、且つ歴史的に變化するものである。これは前記五類の如き一般的なるものとどまらず、具體的現實的なる點に於いて一層の注意を必要とする。

總力戦は直接には常に對立せる國家、若くは國家群の間に行はれるが、斯かる國家、國家群間の戦は敵と味方の與國、好意的中立國、惡意的中立國等世界全體を戦争の舞臺として、即ち世界を一體とした立場に於いて實踐される。若し極端なる表現を以てすれば、本來一體なる世界は、世界各國により、各種の領域に於いて、其の前面にわたつて手鞠の如く十重二十重にとりまかれたる總力戦の球である。

(世界總力戦) 總力戦は常に世界を一體として實踐せられるべきである。よつて國家總力戦は常にまた世界總力戦である。國家總力戦が完全に遂行せられる爲には、常に世界に對して總力戦を行はねばならない。世界總力戦とは國家總力戦をその實踐の場所から見た名稱である。

二、皇戰

總力戦といふのは本質的には宇宙の實相であり、現象的には世界大戰後期から特に強く意識された戦争の一形態である。従つてそれは具體的なる戦争から抽象されて考へられたるものである。

具體的なる戦争は一つの行動であり、時と所と人との關聯に於いて論ぜらるべきものであり、就中その主体たるものと其の目的並びに其の戰場が明らかにならねばならぬ。

(皇戰) 皇戰とは實に日本國家によつてなされる、皇道關頭を目的とし、世界を戰場とする戦争である。しかもあらゆる戦争が總力的であつた如く、更に今後への發展に於いては夫は必然的に總力戦でなければならぬ。即ち皇戰とは皇道總力戦の謂である。

(皇道) 皇戰の何たるかを一層明らかにならねば先づ皇道の何たるかを知らねばならぬ。

皇道とは宇宙の眞理である、世界の實相である。更に精しく云へば、絶對にして無私、古今内外を一貫する大道である。四海平等、八紘一宇、世界萬民共存共榮の大道である。大御心そのものである。眞正平等の道である。茲に注意すべきは斯かる眞理が、特に皇道と名付けられる所以である。皇とは天皇の義である。皇道とは是を臣下より見れば實に天皇に歸一し奉る無私の大道路なるが故に呼ぶところである。この故に皇道を其の根柢より究めんとすれば先づ天皇の御本質に就いて究明せねばならぬ。

(天皇) 天皇の御本質を明らかならしめんとすれば、天地開闢に始まる國史の成跡によらねばならぬ。しかも斯る國史は從來の意識的無意識の歪曲を正し、其の眞相を把握するものでなくてはならぬ。然し是を精密に論證することは今の主題ではない。單に結論だけを提示すれば、世界は常に日本を中心として歴史的に展開し、日本歴史は常に天皇歸一即世界皇化なる一貫の法則によつて其の根柢を把握し得るものである。一言にして云へば、一體なる世界の中心として天皇がましますのであり、天皇に直接して日本民族があり、日本國家がある。

(民族・國家) 天皇崇拜とは日本民族にのみ妥當する特殊なる信仰なりとするが如きものありとせば、斯くの如きは天皇を私せんとする狹量者か、然らざれば天皇の唯一絶對性の確信に徹せず神によつて與へられたる我國の使命を否定せんとする非國民的見解にすぎない。しかし天皇に直接する民族、國家が、その大御心を体して世界に對する國体の明徴、即ち世界新正秩序の建設を行ふことは其の當然の使命と云はねばならぬ。

以上の所説を要約すれば、本來的なる天皇世界が愈々天皇世界たることが、皇道の本義であり、天皇世界たらしむる爲の實踐形態が總力戦である。而して總力戦的形態實は宇宙の理法その儘であり、皇道はかゝる理法の歴史的、具體的顯現の道としてそのまゝに總力戦の本質である。皇道總力戦とは同一の對象を二面的に觀察したものに外ならない。

(眞の總力戦) 皇戰とは具體的なる總力戦であり、唯一の眞實の總力戦である。絶對の中心を核として最も堅く總力を統一し世界を舞臺とし、是に随順するものをやはし、是に逆ふものを平げ、世界に、本然的にして且最も古くして常に新しき秩序をもたらすところ

の戦である。碎いて云へば大御心を奉体して日本國家を主体とする對世界策であり、國內体制の維新である。以下具体的な問題に就いて以上の見解を更に明瞭ならしめたいと思ふ。

(内外一如) 對世界策として國內革新とは決して二分して考ふべきものではない。一体なる世界をして皇道に歸せしめんとする時、國內の態勢の整備なくして、對世界策の實地なく、對世界策の樹立なくして國內態勢の整備は不可能である。

現下に於ける我國の方策としては先づ皇道の本義に徹し、爲政者も軍人も民衆も皆無私に歸つて其の方策を定めねばならぬ。従來の行掛りに捉はれて身動きのできぬ爲政當局、既成勢力と、所説の高尙なるが故に觀念的に傾く理想主義者との對立に對應し、是に確實なる立場を與へ、是が對策を究明して國家百年の大計を樹立すべく、一應従來の行掛りを捨て、白紙の立場にかへり、時空を一如とする必然性の究明によつてあるべき姿を豫察し、是を現實の立場より轉じてその理想に歸せしめねばならぬ。必然性の究明とは云つてもなりゆきに任せるのでなくして、組織的計畫的に國內体制を轉換せしめねばならぬ。是こそ皇戰の國內的實踐である。現在我國が當面する苦悶は、現實と理想との通路の缺落である。確實なる通路の樹立こそ當面の問題であらう。然し通路は常に現實に徹したるが故に把握されたる理想に於いてのみ發見し得るであらう。

對外政策に於いては第一に支那事變の解決がある。支那事變の解決とは、八紘一字の皇謨に則り支那をして一字ならしむるところにある。眞に一字たらしめんが爲には今後幾百年の努力を必要とするであらう。然し支那事變の解決を比較的容易ならしむるの道はある。それは支那をして反日と云ふあるべからざる情勢に導いた背後勢力を打倒することである。英國を首謀とする米佛既成勢力、赤色世界革命を企圖する赤蘇の打倒である。而してこの打倒に向かつて必然的に歩み寄つたのが反共を標榜し新秩序建設を目論む諸國である。是等の中心としての日本は明治御維新を境として押迫る白人世界制覇の残された最後の國として侵略の防衛に努め、日露、日清兩役を経て滿州事變に至り今や漸くにして亞細亞の反撃、世界史轉換の第一歩を踏み出したのである。獨伊の勃興も、支那事變も、第二次歐州大戰も悉く滿州事變の一石が投じたる世界の渦である。

しかるに日本人にこの自覺なく徒らに苟安を求めて、英米佛既成勢力の打倒、赤蘇の覺醒なくして支那事變の解決を求めんとするが如きことあらんか痴人の夢を求むるが如く、得んとするも得る能はざるのみか、國をあげて更に危殆に陥るるに過ぎないであらう。

世界の情勢はもとより複雑である。然しその根柢に於いて見れば、天皇世界の顯現、眞正秩序の建設を意圖する日本と、是に與する獨伊、新秩序建設に於いては一致しながら、其の指導理念に於いて唯物思想の迷妄を脱せず、建設よりも破壊を主とする赤蘇と。白人制覇の現状を維持せんとする英米佛がある。世界はこの對立二勢力の複雑微妙なる組合せである。故に當面の問題たる支那事變の解決は、即ち對世界政策の樹立であり、その根柢には舊秩序と新秩序とその新秩序諸國の指導勢力として新秩序を助け、舊秩序諸國を救濟する絶対慈悲の具現たる皇道日本の主體性が確實に把握せられねばならない。しかし支那事變の解決は必然的に是が遂行を確保するが爲の國內体制の革新を要請するに至るのである。

しかし茲に注意すべきは、理想と現實との通路の缺落であつた。我等は國內革新、世界政策樹立の要求をきくこと久しきものがある。しかもなほ現實にあるものは、理想と現實との相剋である。現實を觀るものは極端に悲觀し、理想を追求するものは徒らに樂觀する。しかし喜悲を超えて要求せらるるものは必然を自覺せる破壊なき轉換である。しかしてこの要求に應じるべく新しき學戰の任務がある。

三、學戰

學戰は總力戰の一翼として學問を中心とする戰である。是本項の最初に於ける學戰の規定である。

(思想戰と學戰) 學戰と呼ぶのは近來の用語であり、始めの中は主として、政治的 — 極めて廣義の — 意圖のもとに學問を手段として敵を屈服せしむること考へられてゐた。従つて他の分野との關係に於いて、就中思想戰との關聯は極めて密接にして不可分である。むしろ思想戰の一部と考へられたのである。しかし思想戰が兎角宣傳戰の意味に狭く解せられる今日に於いては、學戰の重要性に鑑みて是を特にとりあげて考察研究するの要がある。大體學戰と云ふ言葉は現在に於いては猶未熟なのであり、それだけに種々の誤解を招き易い。茲に最も了解しやすい一、二の例をひいて説

明することとしよう。

第一には主として哲學的な分野に於けるものであるが進化論學説の如きは是である。英人ダーウィンの進化論は生物界の一部に妥當する、優勝劣敗、弱肉強食、適者生存の法則であるが、是を不當に擴張して唯一の世界觀となし、最も遅れて發達せる歐州の文明諸國、就中英國が以て自らの白人選民主義的世界制覇を意義づけんとせしが如きは、最も根柢的にして、その弊害の顯著なる例であらう。

なほ機械論的人間觀に立脚せる醫學が、却つて人間の健康を損ね、日本人の如き西歐直輸入の醫學の毒するところとなつて年毎に體質を低下せしめつつあるの現状である。これも亦學戰の一例たるを失はぬであらう。

(皇道學戰) 皇戰の一翼としての皇道學戰は、斯かる舊來諸學の迷妄を打破すると共に、是を轉じて眞正なる學を建設するにある。誤れる學を普及せしめて敵を苦めるにあらず、正しき學を以てその迷妄を打破し、是を救濟するにある。概略して云へば皇道に則る眞正なる學を樹立し、この力によつて世界に正しき秩序をもたらすことである。

斯かる學の樹立は如何にして可能であるか。先づ我等は自己の立脚地に對して徹底的に反省しなければならぬ。徹底的に反省することは即ち本來無一物の自覺に立つことである。思ふに從來の學問に於いては、或は作爲的、詐術的に眞理を歪曲せるもの尠からず、中には其の未熟誤謬に氣附かず、徒らに是に陶醉迷信するものがある。

今日に於ける日本の學徒は、在來の諸學、就中近世自由主義制覇の現代に於いて、明治以來の學制に基き、七十年に亘つて扶植せられたる歐米直輸入の學を學ぶのである。たとへ完全には是を咀嚼し消化せりと考ふるもなほ歐米直輸入の域を脱しない。皇道に則る直輸入的諸學の再組織は焦眉の急ではあるが、また極めて困難なりと云はねばならぬ。

自己の立脚地に對する徹底的反省は、主として學問の前提たるべき世界觀の問題である。新しき史代的轉化は今やあらゆる意味に於いて正しき世界觀の樹立にまたねばならぬ。しかし今日に於ける學徒は先づ自己の立場に對して常に根柢的な反省を加へると共に、從來の立場を離れて新しき立場に移り得るのでなくてはならぬ。本來無一物は嬰兒の如き柔かさ、最高の

緊張とを意味する。

立場の轉換は學戰戰士たるの第一要件である。若し轉換の行はるゝに於いては同一の素材に對し、從來の資料を扱ひつゝしかも著るしき差を示すであらう。この轉換こそ舊來の學問を生かし、誤謬を是正するの根源である。これなくしては過去幾百年の人類の智識も却つて兇器となつて學徒を毒し人類を損なふ。今日の世界動亂が唯物主義、自由主義の必然の結果なるに見るも明らかなるところである。

以上は學戰の意義を明らかにしたのであるが、次には總力戰中に於ける學戰の領域に就いて考へたい。

(總力戰と學戰) 學戰に於いては先づ總力戰なるものゝ意義が明らかにされねばならぬ。總力戰を直觀的に把握するに止まらず、その本質を明らかめ、内容を明確にし、其の歴史的過程を考へ、將來を豫察し、是が對策樹立の根柢をなすにある。必然的當來を明らかにし、現實をその根柢より把握し、兩者の間隙なき推移の爲に對策の根幹を究めねばならぬ。こゝに學戰の使命があることは皇戰の條下に既述せるところである。しかして斯る目的に於て學戰の根柢たるべきものは實に正しき世界觀の樹立である。

次には當來世界の豫察と是が顯現への對策樹立の根柢たるべき時空一如の見地にたつ綜合歴史地理の建設である。世界觀を以つて根柢とすれば、綜合歴史地理の建設はその双翼たるべきものである。

皇戰の世界觀の何たるかに就いては既に述べたところで略明らかであらう。歴史と地理の建設に就いては以下に於いて略述することとする。

四、歴史と地理

皇道學戰の根柢には皇戰觀—皇戰世界觀—の確立が先づ要望せられる。この根柢の上に新しく諸學の体系と其の再組織が考へられ、斯かる諸學は皇戰の一翼として、舊來の諸學を批判し、是を是正してその本然の光を輝かしむべく、また自ら戦ひつゝ皇戰遂行の方向を指示し、是を現實との關聯に於いて明確にし、その方策の根本を形成するのでなくてはならぬ。

斯かる諸學が、宙に浮いた學問、實踐と無關係な學問でなく、最も實踐的にして、また最も學的なる學問、恰も從來に於いて矛盾するが如くに感ぜられつつあつた、實踐的と學的との二契機を止揚するものでなくてはならぬことは自明のことである。

今まで論ぜられつつあつた所謂實學なるものが、主として純粹なる學問(?)の應用を中心に考へられ來つたのは、斯かる對立の折衷的態度であつて眞に是を止揚せるものではない。寧ろ眞に學的なるものは、又最も實踐的であらねばならず、實學とは、「まことのく」なるが故に「實踐の學」であるといふのでなくてはならぬ。

以上の如き立場から考へる時、これらの諸學が有すべき條件は如何にあるべきであらうか。

第一には総合的であるといふことである。即ち相即相入的現象の世界に於いて、この一如關聯を確實に把握するものでなくてはならぬ。云ふまでもなく綜合は反面に分析を伴ふ。併し機械的に精密なる分析を以て能となし、綜合の基底なる全体に對する把握を缺くことは最もつゝしまるべきである。

第二には無私なることである。從來の實學の提唱に於いて最も誤解されてゐたのは、實學とは政策に隨順する學である。學の政治への屈服であるといふ點であつた。しかし今要望せらる學問は政治を指導する學問でなければならぬ。もとより如何なる時代に於いても學者の發表等に就いては常に何等かの制約がないわけではなかつた。しかし其の故に學問が誤魔化されていゝと云ふのではない。政治も學問も悉く無私の「まこと」から生れ、清澄なること「鏡」の徳の如くあるべきものである。少なくとも學者は先づその研究を通じて本來無一物たるの自覺に立たなければならぬ。是はあたかも學者の問題であり、學問の問題ではないかの觀があるが、斯かる學者と學問の分離程危険なことはない。

今日に於ける學徒たるものは、興へられたる立場と、習ひ慣れた方法と、無目的の目的とに倚存することなく、常に自らの立場を求め、自らの方法を探り、目的を確め、その研究をして自己の血の通ふものたらしめねばならぬ。

以上の諸項に顧みる時、今日に於いて特に必要なる研究は歴史と地理であらう。縦に過去現在を一貫して未來を指向する歴史と、横に世界を一体としてその現状の景觀的研究より本然の姿を彷彿たらしめる地理との綜合的研究は最も注意すべきものであらう。曾つては其の綜合性の故に自らの學的性格を定めかねた歴史と地理が、その綜合性の故に今日に於いて其の學的意義を明確に把握し、更に歴史と地理とを綜合して、所

謂時空一如の見地よりする根底的綜合學を樹立することは現在特に必要なるところであらう。

古來歴史と地理とは相伴つて研究され來つたことは東西其の軸を一にする。古くは寧ろ二つが一体として把握せられ、歴史と地誌とが未分の状態にあることが普通であつた。支那の二十五史が多く地理志を含むことや、ホーマーのオデツセイの如き一面歴史的記述として地理的記載を含んでゐるが如きはこの例である。我國に於いては國体の自覺と相伴つて聖徳太子の天皇紀と國紀の如く、記紀と風土記の如く何れも兩者相俟つて編纂され來り、近くは徳川時代に於ける水戸義公の大日本史と常陸國誌の如きがある。更に明治二年大命を奉じて六國史に繼いで國史を編纂すべく史局を置かれた際にも引續いて地誌編纂の事を行ふに至つたのである。

明治維新は復古即維新として皇道を根軸とする革新であつたが故に、自らへの反省たる國體への自覺と相俟つて歴史と地理と相並んで編纂されるに至つたのである。しかるに維新前に於いてさしも旺盛なりし尊皇精神が、明治の西洋文明吸収と共に一轉し、排外精神は對象を代へて更に著るしくなつた。こゝに於いて地歴の學者就中史家の態度の如き殆ど文獻學的考證學偏倚性に墮して當時の鬱勃たる機運に適せず、遂に多くの業績を見ることを得なかつたのである。

方法に精密にして、大觀に徹せず、萬全を求めて小心翼翼たるは學者の通弊である。もとより不精密よりは精密なるべく、萬然を期すべきではあるが、是に終始して徒らに古人の糟粕をなむるなからんことを期せねばならぬ。

明治の歴史、地誌編纂の失敗に鑑み、新しき學徒は自ら警しむるところがなければならぬ。以上學戰の原理としての大体を述べたのであるが、以上の如き見地より新たに編纂さるべき地理と歴史に就いて特に要望せらるべき二三の點をくりかへし強調しておきたい。

(一) 學者は現在の世界情勢に就いて不斷の關心と適確なる認識を必要とする。特に史家は過去より現實を見、未來を察すると共に現實より過去を見、以て未來を明らむるの一面を省みるべく、現實に對する關心を必要とする。景觀認識の歪曲を正すべき地理學徒に於いては常に現實の認識に注意すべきことは言を俟たぬ。

(二) 常に世界を一体とし、世界全体にわたつて是

を綜合して研究すべきである。この點については、既述せるごとく、總力の本質、内外一如等に對する不斷の注意が要望せられるのである。特殊なる時代、特殊なる地域を中心とすると雖も全世界史と全世界地理が、たとへ概觀的になりとも常に意識せられてゐねばならぬ。

(三) 世界が天皇世界なることの認識である。この點に關しては最早くりかへす要はあるまい。しかしあらゆる研究が、相俟つてこの認識を確かめてゆくことを豫期し得るのである。

(四) 天地人相關の立場より一步を進めて天地人一如の見地に立つことである。地人相關を天地人一如となして考察すべきである。

是を要するに世界を空間的、靜的、景觀的に研究するところに皇道世界地理の新しき建設があり、世界を時間的、動的、因果的に研究するところに皇道世界歴史の新たなる樹立がある。しかも時空一如の見地よりする綜合がこれらの學をしてよく現代を指導して、皇戰の實踐を完からしめるであらう。



禁公表

東方問題の基礎條件

(昭和十五年八月)

野間 三郎

目次

- 一、地理的考察
- 二、世界政策と土耳其
- 三、露西亞南進史
- 四、土耳其外交の本質
- 五、現在情勢の判断

一、地理的考察

歐洲に於て擾亂が過ぎ去り革命が鎮靜に歸すると、平和はやがて所謂東方問題を取り上げて退屈覺しを始める。此が一九世紀以來の歐洲の一つの姿である。フランス革命の後、ウイーン會議の後、又は七月革命の後に土耳其に關して歐洲に戰塵が捲き起こつたのはその一例であつた。かくして再び歐洲の平和は姿を消す。東方問題は厭きることなく繰返される。嘗つて完全に解決されたことがないからだ。對立する一方が君府を入手すれば勢力の天秤は直に傾く。一國の進出は列國の干涉を呼起す。現状維持といふのが止むを得ない唯一の方針であつた。東方問題はかくて解決されるわけがなかつたのである。かくしてこの問題は永遠の問題

になりおほせた。

どこか一國が、臆せず進んで自國の優位を土耳其に確立する程、隔絶した實力を誇り得る國は未だ存在しなかつた。アレキサンダーの露西亞、ナポレオンの佛蘭西、ヴィクトリアの英帝國、ヴェルヘルム二世のドイツ、それ等も悉く例外たり得なかつたのである。

土耳其問題はいはゞ歐洲の心臟であつた。そこを衝かれると肢體は反射的に縮み上つて加撃者を拂ひ退けようとする。歐洲の全體の嫉視と敵對せずして土耳其問題に手をつけることは誰にも不可能であつた。こゝに土耳其問題の困難と同歸性が存する。

印度に至る直接通路が発見されぬ以前に於る近東の交通貿易上に於る重要さは譬様も無く大きいものだつた。歐亞の橋梁地帯として、こゝに君臨するものは坐らにして渡橋賃を捲上げる。十字軍の目的が聖地奪還といふ宗教目的によつて企てられたものでなく、寧ろ割りのよい近東地方の商業を手中せんとする西歐の經濟的欲求であつた。發見後英國の印度經營が確立され歐亞の貿易が海上に於て營まれるに至つても近東の商業上の重要さは一向變化しなかつた。スエズがこの航海の關門だつたから。

スエズの重要性は誰の目にも瞭然である。然しトルコの、近東の、貿易上交通上の核心的重要さはスエズの他にもある。即ち黒海だ。黒海を閉却することは近世歐洲史を理解せしめ得ないであらう。

中部並に東部歐洲は、即ち歐洲の三分二は黒海によりて生存してゐる。ドイツ及び波蘭の一部、全洪牙利、露西亞の最も肥沃なる部分、それからヨーロッパ土耳其—セルビア、ブルガリア、ルーマニア—はその主産物たる農業生産、羊毛、皮革、を運び出す爲には黒海に出ねばならなかつた。ダニユーブ、ヴオルグ、ドニエストル、ドニエプル、ドン、此等の河が鐵道の代りをつとめる。ガラツツ、オデツサ、タガンロツクがその船積港となつた。

中部及東部ヨーロッパのみならず、小アジア、中亞の貿易は又黒海に多く依存する。トレビゾント及びコンスタンチノーブルはチフリ、ユーフラテス兩河地方、波斯、トルキスタンへの商品の中心市場となる。バグダツド、シラーズ、テヘランを控へ更にテヘランはキバ、ポハラへ通じてトレビゾントは中亞に對する一大門戸をなしてゐる。露英の角逐は一面に於てはこのトレビゾントに於て闘はれたといへる。

千八百四十年頃まで中亞はロシアの商品市場であつた。ロシア製品はインダス河まで侵入し、時には英國製品をも壓倒したといふ。アフガン戦争、シンド及パンチャブ征服以後、英國の中亞貿易はインダス河及黒海によつて次第に露國を壓倒する。十九世紀後半に於てトレビゾントは今や露國中亞貿易最後の關門として、英國に對して死闘を以て守らねばならなかつた。

ボスポラス、ダーダネルス兩海峡の意義は一つにはかゝる黒海貿易との關聯にある。この兩海峡を支配するものは黒海を自己の海とするを得る。つまり黒海貿易を壟斷し、歐洲の三分二の死命を制し、小亞、中亞への關門を扼するといふわけだ。これが兩海峡の商業的意義である。

兩海峡の商業的意義はそのまゝ直に軍事的意義である。狭い海峡は僅の施設で敵國の黒海への出入を完全に遮斷せしむる。この海峡の軍事的占領が黒海を含む廣き地域に於る軍事行動に決定を與へるのだ。

コンスタンチノーブルの軍事的價值といふものは畢竟兩海峡の意義の内に含まれ、且夫を代表するものである。

古の東羅馬帝國の中心に存し、歐洲と小亞細亞を結ぶ唯一の陸路に當る。ヘレンスポントは此の點に於てボスポラスに譲らねばならぬ。そこはアジアと歐洲間に實際上價值ある通路より、又シリアへの通路から餘り離れすぎてゐるのである。ボスポラスは此の點に於

て歐洲から小亞細亞内部へ、アルメニアへ、シリアへ向ふに便宜である。ボスポラスの北部は、しかしながら黒海に向つて絶壁の形をとる荒涼たる高原である。南方は、コンスタンチノーブルの存する南方は、マルマラ海に面する平坦肥沃の地であるが故に、歐亞をつなぐ道路は自らこゝを通過せざるを得ぬ。コンスタンチノーブルは此の要衝に存する。

海上交通、黒海と地中海とを結ぶもの、は又此所にその中樞部を握られてゐる。ボスポラスはヘレンスポントに比して遙に狭い。船舶の往來が最も完全容易に支配されるのはは此處に於てである。この海峡に於て風浪と潮流及敵襲に對して防禦され且つ廣い海面を有する唯一の場所は金角灣であり、しかも此灣は前述の陸上交通との要衝でもある。

コンスタンチン大帝が城壁を作つて後、テオドシウス二世亡塔城と今日呼ばれる三重の城壁を構築して（四一三一—四四七）背面の敵に備へ、海上よりの敵はボスポラス、ヘレンスポンドの海峡で迎へられる。かくしてコンスタンチノーブルは土耳其人の猛襲を前に孤立のまゝ永い間難攻不落を誇つたのである。

セントヘレナ謫居中のヴオナパルトが歐洲の前途を卜して、百年以内に露西亞の一統する所とならざれば、悉く共和政に歸せんと語つたのは、近東の、兩海峡の、君府の意義をよく傳へるものと考へられる。

當時ロシアは欲得以來の南進策を踏んで次第に南方に歩を進め、歴山三世治下のロシアは歐洲の友邦たるの實を具へてゐた。佛蘭西革命とロシアの専制主義、これが當時歐洲を二分し相對峙するものだつた。ロシアが君府を手中するのは殆ど必至と見られた。

ヴオナパルトの豫言は、この殆ど必至と見られながらも實現されなかつた豫想を豫想としてゐた點で失敗した。然しながら、もとロシアが成功したならば正にヴオナパルトの言の如くならざるを得なかつたであらう。

兩海峡を得た暁には黒海はロシアの内海となるであらう。ダニユーブがロシアの河となる。アルバニア沿岸部を收めてアドリア海に勢威を振ふに至ればオーストリーの領土は甚しく安全感を殺がれる。トルコとギリシャに海への玄關を定めることになれば、東部地中海はロシアの爲に確保されねばならぬことになる。スエズを持つエジプトとリビヤがロシアの視界に入る。併合と希望の擴大、それ等は際限なく進行するに違な

い。スエズを抑へたロシアは、南方にあつて前進の障碍となつてゐた印度以西の回教圏に一齋に進出を試みずばやむまい。

全く馬鹿げたことだ。ナポレオンの豪腹を以てせねばたとへて假定の話としても承認し得るものではない。

兩海峡の奪取とそれに續く併合の無限の擴大はロシアの場合にのみ限らない。列強の何れが主人とならうとも、それはその國にとつて遙かに續く前進の根據地であり、他國にとつては前進の中断と自國勢力の分離を意味せずには止まない。

黒海とバルカンと兩海峡と東部地中海、此等が連なる一線である。此の内の一つは同時に他を意味せねばならぬ。所謂「東方」意味した所である。ダニユーブが大きい意義を持ち、バルカンが列國争奪的となる所以である。

ヨーロッパの中心に源を發し、アジアに通じ又アジアよりヨーロッパの中心部に容易に達し得る公道をなしてゐるこの大河は様々な問題を惹起す。ダニユーブ河口の占據はダニユーブ河の支配を意味し、歐洲よりアジアへの通路と、逆にスキス、ドイツ、ハンガリー及バルカン一帯の通商の大部分を扼することとなるわけである。

「東方」はかくの如く天秤の支點であり、云はゞ世界の中心である。兩河地方より始つて文化が世界に波及した如く、この「東方」を手中するものこそ、世界に向つて支配の手を差伸し得るのである。

二、世界政策と土耳其

澳太利が東進を策するに至つた普澳戰役によりドイツ聯邦より除外され、西方の關心を一先づ抑へねばならぬ事態に立至つたことであつた。

ダニユーブの支流モラウア河によつてセルビアを通り、ヴァルダル河を下つてエーゲ海の要衝ザロニカに出るバルカン南方の大道と、ダニユーブによつて黒海に出でる二つの道が澳國東進の二通路であつた。

これがセルビア、モンテネグロ、ギリシヤ、ブルガリヤ及ルーマニアを含む大澳太利、即「ダニユーブ體系」を建設する骨格として選ばれたのである。然してこれが一九世紀後半の歐洲を角逐の絶頂へと導いた勢力の一つである。

澳太利の背後に獨逸を見るによつて、この中歐よりする「東方」への壓力が容易ならぬものとなる。

獨逸統一を専らにしたビスマルクが誂けられた日が即ち東方に火薬の伏せられた日であつた。大陸政策より世界政策への轉換は必然ヴイルヘルム二世をして土耳其を友邦として選ばしめた。汎ゲルマニズムといふ若き皇帝の世界政策が、歐亞の中樞「東方」を自己に結び、それを通じて擴大せんとする三B線を政策として脳裏に描いたのは此れ亦然りといふ他ない。

歐亞の中樞は同時に世界帝國を稱する英國の中樞たらざるを得ぬ。ピット以來英國の東方政策の渝らざる所以亦論ずるまでもない。

東方に對する澳獨英或は佛の關心は元より必至のものであつたが、ロシアの關心はその地理的關係と傳統に於て、亦劣るものではない。

尨大なロシアは世界通路につながりを有せぬといふ點で不自由な足をもつ巨人であつた。南進が黒海を通じて地中海へが、ヨーロッパ的國家を作り上げたピーター大帝以來の宿題であつたのは當然の結果以外の何ものでもないのである。

バルカンの住民は移動と混血と、それから起原の不明な民族によつて甚だ錯雜し、こゝに於る人種或は民族といふ概念は決して裏面的な解釋を許さない。

古代にイリリア人、トラキア人、マケドニア人と呼ばれた三民族がこのバルカン半島に擴がり、夫々ギリシア化、ローマ化されることはあつたが、現代バルカン人の基調となつてゐることは依然たるものである。七世紀に於けるスラブ人の侵入は然しながら、バルカンに於る民族分布を攪亂し、その強靱なる勢力、混血すれば必ず他を吸収するといふ人種的優性によつて忽ち全半島をスラブ化せずには措かなかつた。東スラブ(ロシア)、西スラブ(ポーランド、ボヘミヤ)と共に彼等は南スラブと稱せられる。スローヴェン人、セルブ・クロアート人、ブルガリヤ人と呼ばれるものがその三部分を形成する。

アルバニア人とワラキア人は十一世紀に突如出現した。つまり一〇八七年アンナ・コメナに始めて言及されたといふわけである。

慄悍で獨立的な、半遊牧のアルバニア人は一部はギリシヤ教を、残りは回教を奉じ、古のトラキア人の末であらうと考へられてゐる。ワラキア人は、嘗て全バルカン及ギリシヤに廣く居住したが、今や殆ど全く衰亡し次第にギリシヤ人に吸収されつゝある。ギリシヤ正教を奉じてラテン系の言語を語る。トランシルバニ

ア及ブユヴィナの彼らは奥太利に、ベツサラビアの彼等は露國に屬してゐた。

そして最後にギリシヤ人がゐる。

南スラブ人が露西亞語に近い言語を語り、ダルマチヤ人、クロアチア人を除いて凡てギリシヤ正教に屬することは不思議ではないが、この言語を宗教によつて彼らは強くツアーに結び付けられてゐた。彼らが千二百萬のバルカン人中七百萬を占めている。

更にこのヨーロッパ・トルコに於る住民の十分九がロシアと宗教を同じくしてゐる。こゝにロシアが東方に於る優位を着々と築いた根柢が存するのである。

實際トルコの強烈な腕力が西歐の畏怖を捲起し、西歐はその文化の野蠻を蔑み、その交際の中間に引入れぬことによつて僅にその誇を維持した時分、この半アジア的なロシアはトルコの眞實に通ずることが出来た。バルカンに於る歴史がロシアの政策を主軸として展開したことの一つの理由である。

西ヨーロッパ諸國のトルコに對する無智と恐怖、無定見の自然の結果はロシアのバルカンに於る着実な進展であつた。それが西歐の政治家の現状維持といふ反抗に阻止されて一歩づゝの僅かの前進しか果たされなかつたとはいへ、この方面に於るロシアの優勢は否むことを得ない。しかも又現状維持といふ西歐政治家唯一の方策、即無策はバルカンに於るロシアを喰ひめると同時にロシア勢力の助長といふ方向に作用したのである。

キリスト教徒であるトルコの臣民、即ちバルカン人にとつて、現状維持はトルコの暴政を是認し永久化するものであらねばならない。ギリシヤ教會の首長たるツアーが解放者保護者として、彼らより手を差伸べられる事は自然の勢でなければならぬからだ。

然しながらロシアの前進が一歩づゝ無定見な政治家の目をかすめて行はれてゐる間は、たとへ一歩づゝとはいへ前進は許容されてもよかつた。しかしロシアが兩海峽に進出する、即ちバルカンの一部分に領土を廣めることでなしにトルコの中樞を、従つて歐亞阿三大陸の中樞を握る希望を明にしたときには忽ち全歐の猛烈なる決意に出會はねばならぬ。これは夫々の政治家の政策でも決意でも何でもない。國家の危機を本能的に察知した國民の自然的な阻止運動に他ならない。この故に、ロシアに限ることではないが、兩海峽の専有はトルコに對する戦争によつてではなく、正に全歐に

對する宣戰によつてのみ許されるのであつた。又今に至るもそうである。

三、露西亞南進史

トルコが一二九九年小亞細亞西北の一小地に建國して以來、十六世紀半葉に於る第十二代スレイマンに至るまでに、全小アジア、アルメニア、兩河地方、シリアを征し、アフリカに於ては埃及よりアルゼリアに至る北岸一帶の地を領し、歐洲に於てはバルカン半島、ハンガリア、クリム汗國に至る東南歐一帶にその覇權を確立した。遊牧的な剛勇と、武斷の君主が二世紀の間によくこの領土的發展をとげしめたのである。第三代ムラド一世の時の創設した「新軍」はこの時期に於る精兵トルコの象徴であつた。領内の歐洲基督教徒の子弟を選抜徴發して、六才の幼より軍隊生活を行はしめ、トルコ兵士の精髓を注込ましたこの新軍はトルコ軍の花形として縦横に基督教徒を撃破したのである。

敢爲の世系を蠹蝕した後宮、領土の擴大に反して停止する文化は既に十三代セリム二世（一五六六—一七四）の世にこの帝國の内部的崩壊を開始してゐた。トルコ軍の勢威が僅にこれを蔽ひかくしてゐた。その侵略は唯兵士の行軍のみで足りた。戰鬪を交ふるの要はなかつたといふ。

一六九九年のカルロウイツツ條約は無益なトルコの進撃を受けとめて歐洲が築いた最初の記念碑である。しかしこの戰役の結果に於て、奥國の善戰をでなく、土耳其の内部的腐敗をかぎつけたものは敏感な鼻をも後世の歴史家である。一六九九年を土耳其衰退の序幕であると歴史家は考へてゐる。

然しながら實際にはそれ以後に於る土耳其の度々の拙戦と敗戦にも拘らず土耳其の内實を透察し得る政治家はなかつた。一八五〇年代、漸くクリミヤ戦争の前年に土耳其を「瀕死の病人」と呼んだ露帝ニコラスは大膽な發見をしたともいへるのである。

露西亞の南進はビータ以來の國策であつた。しかしそれも最初の間は土耳其軍の餘勢によつて、後には歐洲諸國の妨害によつて容易に進行しなかつた。一歩づゝ着実に前進したといふたのもつまりこのことである。

殆ど君府近くまでの全バルカンを占領する大勝を行ふても、その獲物はドニエブル河畔に於る土耳其要塞を破壊することで終るといふ様な僅かづゝの前進しか

許されなかつたのである。

- 一六九九年 カルロウイツツ條約。ペータ大帝土耳其よりアゾフを獲。
- 一七一一年 プルート條約。土境關ひ、匈牙利、ワラキア、セルビアの大部土國領となる。
- 一七三九年 ベルグラード條約。女帝アン黒海沿岸に一小地を占む。
- 一七七四年 クチユクカイナルジ條約。カザリン二世クリミヤを得。但し他の占領地は悉く返還
- 一七九二年 ヤシー條約。ドニエブル河を以て露土の境界とする。
- (一八〇七年) テルジツト露佛協定。露モルダウ、ワラキアより撤兵。
- 一八一二年 ブカレスト條約。プルート河を露土の國境とす、モルダウ、ワラキア土耳其に返還
ベツサラビア及モルダウの一部露領となる。
- 一八二九年 アドリアノーブル條約、露占領地帯返還。但し希臘獨立。
- 一八三三年 ウンキアル、スケレシ條約。露土同盟、兩海峡通行權を得。
- 一八五六年 巴里條約(クリミヤ戦争)ダニューブ河口二州の保護權露の手を離れ列國の共同保護となる。
- 一八七八年 サンステファノ條約(露土戦役)。ベツサラビア再び露領となる。勃牙利自治(但し土領)、セルビア、モンテネグロ獨立、ボスニア、ヘルツエゴビナ自治(但し土領)、ルーマニアは巴里條約にて得たるベツサラビアを露に奪はれ、代りにドブルジャを得て獨立。
- 一八七八年 伯林會議、大ブルガニア建設阻止さる。

以上の歐洲に於る東方紛争即露西亞南進運動の年表は露西亞の飽くなき努力をこの上なく明瞭に物語つてゐる。條約と條約の間には絶え間ない戦争が續いてゐる。しかもその條約は争亂の解決でも何でもなかつた。かくして十八、九世紀を埋め盡す戦争、しかも聯勝を以てして露は常にその前進を思止らねばならなかつた

のである。

露の前進の努力がいかにも列國によつて阻止されたが、前掲の年表に簡単な解説を附してみる。

土耳其に對する抗争ははじめ奥國によつて代表されてゐた。ペータの時代至つても尚當分は奥國の強盛となるを欲せぬ事情にあつた。この時の奥土の衝突は佛國の離間に基いて起つた。協同者露のクリミヤ、オクサコフに於る大勝にも拘らず、奥の敗戦はこの露の戦果を無に歸せしめたのであるが、その間奥の拙戦を利用して奥をして露に無斷土耳其と和約を結ばしめたのは佛國であつた。終に露もこゝに於て餘儀なく土耳其と和してその戦果を放棄することとなる。

次の一七七四年クチユク、カイナルジ條約は露の占領したクリミヤ、ワラキア、モルダヴィア及ベツサラビアと高架索に於るジョルジア、ミングレリアの内唯クリミアのみが露領となり他は悉く返還されねばならなかつた。然し露は此の條約によりてトルコ領内に於るキリスト教徒保護の優先權を獲たことに據て、將來トルコに干渉し又進撃する武器を得たことにはなつた。然し大勝に比して戦果の小であつたことには普奥の妨害といふことが考へられる。元來この戦争はプロシアが提案し奥露兩國が賛成したところの波蘭分割に端を發して一七六九年に戦争と化したものである。然るに露が戦勝を續け領土擴大の勢を見せるや、普奥は直ちに露土間に調停を買つて出たのである。カザリン二世の拒絶によつてこの妨害は直ちに結實はしなかつたが、一七七一年末休戦しブカレストに開いた會議が不調に終つたことによつて一七七三年露土間の開戦となつたものであつた。この戦の結果たるカイナルジ條約はその内容に於て前年のブカレスト會議に規定する所と大差ない。

次に一七九二年のヤシー條約は、一七八七年奥露共同の對土戦争の結果である。その打續く戦勝も英、普、和の防備同盟の強力なる干渉によつて先づ奥が休戦し(一七八九)次いで露も亦同様休戦の止むなきに至つたものである。

英國は十八世紀の大半を通じて露國と親密なる關係にあつた。即ち露を以て佛を制せん爲であつた。然し今や露が次第に土耳其を併呑せんとする形勢を見て、「土耳其帝國は歐洲列強の權衡上甚大なる意義を有するもの」たることを知るピットの明察が露に對する英の干渉政策となつて現はれたのである。向後露は常に

英の妨害に出會はねばならぬことゝなつた。然しながらこのヤシ條約は露をしてバルカンに至る競争國たる奥國の優越的地位を奪ひ此に代らしめたものであつた。

一八〇七年セルビアの獨立運動に始まり、一八一二年のブカレスト條約に終つた戦争は、此は土を助けるナポレオンの牽制によつて露をして終にモルダウ、ワラキアを土耳其に返還し、ベツサラビア及モルダウの一部を得るに止らしめた。

一八二九年アドリアノーブル條約に終る一連の戦争は一八二一年に起こつた土領たる希臘獨立の叛亂に始まる。まさに君府に迫らんとした露土間に休戦を見たこの條約に於て、露は終にダニューブ河畔に於る土の要塞を破壊せしむることを得たのみで、占領地は悉く返還、寛大なる態度によつてトルコに勢力を布かんとする止むなき方策をとるに至つた。

即ち、英國は土耳其を犠牲にして露の伸展するをもとより好まなかつたが、しかも又希臘にして平穩に歸することなくば、露は此に干涉の機を窺ひ、土耳其に對して侵略を見るのが必至である故に英國は露と共に土耳其に干涉して希臘の爲に自治獲得に盡すると共に、然も此をサルタンに従属せしむることによつて露をして進出の機を得しめざらんとしたのであつた。

一八三三年のウンキアル、スケレシ條約は露土の同盟といふ奇妙なものであつた。土耳其の治下たるエジプト大守マホメット、アリは一八二四年希臘の叛亂鎮壓に功あつたが、その時土耳其より賞としてシリア、トリポリダマスカスと與へるといふ約束を得たに拘らず、一向實行さるべくないのに憤り、佛國の背後よりの援助を得て、その子イブラヒムをしてシリアを攻略し小アジアに入らしめた。こゝに於て土耳其は英國に先づ救を求めたが、パーマストンの短見は此を拒絶し、終に土耳其をして露に救を求めしむるに至つたのである。露はこの好機を見逃すものではなかつた。土耳其に對する實質上の保護權はかくして無償で獲得されたわけである。英佛はこゝに至つて始めて驚愕した。英は先に土の申入を拒絶し、佛も亦マホメット、アリの後援者であつたのだから、この驚愕は全く愚鈍を極めてゐる。然しながら今や彼等は必死となつて露軍の君府駐屯を阻止することに努力を惜しまなかつた。露軍君府駐在の根據はイブラヒムの前進にありとし、一方埃及を抑へると共に、土耳其をして露軍を君府より撤退せしむべきことを勧告した。ウンキアル、スケレシ

條約はかくして出来上つたのである。露は撤兵の代償として兩海峡の通行權を得、君府に於る牢固たる勢力を築き上げたのである。

クリミヤ戰役の發生は聖地保護並にギリシヤ教會保護權を手中にして土耳其支配に一步進めんとした露の要求を、英國が土耳其をして拒絶せしめたところにある。

ボスニア、ヘルツェゴビナの一揆とそれに續くセルビアモンテネグロの對土宣戰を先驅とした露土戦争（一八七七一七八年）は、露軍がアドリアノーブルを陥れ長驅君府に入らん形勢を示した時、再び英國の阻止に會ひ、サン・ステファノ條約を締結することになつた。セルビア、モンテネグロルーマニアの獨立とブルガリア、ボスニア、ヘルツェゴビナの自治を土耳其に承認せしめたこの條約はバルカンに於る露の素志の完成一步前にあることを示すものだけに英國の承認し得ぬ所である。この英の改訂要求によつて兩國の間に生じた戰雲を利用して伯林會議招集に成功したビスマルクは、この會議を機に終にアドリアノーブル條約改訂の爲ではなく獨逸の爲のものとなしおほせた。東方に於る立役者は一朝にして露より獨に移ることゝなつたのである。

三B政策はビスマルクを退けたヴイルヘルム二世の考案であるけれども、この政策の基礎は實に亦ビスマルクによつて築かれたわけである。

四、土耳其外交の本質

弱國が強國の間に處するに以夷制夷を以てするといふことは止むを得ぬことであり、又賢明な道でさへある。

歐米諸強争奪的にあつた土耳其に於いても、この弱國の常道以外の道が踏れなかつたであらうことは容易に察することが出来る。唯土耳其に於ては以夷制夷は一般に於ると稍異つた形を以て現はれた。或は最も典型的に行はれたといふてもよいであらうか。即ち土耳其は自ら手を下すことなくして此を成就したのであつた。

列強は互に牽制し争闘した。土耳其は唯舞臺を提供した。外交の主人公は列強であつた。土耳其人は列強の脅迫威嚇に従ふだけであり、むしろ惰眠をむさぼつてゐたに過ぎない。

しかも結果より見れば、土耳其を窺ふものは相戦ひ

相傷け、要するに相制した。土耳其が彼等全ての關心的であり、一國が占取するには餘りに貴重だつたからである。

二百年來のロシアの進攻は絶へざる妨害に會ふて困難を極めねばならなかつたのであるが、しかも彼の優越と努力が漸々に築き上げた處は一朝にしてビスマルクの手中に移り終つたではないか。

かくの如きは土耳其の位置する場所、歐亞の中核たる場所が自ら引き出した自然的歸結でもある。土耳其は亡びるべくし亡びなかつた。滅亡への自己運動の他には此を亡すものはない。外部よりの力は互に相牽制され、相殺されて此を倒す力と作用することはなかつた。むしろ、逆説的には守り立てた。倒壊の後に來る新主人よりは自己の命に従ふ老主人の如くはなかつたからであり、その新主人が自己以外の者ではないと誰にも確信はなかつたからである。かくして西歐列強の侵略の魔手は、皮肉にも土耳其の場合に依て救濟者たるの結果に終つたのである。

以夷制夷はこの場合主人公たる土耳其の手によつてではなく、夷たる列強自らの運動によつて自らその實を結んだ。いはゞ「東方」の地政學的位置の自然的歸結であつたしかしながら強者を相食ましめるを以て使命達成の一手段とする猶太人にとつて、かゝる條件を具へた「東方」は恰好の舞臺ではなかつたらうか。列強は自ら相食む、猶太人は之を助長する。否彼は取組せる相手を選定するだけでよいといふわけだ。

中世以來猶太人に對して最も慘酷の迫害を加へた露の南進が快く受けとらるべきではなかつたらう。彼等が此を妨害することによつて報復せんとしたとしても敢て怪しむべきことではないやうに思はれる。殊に土耳其は彼等によつて完全に自由な樂土ではなかつたにもせよ、承認として官吏としてその翼足を伸ばし得た天地である。露によつてこゝにも彼等を迫害する政治を迎へ入れんとは彼等の決して好む所ではなかつたに相違ない。

然して英國の傳統的的政策となつた露の南進阻止は猶太人ヂスレーリによつて代表されるものであつた。クリミア戦争に至るまでの露の南進は主としてこの英國の抑へる所となつたのである。

南進の露と此を抑へる英といふ對立は、伯林會議後一朝にして獨英の對立となつた。然して伯林會議の立役者ビスマルクの背後にも財政顧問プライヒレダー

を始として猶太人が存したことは否定し得ぬ所である。然らば猶太人は今や獨を押立て、「東方」への進出を行はしめるに至つたのであらうか。

トランスバルカン鐵道が完成され、バグダツド鐵道の利權が獨の手に入り、その完成へと次第に進むことゝなつては、獨の勢力は一舉にして中歐よりアジアの隅々に行渡ることゝならざるを得ぬ形勢となつた。

英が此を阻止せんとするのは必然でなければならぬ。世界大戰は此に於て起こつたが、トランスバルカン鐵道はヒルシュ、バグダツド鐵道はラテナウと、共に猶太人の着工經營するところであつたのである。

世界大戰前後、政治をスルタンの手より奪回し、土耳其に人權の宣言を行ふた青年土耳其黨のサロニカ本部に於て、その樞要を占めてみたのも猶太人であつた。又革命後の露は、その傳統を一棄して土耳其救助に代へ、大戰中英國及び希臘の攻撃を拂ひのけしめ、その後の更正土耳其に資本並に技術的援助を與へることになつた。

此等一連の事實は、猶太人がこの列強必争の地を利用して彼等の相關はしめ且つ一國の優占を確立し得しめなかつたことを考へしめるものがある。

かくて土耳其は、その地政學的位置と共に、又猶太人によつても列強の征服より免れるといふ不測の幸を得たのである。さながら不死の如き土耳其の活力の眞髓はこゝにある。

五、現在情勢の判断

獨逸は佛國を降し、英本土攻略に向ふに先立つて、バルカン諸國の紛擾の原因たるルーマニアを中心とする領土問題を一先づ解決した。このことは、獨逸がこの調停によつてバルカン諸國を歸服せしめ、バルカンに於る獨逸の勢力圏を築いたものであり、これがバルカンの新體制であるといふことも考へられる。

しかしながらかゝる觀察は結局皮相の見たるを免れるものではあるまい。それは決して獨逸の抱懐する歐洲新體制のバルカンに於けるものゝ終局的表現だとは思はれない。それは對英攻略を控へる現状に適應する一時的彌縫策に過ぎぬであらう。それは露のバルカン進出への一時的要塞を意味するに止るのであるに違ない。ルーマニアが、ブルガリアが再び第二のポーランドたり沿バルト海諸國たるを防止する獨の對露的意思表示に過ぎぬのではあるまいか。

一體英國攻略を前にしてバルカンが決定的に處理されるといふことはあり得るものではない。私が回顧した東方問題の歴史より抽出し得る一般的法則に従つてもそうであるし、亦現状が一層強くそのことを明示する。

元來獨蘇伊といふ三國の力の調和的働き、この獨が多量の苦心と犠牲を拂つて構成し得たものによつて獨は歐洲に於る新秩序への開幕に乗出したのであつた。然してそれは對英の方向に結び付けられたものであつた。その最高目的たる英國を討つことが残つてゐる。

バルカンは此の結合を破壊する。その利害がこゝに於ては相矛盾すること誰の目にも明であらう。重大課題が果されぬうちに、この結合を好んで解く愚を敢てする英雄はないであらうと思ふ。

獨がバルカンに於る決定的新體制の建設に乗出すのは英國攻略の後であるといふことは明である。獨の赤裸々なる要求はバルカンに於て露伊と衝突せずばをかないからである。

獨が英國を屈服せしめて適當年時代にバルカンに着手する場合、彼がこの兩國を同時に相手に廻すことのないのは勿論である。そこで獨が味方に求めるのは伊であり、先づ、撃破せんとするのは露でなければならぬ。露が獨と矛盾する種々の特質を有することを除いても、露が伊より強力であるといふことが何よりこのことの理由でなければならぬ。露と組んで伊に向ふといふことの愚さは考えふるに堪へない。何故ならば、獨が伊本土近傍に兵を出す間に、露がバルカンを掌中すること必至であるからだ。

そこで露伊の協力が露に向ふことになるわけである。然しこの對露攻撃を予想してのバルカン處理は日本と無關係に行はれるものではない。日本との提携が行はれた日が即ちそのバルカン處理着手の日となり、對露宣戦の日となることも明でなければならぬ。我々はこの爲に充分なる用意を持つてゐる必要がある。日本が對露問題に没頭する爲には少くとも米國との問題を解決する必要があるといふ考、即ち對露行動を背後より牽制するもの、存在をなくする必要があるといふ考が正しいならば、この日獨の提携の前には甚だ大きい問題があるわけである。

扱て露を討つた暁に於るバルカンの獨伊勢力分野の劃定といふことは一つの問題であらう。唯最小限ドナウ河口地方を獨が握るといふことは動かし得ぬが、君

府海峡の處理はこの際も依然最も困難な問題となるであらう。

以上の議論は獨伊の歐洲の新體制がバルカンに於る諸邦の獨立を許すものであれ、獨立を否定するものであれ、おのづから兩國の勢力範囲といふものが構成される以上はその根底に於て變動するものではない。

露が獨の對英總攻撃に先つてバルカンに進出するといふことは最もあり得ることには違ない。しかし露の實力は今日このことを容易になし得るものでないと考へられる。

そこで獨は露のバルカンへの進出に對しては何時でも撃滅し得るが如き態勢を示して露を抑へてゐねばならぬ關係よりして、英國總攻撃は突然前觸もなく行はれねばならぬといふ推測を可能にする。

翻つて土耳其はどうであらうか。英佛に組した土耳其は今や退引ならぬ窺境に陥つた。靠れかかつた英國の重味は遂に土耳其をおしつぶすに違ない。土耳其は取返し得ぬ失敗した。

かゝる觀察は間々行はれるものかも知れぬが事態の眞相を見極めりものたるを免れるものでない。かゝる觀察を全然誤つてゐると断言するのは予言といふ綱渡りの危さを冒すものでも何でもない。歴史の觀察はこの断言を助ける。獨の英國攻略までに土耳其は獨と提携してしまつてゐるといふだけだ。しかもこの提携は土耳其が苦慮畫策の後成し得るものでなく、兩者より互に手が差伸べられて成立するといふ性質のものである。

此に比してムツソリニの使命の困難さに思至す人は案外少い。彼が窮極に於て目指す大羅馬帝國の再建、地中海國家の建設は、その完成と共に分解作用を起す運命を恐くは避け得べきものではないと思はれる。

海洋は一面結合的性質を有してゐること疑ない。地中海を己が湖水とした伊太利は急速に地中海周邊に擴がり一つの統一的な地中海文明を構成し得るであらう。アレキサンダーの帝國をローマ帝國のみがなし得たこの大事業を。

然し古代の此等の地中海的統一は回教の勃興によつて崩壊した。この崩壊も亦地中海のもつ分離性に基くたのでしかない。

地中海は動物界の分界線であるに止らず人種に於ても亦有力なる分界線を形成してゐる。ハム及セムとアーリアン、回教と基督教の相對する地中海のこの長軸

を越へたものは、すべて他に吸収されることを避けることは困難である。北アフリカに於るギリシア人、ローマ人ヴァンダルがその例であり、又逆に西班牙、シシリ、クレタに於るアラビア人、南東歐洲に於る土耳其人も又その例に漏れない。今日歐人の支配下にある北アフリカと雖も、土人はその大多数人口を維持してをり且つその特性を失つてはをらぬ。

地中海的自然條件は地中海周囲の狭き場所を占めるに過ぎない。その背後は皆大陸の原野であり、この原野の側よりする侵略民族を防ぐことは甚だ困難である。況やこの原野地への進出は甚だ困難を極める。唯この困難を克服し得た者のみかその大帝國の存續を望み得るのである。この點に於てもアレキサンダー及ローマ帝國はその偉大さを我々に示してゐるのである。かくの如く地中海は一方に於ては結合の要因であると共に、分離の、統一を防ぐる所の要因でもある。

かく考えふるならば、伊大利百年の大計のとるべき方策は、分離性最も弱き地點たるジブラルタル、シシリ、エーゲ海を確保して地中海周邊を中心伊大利に強く結び付けることであらねばならぬ。大陸の周邊にある諸島嶼はこの意味に於て高き意義を有する。伊大利が地中海に於る島嶼の占有を強く主張するに至るであらうこと火を見るより瞭である。

このことの爲に將來を海國として發展せしむることの重要であるのは此又いふまでもない。

然して地中海統一文明の存續を計るためには、地中海周邊より大陸内部への困難なる進出が行はれねばな

らぬ。このことの成否が伊太利の存續如何を最終的に決定するであらう。嚮にエチオピアを占有したことは、アフリカに於るこの努力を容易にするものとして甚だ賢明であつたといはねばならない。

君府海峡と埃及は唯に交通軍事の關門たるによつてではなく、この意味に於て伊太利にとつて至重の意義を有してゐる。

君府海峡は小アジアとバルカンを繋ぐのみならず、近く迫つてゐる非地中海地域への進出點であり、ナイルを有する埃及はアフリカに於て内陸深くまで擴がることを得しめる唯一の國であるに止らず、又アラビアとの結付をさへても強固にし得る所であるからだ。

伊太利の將來は右の如き諸種の條件の克服にかゝつてゐる。その一を失へばそれは殆ど致命的に影響するに違ない。

伊にとつても獨にとつても君府海峡は最大の關心でなければならぬ。この點にこそ今次大戦の最も深刻なる興味がつながるのであるし、此の點の決定に歐洲新體制の最終的決定が見られるのである。

土耳其は滅亡することなくして存續する。依然として君府海峡は東洋對西洋の對立接觸點たるを變へぬであらう。東洋の西洋への攻勢が準備されねばならぬ今日に於て、日本がこの地點への發言權を有せぬことは甚だ憂ふべきであらねばならぬ。南洋圈確保の後、そこに於る回教が日本にとつて新なる意義を獲得せねばならぬ所以である。

秘

シンガポールの軍事地理的考察

(昭和一五・十二・二七)

(室賀報告)

はしがき

日本の所謂南進政策が、本来極めて友好的同胞の精神に立つものであって、何等侵略的意圖を有しないことは今更こゝに言ふまでもない。大東亞共榮圈を以て、屢々云はれる如く日本の生存權に關する生活空間とのみ解することは短見の譏りを冤れまい。それはより多くの道義的なものであり、皇道の本質に根ざすところであり、かゝるものゝ自己實現なくしては日本の存在が意味を失ふといふ限りに於て、始めて生存權と稱し得べき性質のものである。従つて日本の南進政策が平和裡に遂行せられるべきを理想とすることは、単に武力的手段が國幣を費し兵力を損耗することを危惧する功利的見地から立言せらるゝのではなく、日本の國家的理念の本質から理解せられねばならない。

とはいへ、平和的南進政策とは、右顧左盼して一時の苟安を貪る消極主義であつてはならぬ。それは皇道の本義に則るが故に、常に断乎たる積極的姿勢を執り、平和の裡に強烈なる武を包蔵するものたるべきである。繰つて南方の現状を見れば、日蘭印の交渉は停頓し、英米泰軍事密約説まで傳へられ、この地方の舊來の支配者たちは太平洋に利害を有するあらゆる舊秩序の勢力を自己の防衛に汲々とし、日本の打倒を策してゐる。従つて日本の南進政策が平和裡に遂行せらるゝことは殆んど不可能に近い。故に日本は、勿論總力戰的見地から、所有手段方法を以てこの地方に於ける皇道の開顯を策するを怠るべきではないが、結局この南方圏を邪惡なる影で蔽ふ秩序勢力を武力的に驅逐する決然たる覺悟を要する。この意味に於て日本の南方政策の現實的段階は軍事的であり、少なくともそれを極めて重要な背景としてもつと断ぜざるを得ない。而して南方に於ける新秩序樹立の妨害者が依然として英國であるとすれば、茲にその極東探題たるシンガポールが我々の眼にその不吉な映像を示すであらう。

シンガポールは勿論その軍港たるによつてのみ重要な位置を占めるのではない。一層注意せらるべきは、この港の持つ地理的優越性によつて、東亞並に太平洋洲に對する英國流の總力戰的謀略網の一大支據點をなし

てゐることである。但し、この點に就ては、不完全乍ら會て少しく報告するところあつたから、本編に於ては専ら軍事地理的意義を検討し、かゝる視角より南洋の現實に一解釋を提出したいと思ふ。切に御叱正を待つ次第である。

一、軍事根據地としてのシンガポールの沿革

マレー史の上に、シンガポールは Tumasik 或は Singa pura として現はれる。Singa pura とは獅子の島を意味し、有名なジャヴァの Majapahit 王によつて十三世紀中葉に破壊せらるゝまで、土酋の築城するものがあつたと傳へられる。マレー年代記は、このジャヴァ人の襲撃によつて全島血の海と化し、今に至るまで米を生産しないといふ傳説を物語つてゐる。併し白人の來訪以前、この海峡支那と印度を結ぶ交易路の要衝に當り、アラビア人の來往するものも多かつた。異説もあるが、マルコポーロの記載する Malayur をシンガポール島に比定せんとする學者もあつて、この地の交通上における位置の重要さは、歴史的回顧のうちに見出され得る。

今日のシンガポールの創始者ラッフルズが、この島を占領したのは一八一九年の事で、その年の二月六日ジョホール王と條約を結び、英國がこの地に貿易港を開設することを許容せしめた。爾後のこの港市の發展に就ては既にその一端を略叙したからこゝでは省略する事としたいが、いずれにしても、シンガポールは英國の東洋侵略の據點として當初から運命づけられてゐたのである。

併し軍港としてのシンガポールの歴史は、然かく遡ることは出来ない。一八四〇年の鴉片戰爭に際しては、この地は英國の軍隊、運送船、艦隊の集結地となつたが、一八四一年香港が英領に歸してからは、英國の東洋における軍事的勢力の中心は、この新たに得た支那の港に置かれることゝなつた。このことは今後の歐州大戰の直前まで續いた。蓋し印度支那半島に據點を求めた國々は、英國にせよ仏蘭西にせよ、その究極の目的が支那にあつた事は、前報告に詳述した通りである。

シンガポールに初めて軍事施設の置かれたのは一八八二年で、このことは、當時おける佛蘭西の安南經營を反映するものであらう。ナポレオン三世治める下の佛蘭西は、この東南アジアに於いても英國の有力なる競争者だつたのである。一八九〇年から九三年に亘り、

海峡植民地は更に年額十萬砲を支出して海軍根據地を設け、砲壘を築造した。併し乍ら、日露戦役までの東洋に於ける英國の眞の勁敵はロシアであつて、その意味からも香港はシンガポールに優る位置を占めてゐたのである。のみならず、英國は更に巨文島にもその觸手を延ばし、その注意の焦點を常に北方へ向けている。だが、このことを以て英國がシンガポールを等閑に附していたと考えるならば大きな誤りであらう。英國が支那海北進の態勢を取り得たのも、シンガポールに確たる基礎が置かれていたからに他ならない。この地の経営は、これと並行してこの間に次々として行われてゐた。たゞ佛蘭西勢力の萎靡と、之に代る強敵の出現を見なかつたことによって、その軍事的方面に多くの顧慮が拂はれるを見なかつたに過ぎない。

然るに日露戦役に結果ロシアの敗退となつて英國はその目的を一應果したが、このことは圖らずも日本といふ新き敵手と呼び覚ますことゝなつた。殊に第一次欧州大戦を経て、この極東帝國の勢力が著しく膨張し、その政策が世界的規模を有するに至ると、英國は支那における自己の既得權益のみならず、廣く太平洋における自國植民地の防衛について真剣なる考慮をなさざるをえなかつた。夙に一九一〇年オーストラリアは英本國よりヘンダーソン大尉を招いて國防計量の樹立を依頼したが、第一次大戦の直後、一九一九年英國はユトランド海戦の提督であつたジェリコー大尉を各植民地の海軍建設顧問として極東を巡視せしめた。同大將はその結果、オーストラリア、ニュージールランド、カナダの融合による一種の八八艦隊建造案を進言し、且つその根據地をシンガポールに置くべきことを具申した。日本の南方進出を阻止し、東亞に於ける日本の勢力を打倒し去らんとする目的を以て、英國がシンガポール築城案を具體的に取り上げ始めたのは實にこの交にある。併し、戦後の創痍未だ癒えざる英國に取つては、この事業は尚遂行の困難があつた。それ故に、所請シンガポール軍港の問題が大きくクローズ・アップされるのは、華府會議以後のことである。

一九二一年の華府會議は、英國としては多年の盟友であつた日本と新らしき敵對關係に入り、米國と合作して東亞に於ける日本の進展力を減殺し、以て太平洋に於ける自領植民地の安全と、支那に於ける自國權益の發展を策するものであつた。それ故に、日本の海軍力を對英米六割に制限すると共に、所謂西太平洋防備

現状維持案を提出して日本の南洋委任統治領は勿論、千島、小笠原、琉球、臺灣等に於ける海軍根據地の新設若しくは擴張を禁止した、而もアメリカは、本國を離るゝこと二千百哩のハワイ眞珠灣をその制限外に置き、英國は、太平洋の西限を何等根據なき東經百十度と規定することによつてシンガポール築城權を得たのである。その專横、まことに驚くべきものがある。

かくして日本の手足をもぎとつてから、英國は一九二三年、十年計畫千五百萬磅のシンガポール築城案を議會に提出した。その理由は、海相メアリーの説明に従へば、要するに日英同盟の廢棄によつて、東洋において日本の援助を期待し得ないといふにある。これが日英同盟の廢棄者の言葉であつた。而もこの説明は、この同盟に代る四國條約が實は束縛するものであることを明らかにし、シンガポール軍港が日本を目標とするものであることを公言したに等しい。流石にかゝる暴舉に對して國內にも強い反對論が起り、殊に提案者たる保守黨政府に對し野黨たる労働黨、自由黨は、華府條約の精神に反し、日本の對する無用の挑戰にして、而も大戦後の經濟的負擔を重からしむるものであるとの見地から論難の態度に出でた。注意すべきはこの反對論のうちに、スコット大將やパイウオーター氏の如き軍事的専門家の聲を混じへてみたことである。かくして結局賛成二一四票に對する反對一三三票を以てこの議案は通過したが、總額は九五〇萬磅に減額せらるゝことゝなつた。

着工は翌一九二四年の筈であつたが、その一月保守黨内閣倒れ、マクドナルドの第一次労働黨内閣の出現となつて工事は中止せられた。併し一九二五年十二月再び保守黨が政權を握つて以來この案は再度續行せられ、その後の第二次労働黨内閣も之を中止せず、以て今日に及んでなほ續行せられつゝある。工費もその後の追加豫算と、マレー、ニュージールランド等諸植民地の献納金とによつて、既に當初の案たる千五百萬磅にも達したと稱せられる。香港がその統治以來八十餘年間に費やした軍事設計費總計三百萬磅に達せざるに比し、このシンガポール築城案が如何に尠大なる計量なるかを知り得るであらう。

二、軍港の規模

かくの如くシンガポール軍港は極めて巨大なる規模を有し、眞珠灣、ジブラルタル、ヘリゴランドと併せ

て世界四大要塞と稱せられ、その施設は世界注視的のとなつてゐるが、しかしその詳細は勿論之を窺ふべくもない。夙く一九三一年の佛人エドモン・ドラージュや、近くは一九三六年の獨人アルフィード・バルク等のこれに関する記載があるが、之等もその信憑度を奈邊に置くべきやを疑はしめるものがある。

シンガポール島は廣さ二一八平方哩の小島であつて、南はマラッカ海峡に續くシンガポール海峡によつてリオ群島に對し、北はジョホール海峡とする狹隘なる水路によつてマレー半島に連なる。このジョホール海峡には一九二四年長さ約三五〇〇呎の陸橋が竣工し、シンガポール島を人工的な陸繋島とした。マレー縦貫鉄道はこの陸橋上を走つてゐる。南港並に空港は、島の南部、シンガポール海峡に面する位置を占めるが、軍港はこの陸橋から東、ジョホール海峡に臨んで島の北面せる部分に構築せられた。

軍港工事はシンガポールのサー・ジョン・ジャクソン會社によつて請負はれたが、熱帯の悪條件の下にジャングルを伐開き、沮洳地を固定せしめ、且つマラリアと戦ひ、その工事は甚だ困難を極めた。マラリアの蚊を殺す爲に毎年七萬ガロンのガソリンを用ひたとバルクは述べてゐる。かくしてジョホール海峡の出口にあるウビン島、テコン島をはじめ全島殆ど要塞化し、新鋭を誇る十八吋砲と、百萬噸の貯蔵量を有する重油タンクが設備せられた。併しこの地の施設のうち最も重要なものは浮ドックと乾ドックであらう。浮ドックは英本國に於いて造られ、一九二八年ロンドンから回航せられた。ドラージュによればそれ自身完成せる工廠であるといふ。乾ドックは十年の歳月を要してこの地で建造せられ一九三八年竣工を見た。東洋に於ける最大のドックで、如何なる大主力艦をも修理し得べく、一四〇〇噸級の驅逐艦ならば同時九隻を收容し得るといはれる。

このドックの完成によつてシンガポールは一應その當初の計量を竣へた形となり、同年二月盛大な祝賀式が開かれ、ドックはキング・ジョージ六世と命名せられた。以後の施設は議會に於ける應酬などから推察して、寧ろ空軍根據地としての充實に向けられてゐるとの観測が有力である。

然らばこの金城湯池を守備すべく英國は幾許の兵力をこゝに常置しているのであらうか。勿論この問題も詳細なる實情は不明であるが、軍に概數を以てするも、

その餘りに微弱なるに驚かざるを得ない。而もこの點にシンガポール要塞の性格を明かにすべき鍵を有しているとも云へよう。

マレーに於ける陸軍の兵數を一九三六年バルクは約八千名即ち一混成旅團と推定してゐる。同年マレー當局は、常備兵數を三倍に強化し、約三萬の兵員を置かんとする旨を發表したが、その計畫は實現された模様もなく、現在でも略々右の兵數にとゞまることは、ジャーナリストなど的一致した観測である。尤も、北支上海の撤退軍がマレー防備に参加せしめられたことも考へ得るし、又最近英國極東司令部がこの地に設置せられ、印度兵その地を以て軍備の増強が行はれた旨發表されてゐるから、事實は、一個師団を超えるかもしれない。併し、少なくとも今次大戦の勃發前迄は、希臘全土に匹敵するこの植民地は、僅か一万に足らざる兵力によつて護られてゐたのである。空軍に就ても同様のことが云へる。現在マレーの空軍は三百機と稱せられ、殊に最近この地方の防備に空軍力の擴充を主要なる目標としていることは後述する如くであるが、バルクによれば今次大戦前は百機を出でなかつたらしい。無氣力なる土着民を擁し、隣接國に強兵なく、面も背後に印度を控えた恵まれた環境によるとはいへ、かゝる僅少なる兵備を以つて英當局が嬰如たり得た所以は、ビルマは勿論タイ、佛印、蘭印、比律賓を自營防御の外廓となし得た政治的經濟的工作の成功によるものと見得るであらう。

海軍に就て見るに、シンガポール要塞建設の主要對象が軍港である以上、人はこゝに有力なる艦隊の常置を豫想するであらう。面も事實は全然これを裏切る。一九三四年まで、この壯大なる海軍根據地には一隻の軍艦すら配備せられてゐなかつた。同年以降漸く一隻が Base ship として常駐せしめられたが、それは Terror 号と稱する老朽艦である。假令戰前香港に集結していた英國東洋艦隊をこゝに合するとしても、この劣勢なる巡洋艦隊を容れるべく、シンガポール軍港の設備は餘りに巨大ではないか。併しながら、と論者はいふ、英國は日本と極東に於いて事を携わふる日には、その本國より有力なる主力艦軍をこゝに派遣せんと企圖したのであると。この一見妥當に思はれる意見のもつ根本的誤認は、シンガポール軍港が華府條約以後の作品であるといふことを考慮してゐない點に存する。華府會議において、英國は對米パリティを承認し、事

實上傳統的な世界海軍の王座を下つたのであつた。而も萬一英海軍が極東海面に相争うとせば、英國は少なくとも略々日本の全艦隊と匹敵する勢力をこの地に送らねばならない。日本は對英六割を保有する。これと同等の力を東洋に割いた英國留守艦隊の實力はフランス或はイタリーの海軍よりも劣勢となるを免れず、地中海、大西洋の護りは全きを期し難い。このことを最もよく熟知していたものは英海軍當局者だつた筈である。とすれば、英國はシンガポールに當初から大艦隊を送らうとする考えはなかつたと見る外はあるまい。事實この根據地建設案の重要な論據となつた數日防衛の任務を實行せんとすれば、前述の如きジェリコー大尉の空想的な東洋八八艦隊の建造が必要だつたのである。それ故にシンガポールは英國海軍の別荘として建てられたのではない。それは貧家だつたのである。借請人は言ふまでもなくアメリカであつた。だがこの點に就いては更に後章に詳述するであらう。

三、軍港の價值

シンガポール軍港のもつ缺陷に就ては、既に軍事専門家が屢々これを指摘してゐるが、地理的見地より見れば次の二點を擧げ得るであらう。即ち氣候風土による惡條件と根據地としてのヒンター・ランドを缺除することゝがそれである。

大陸アジアの最南端に位し、赤道を距ること僅か八十哩。高温多湿のこの地が人の活動能力を著しく低下せしめることは言ふまでもない。殊にこのことは白人にとつて致命的である。人間の能率に於いてのみならず、又この條件は各種の施設に不測の結果を現し、例えば前述の大浮ドッグの如き、既に憂ふべき腐蝕を生じつゝあると報ぜられる。精密なる兵器の高度の消耗率は、次に述べる後背地缺除の弱點を一層加重せしめるものであらう。

近時建艦技術の進歩に伴ひ軍艦の機能が複雑化するにつれて、その故障の頻度も増大し、且つ一小部分の毀損によつて艦全體の運行に支障を生ぜしむることが屢々經驗さるゝに至つた。高壓蒸氣の不斷の使用による汽鐘故障の續出の如き、第一次大戰當時の英國海軍を悩ましたものゝ一つである。これらの點は莫大なる燃料、兵器の補給と共に近代的海軍根據地の條件としてヒンター・ランドの重要性を再認識せしめるものであつた。數艦より成る輕艦隊は論外とするも、苟も主

力艦を含む均勢ある大洋艦隊を養ふことは、單なる軍港に附随する修理設備を以てしては不可能であつて、その後背地に總合的な重工業地帯の存在を缺き得ない。例へば我が横須賀軍港は京濱工業地帯を擁し、瀬戸内海或は九州の根據地は阪神或は北九州の重工業によつて支持せらるゝが如きである。英本國の場合にあつても、スカパフローよりポーツマスに至る各軍港は、いづれも本土の旺盛なる重工業地帯を後背地としてゐることを見得るであらう。この點に於いてハワイの眞珠灣、或はジブラルタルの如きは極めて孤立的な弱點をもつ。世界の軍港と稱せらるゝものが本國になくして却つて斯くの如き遠隔の地に求めらるゝことは、多くはかゝる後背地の關係より理解し得るところである。シンガポールは自國の植民地たるマレー半島に續き、この點に於いて眞珠灣、ジブラルタルに勝る如き觀を抱かせるが、併し眞珠灣はなほ米國艦隊の略々防備し得る海面を以て直ちに米本國に連なり、ジブラルタルも本國艦隊の健在なる限り、外交工作の成功と相俟つて、英本國と比較的近距离にあるが故にその補給に重大なる困難を生ぜしめないであらう。現在東部地中海に於いて英國海軍が伊太利に對し寧ろ功勢的態度を執り得てゐるのも、このジブラルタル海峡が完全にその機能を續け、マルタと繋いでアレキサンドリアを遠く英本國と結んでゐるからである。

然るにマレー半島は、かゝる意味でのシンガポールの後背地をなすものではない。ビルマ或は蘭印の石油は、シンガポールの爲に力強い支持を與へるものであるが、重工業地帯を近隣に求めるのは不可能であらう。ジブラルタルの如く本國と連絡すべく、餘りにその距離は遠隔に過ぎる。印度の工業も、なほ充分なる需要に應じ得ない。この弱點こそがシンガポールに世界有數の大ドッグを建設せしめた主因であるが、而もなほ之を以てその弱點を蔽うるものではなく、シンガポールは依然として世界に於ける最も孤立的なる軍港と稱し得るであらう。

かくの如き弱點を有し、而も前章に述べた如くこゝに容るべき艦隊を望み得ないシンガポール軍港は、然らば無用の長物であらうか。そうではない。この軍港の眞の意義は寧ろ純粹に軍事的であるよりも、より多くの政治的な點にあるであらう。結論的にいへば、英國はこの要塞の建設によつて直接には佛印、泰、蘭印を威服せしめ、濠洲、ニュージージーランド、印度、カナ

ダなどの自國植民地を本國に繫縛し、更に支那、ソ聯、米國にもその實力を示して完璧なる日本包圍陣營を結成せんと企圖したのである。而もそれは殆んど成功した。この意味に於いてシンガポール軍港は、英國太平洋政策の象徴であるとも云ひ得るであらう。

單なる一軍港の建設が、かゝる廣汎なる政治的成果を収め得たのは、一にシンガポールのもつ地政學的位置的優秀性によつてである。この地がパナマと相對して太平洋の西門に當り、亞歐交通の要衝を占めることは改めて繰説するまでもあるまい。従つてこの門扉を鎖せば、極東と印度との連絡は直ちに切断せられる。今次大戰前における日本の貿易の約五割がこの關門を通過してみたことは、この軍港が我國に對してもつ最も直接的な脅威であつた。而もこの地は香港へ一四六〇浬、濠洲のポート・ダーウィンへ一八六〇浬、セイロンのトリンコマリ軍港へ約一六〇〇浬に當り、西南太平洋と印度洋との略々中心點を占めてゐる。ハーバード・ラッセルの言を籍りずとも、シンガポールの戰略的優位は『自明』といふべきであらう。

地圖を按ずれば、所謂濠亞地中海はシンガポールを頂點とし、印度支那半島並に支那大陸の海岸線を一邊としスダ列島より濠洲北岸に至る線を他の一邊として、内にボルネオ、比律實その他の多數の島嶼群を基布せしめ、巨大な投網を擴げた如き狀貌を以つて西南太平洋を形成する。従つてシンガポールはこの廣大なる海面の統括者たる位置にあり、このことがこの港自身の政治的經濟的能力の重要な要素をなしてゐることは、前報告に述べたところであるが、この形成が又軍事的にもシンガポールを香港、ポート・ダーウィンと結ぶ所謂三角防備陣の觀念を生む基體となつたのである。この三角形の意圖するところが、之に含まるゝ西南太平洋の全地域をユニオン・ジャックの支配下に置かんとするものであることは言ふまでもないが、而も、この三角形の東北、西南の二邊は、それぞれ異なつた機能を有することが看取され得る。即ち香港、シンガポールを結ぶ東北邊は、英國の極東に對する侵略的進攻線であり、ポート・ダーウィン、シンガポールを連ねる西南邊は濠洲、蘭印諸島を英本國に繫縛する回路的防衛線である。兩者いづれにしてもシンガポールがその基點たることは言ふまでもない。

かゝる好位置における堅壘の築造は、近隣諸國、殊に佛印、泰、蘭印などに重大なる影響を及ぼした。日

本の南進を密かに怖れてみたこれ等諸國は欣然としてその傘下に入り、共同防衛の態勢を整えたのである。その一例は、昨年初夏に於ける所請シンガポール會談であらう。日本の南下に脅えた英佛蘭三國は、泰國を誘つてこの時南洋防備に関する具體的打ち合わせを行ったのである。

(註) 泰國は一九三二年の立憲革命まで、極端な親英層によつて國の指導權を握られていた。現政府の成立後と雖も、多年に亘る老獪なる工作に繫縛せられて、泰政府は直ちに對英硬の手段に出づることが出来なかつた。シンガポール會談に泰國が参加したか否かは不明であるが、少なくとも英國の勧誘を正面から拒否しなかつたことは事實である。なほこの會談には米國からもオブザーヴァーが派遣されたとの説もある。

併しかゝる事態は然かく近年のものではなく、要塞建設の當初よりこれらの諸國の間には英國を仰いで首長とせんとする默契が存したと見るべきであらう。とすれば彼等は、この軍艦なき軍港に、いはゞ一億五千万磅の不渡手形に絶大な信用を與へ欣んでその前衛となつたのである。而もこれによつて得た英國の利益は、單に軍事的見地のみよりするも蓋し想像に餘りあるものがある。即ちマレーに於ける自國植民地を守るべく佛印、泰を左翼の防壁とし、蘭印を右翼として濠洲との連絡を確保し、これなど諸國の全兵力を糾合して自己の麾下に入れ、更に比島と呼應して南支那海をその掌中に収め、一朝事ある時は他國の領域に於いて他國の兵力を先頭として、自己を防衛し得る態勢を整えることが出来たのであつた。單にこの一事のみより見ても、シンガポール軍港の構築は英國にとつて極めて低廉有利な投資であつたことを知るであらう。

併しこの軍港の出現は、英國の各植民地に對しても重大な効果を齎した。マレー半島が印度に對する前衛であり、こゝの軍港が印度洋以西の貿易を確保するものであることは言ふまでもない。のみならず、この地の武装化によつて日本の勢力が南方に牽制せられることは、カナダに對しても一種の安全感を與ふるものであつた。だが英領植民地のうちで、シンガポール軍港に最も重大な関心を寄せるものは濠洲である。

オーストラリアは由來東洋を最も嫌忌する國の一つである。曾て支那人並に日本人移民の流入によつて脅かされた經驗は、今なほこの白人植民地の裡に苦い記

憶を残している。有名な白濠主義は夙く一九〇一年に成文化せられ、爾來強化の一途を辿つたのであるが、殊にそれは強國として発展しつゝあつた日本の政治的勢力の浸潤に対する極端な恐怖となつて現はれた。日露戦役の直後濠州が海軍建設を策したことは既に述べたが、それが日本を直接の対象としたものであることは言ふまでもない。第一次歐州大戦中も同盟國たる日本の海軍が赤道を越えて南半球に作戦することを極力阻止し、ヴェルサイユ講和會議に於ては我國の提出せる人種平等案に對し、濠洲代表ヒューズ氏は正面から反対の氣勢を示した。要するに濠洲は常に日本の勃興を抑壓せんとする妄想に捉はれ得る、この意味において日英同盟の存在を露骨に迷惑視したのである。さればこそ華府會議に於いてこの同盟を破棄せしむべく最も熱心なる暗躍をなしたのも濠洲であつた。従つて日本の発展を圧倒し去るべき強大なる軍備が英本國の手によつて太平洋に出現することを、彼等は衷心より希望してみたのである。

一方濠洲と英本國との政治的關係は、他の植民地同様、或はそれ以上に疎隔の傾向を示してゐた。所謂白濠主義なるものも漸次その性質を轉化して濠洲中心となり、遂には英本國からの移民にすら各種の條件を附するに至つた。殊に一九三一年英本國と各自治領間の對等的關係を規定したウエストミンスター法が成立するや、彼等は總督すら濠洲人より選み、濠洲人の濠洲への道を歩み始めたのである。かゝる傾向は、濠洲の經濟的發展をその重要な因由とするものであらう。當初全く英帝國に依存していた濠洲の通商關係は、その生産と消費の膨張により、次第に世界性を有せざるを得ない趨勢を馴致した。殊に輸出の點に於いて従來の獨占的顧客であつた英領諸國が、既にその飽和に達したのを知つた時、濠洲が新しい市場として求めたものはアメリカであつた。今オーストラリアの經濟的動向を論ずるのは、本篇の目的ではないが、併し凡そかゝる背景を以て米濠聯携論が主として濠洲の側から論ぜられ、この立場から濠洲は最も熱心なる英米協同論者となつたのである。殊にそれ等の論者のうちには公然と濠洲が英國を離れて米國の傘下に入るべきを説いたものすらあつた。かゝる論説が英本國政府にとって最も寒心に堪えざるところであつたのは言ふまでもない。この點から見ればシンガポール築城は、濠洲の熱望する對日軍事基地の建設と、後述する如き英米協同の

實現とによつて彼らの希望を満たし、そのアメリカ市場開拓に支持を與へて間接に本國を利し、一方この武力の存在によつて、動もすれば離脱的傾向をもつ濠洲への無言の探題たらしめんとするものであつた。屢々濠洲の動向が英國の太平洋政策を左右するといはるゝ所以は茲にある。されば濠洲はシンガポール根據地建設案の最も熱心な支持者であり、殊に軍港の位置が選定せらるゝ以前には、シドニー、ブリスベーン、フリマントル、或はポート・ダーウィンの如き自治領内への設置を主張したのであつた。殊に例へばシドニーの如き、前述せる後背地の觀點よりすればシンガポールに遙に勝るものがある。併し對日攻勢を主目標とする以上、濠洲諸港はあまりに遠隔なるを免れず、且つ又英本國の意圖が極めて多岐なる爲、位置的に優秀なるシンガポールが選ばれたのであつた。

併しながら、シンガポール要塞は、要するに空手形である。英國は、極東に派遣すべき大艦隊を有しないことを前提として而もこの大軍港を築造したものであることは既に触れるところであつた。従つて有事の際、最後の守りとしてこの軍港を使用するものは米國海軍である。近來米國のシンガポール軍港使用説が頻りに新聞を賑はしているが、英國がかゝる考えを抱いたのは遙に古く、この軍港の建設に就いて英米間に事前了解のあつた華府會議に遡ると見るべきであらう。英國が西南太平洋の番犬の役目を米國に負わせようとしたことは、ゴム、錫を以て米國とマレーを緊密に結びつけた政策によつて自ら明かである。華府會議に於いて米國がグアム島並に比律賓の防備制限を受諾したのも、シンガポール使用を見越しての上であつたのではあるまいか。而も米國と結ぶことによつてシンガポール軍港はその重要な缺陷であつた後背地の問題を、濠洲を通じアメリカと連なることによつて一部補ふことが出来るのである。かくして殊に極東の情勢が逼迫するにつれ、この軍港に於ける英米協同防備は次第に具體化の道を辿つた。一九三六年の紐育新報は既に米國海軍がシンガポール軍港使用を許可されたものと了解し得ると報じたが、翌三七年一月ヤーネル提督麾下の米國アジア艦隊はその全艦を擧げてシンガポールを訪問し、更に越えて三八年二月の大ドッグ竣工式には、佛、蘭諸國を率いて米艦三艦が偶々この祝典参列の爲に派遣せられたのである。更に近着のニュースは英國海軍次官バトラーが議會に於いて、英米兩國の

間に海軍問題その他協同防衛に關する重大問題が考慮されつゝあり、緊密なる連絡が取られていることを言明し、之に呼應するが如く米國のスターリング少將は、マニラ、シンガポール間の新航空路の延長に關してその軍事的意義を臆面もなく高調した。それ故にこの軍港に米國の艦隊が集結したとしても、それは既定の事實である。世上シンガポール根據地を論ずるものは、屢々英國海軍の對日進攻作戰の不可能を説いて快としたが、かゝる議論は既にその前提に於いて空想であつた。敵はアメリカなのである。

以上筆者はシンガポール軍港のもつ缺陷を述べ、而もその位置的優秀性と、英國の巧妙なる術策によつて擧げ得たその政治的効果を説き、更に眞の武力をこゝに行使するものありとせばそれは米國であることを指摘した。併しかくして結成された對日包圍陣の打破の爲に、日本は大東亞新秩序の目標を掲げて立上がつてゐる。それは現在の事態を如何にあらしめてゐるであろうか。この事情を明かにすることによつて、この報告の結尾としたい。

結 語

多年に亘るかくの如き英國の對日壓迫策が、今次の支那事變に決定的な反撃を受けたことは周知の事實である。本来空手形であつたシンガポール軍港は、日本のこの斷乎たる態度によつて忽ち馬脚をあらわざるをえなかつた。この軍港の最も有力な前進基地であつた香港は、すでに完全にその機能を喪失したと考えてよい。さればこそ英國に於いてもアクウォース大佐の如き、香港なきシンガポールは無益であるとの悲觀論を唱へるものさへ現れたのである。而も日本の力は更に南に延びて海南島を占據し新南群島を占有した。かくして英國の勢力圏に属していた南支那海は日章旗の影に脅かされるに至つたのである。然るに英國にとって一層悲劇的な不測の事態が発生した。第二次歐洲戰爭の勃發と日本の大國接近、並に皇軍の佛印進駐とである。ことに後者はシンガポール當局者にとっては正に戰慄的事件だつたであらう。之によつてシンガポールは陸路よりする脅威を受くるに至つたからである。この點は從來彼等の多く意を用いなかつたところであつた。海上よりする攻撃は、假令日本海軍の精銳を以てするも至難と思われる點が多い。併し佛印が若し無抵抗に日本陸軍を容れ、日泰の接近が更に皇軍のマレ

一進撃の道を開くとするならば、微弱なるシンガポールの陸軍は如何にして之を防衛し得るであろうか。佛印縦貫鉄道は、パスを以て連絡する泰國境の一部を除き、泰國を経てシンガポールまで同一の幅員をもつ軌道によつて繋がつてゐる。皮肉なことには、これら三國の鉄道の幅員を一致せしめたものは、往年の英國の利己的政策だつたのである。それ故に、單にかゝる軍事的見地よりするも英國は泰國並に少なくとも南部佛印を自己の勢力下に置き、日本軍の進出に對する防壁としなければならぬ。殊に西貢、シンガポール間六四〇哩、若し日本の航空基地がこの邊に出現すれば、シンガポールは直ちにその爆撃下に曝されるのである。かくして英國はヴィシー政府に属する佛印の現政權を否認し、ド・ゴール派に働きかけて南部佛印の確保を目指し、又泰國に強壓を加えて自己の陣営に引き入れんと努力しつゝある。過般傳へられた英米泰軍事密約の如き、その眞偽はなほ明かではないが、假令單なる風説とするもかゝる風説を生むべき根拠は充分に認めらるゝのであり、經濟的に英國に依存せしめられた泰國の態度が、その好むと好まざるとに拘らず從來の對英關係を一朝にて清算し得ざる事情にあることは注意を要する。

併しながら佛印、泰のみならず、ともすれば日本に脅かされがちな蘭印をも自己の勢力圏内に置くべきかゝる外交工作の爲にも、又より直接にはマレー自身の防衛の爲にも、シンガポールは實質的に武装されなければならなかつた。この要求が最近のニュースの傳へる英國極東軍司令部の創設となつて具現したのである。その司令官が空軍大尉ブルック・ポーバムであることは、マレー防備の兵力の不足を空軍によつて補はうとする意圖を示唆するものである。併しながら、英本國が獨逸の攻勢の前に焦燥の急を告げ、地中海に於けるイタリアとの對峙が多數の濠洲兵、印度兵をアフリカ、近東に集結せざるを得ない現状にあつて、果して極東に幾許の兵力を集め得るであらうか。

翻つて思ふに日本がその抱懷する南進政策を實現せんとするならば、結局はシンガポールに根據を置く英國の勢力を覆滅しなければならぬ。筆者は先にシンガポールを以て英國太平洋政策の象徴だと稱した。まことに現下の南洋に於て日本の皇道宣布を阻もうとする凡ゆる方策はてこの港から生れるといつてよい。現在の如きシンガポールの生存する限り、大東亞共榮圈

とは單なる美しき空想に過ぎないであらう。

若しシンガポール撃つべしとするも、従来の論者の説く如く直ちに海軍を以て海上より攻撃せよといふが如きは策の迂なるものと考へざるを得ない。由來重裝備の要塞に對する海上よりの攻撃が勞のみ多くして攻少きことは近代戦史の數ふることであり、第一次大戦に於ける英佛聯合艦隊のガリポリ攻略戦がよき教訓を残してゐる。而も英國は多年之にそなへ、幾度か演習を繰返へして防備の手段を考究して來たのである。然るに英國が不測の事態の發生に慌てゝ現在狂奔しつゝあるものは陸上攻撃に對する防備である。その狼狽こそは彼等が自らその弱點を世に暴露しつゝあるに等しく、正に彼等の從來多く意を致さざりしアキレスの踵であらう。その備へざるを撃つは兵の常道である。日本のシンガポール攻略戦は、されば陸軍を主體として行はれなければなるまい。勿論このことは皇軍にとつても懸軍萬里の遠征の不利を伴う。併しながら充分なる事前の態勢整備はその不利を滅殺すること多大なるものがあらう。即ちかゝる方途として我々は次の三つを擧げ得る。一は皇軍の南部佛印進駐であり、二は日泰軍事協定の締結であり、三は雲南作戦である。

泰國は現在佛印との間に失地回復の係争を起こしつゝあるが、想像を逞しうすれば、これを煽動したる英國の眞意は恐らく泰國をして佛印におけるヴィシー政権と争はしめ、南部佛印のド・ゴール派と泰國との結合を誘致すると共に、若干の佛國領土を好餌として泰國を自己の陣営に入れ、前述の如くマレー防備の前衛となさんと欲したのではあるまいか。とすればこの國境紛争が涯しく擴大し、共に自領の防壁たるべき佛印、泰が混亂に陥ることを欲するものではない。また泰國の側よりすれば、獨裁的傾向を多分に有しながら尚その基礎固からざるピブン首相が、その對内的意圖もあつて佛本國の敗退と英國の使噓とに常時この要求を提出したもので、佛印の泰印の態度以外に強硬にしてし而も國內の輿論は熱狂し、引くに引かれぬ状態となつて内心平和的解決を欲しつゝ現在の事態に立ち至つたものであらう。このことは本事件の當初に於ける泰國の對仏要求がメコン河上の數個の島嶼の歸屬、乃至は仏印領となれるラオスのメコン右岸の地域を出てなかつたこと、並に最近に於けるピブン首相等の聲明等によつて充分察知し得る事實である。故に日本がもしこの紛争の居中調停に起こつとせば、その成功の

可能性は充分にあると考へてよい。而もこれによつて佛印に於けるド・ゴール派の勢力を削ぎ、進退兩難に陥れるピブン首相の立場を救ひ、泰國をして我が傘下に入らしむるを得よう。これを機として我が國は泰國と攻守同盟を結ぶか、少なくとも皇軍の泰領通過権を獲得すべきである。かくの如くにして眞の日本の外交が存する。地圖上に描かれたる政治國境を徒らに重視し、領土尊重を唱えて通商協定にのみ狂奔するは、東洋の盟主たるの名に愧づべきの愚策ではないか。

かゝる外交の推進は武力の背景なくしては行はれ得ない。泰國が從來我が國に對して友好的態度を示したのも、それは日本の外交の巧妙さによるものではなくして泰國が日本の實力を認識したからであつた。従つて日本が英米に對し退嬰的なを見れば、直ちに我を離れて彼に附かんとするのである。この意味からも皇軍の南部佛印進駐最も緊急なる一事である。況んや佛印海岸の掩有は南支那海の全海面を制し、シンガポールを含む英領マレーの全土をその翼下に収め得るのである。

併しながら一方シンガポール攻略の爲には、その後より之を支ふるビルマを抑えねばならぬ。この目的には、筆者は雲南作戦の遂行を以て最も得策なりと信ずる。勿論雲南の峻險なる山岳地帯とマラリヤその他の風土病は、皇軍のこの作戦を極めて困難のものとするであらう。併し筆者の主張するところは、直ちに道を現在の援蔣ルートに借りて乾隆帝の緬甸征討の跡を辿り一擧ビルマを衝けといふのではない。日本は既に雲南作戦の爲に佛印の通過権を得ていると聞く。假令若干の小部分にもせよ、皇軍が昆明に入り大理を陥れたとすれば、由來親日的傾向強きビルマは鼎の如く沸くであらう。かくして皇軍は馬にサルウィンに飲ましめずして能く英國のビルマ守備兵を釘付けにし、シンガポール作戦を起こすに當つてビルマにも軍を進めるとせば、米倉學士の説かるゝが如く泰國よりテナセリウム山脈を超えてビルマの心臟部たるラングーンを衝くを上策とするであらう。

而してかゝる雲南作戦と南部佛印への進駐は時を同じくして行はるべきである。かゝる事態の發生は既に全世界の半ば豫期せるところであつて、このことのみによつて米國は日本に對し直接行動には出でないであらう。それ故にこの形成を得て泰國を完全に我が友邦とし、然る後徐ろに對米海戦の機を見てシンガポール

を衝くべきである。何となれば、日本のシンガポール進撃は直ちに日米海戦を意味する。この時に當つて我が國が既に絃上の態勢を整へ得てあつたとすれば、シンガポールの堅壘も全く孤立し、その戰略的價値は半減して殆ど米國海軍の使用にすら堪え得ないであらう。

かく觀來ればまことにシンガポール軍港は過去十數年に亘つて英國太平洋政策の根據地であり、支撐點で

もあつた。今や我が皇道圏の擴大によつて落日の歎ありとはいへ、なほアメリカと呼應して極東の一角に強弩の餘勢を保ちつゝある。日本が一步退けば彼は傳統の力によつて二歩盛り返すあらう。ラッフルスの打建てたこの邪惡なる港を東洋の地圖上より抹殺して、その廢墟の上に新たなる皇道具顯の都市を建設するか否かは、かゝつて我が日本の決意にある。



秘

西貢港の地政學的 위치에就きて

(昭和十六年六月二四日印刷)

(擔當 室賀)

一、新嘉坡の價値批判

思ふに東南アジアに於ける地政學的據點として、新嘉坡港の重要なるは万人の等しく之を認むるところ、現實に於てまことに南洋海面の總括者たり、後に一路スエズ、喜望岬を擁し、前に遠くパナマ、真珠灣と呼應し、英帝國の極東探題として優に太平洋、印度洋を制壓し、一點よく支那、濠州、印度を抑ふるもの、實にこの渺たる小島にありとせば、その地政學的價値の如何に高きかに驚かざるを得ず。

然りと雖もかゝる新嘉坡の優位とは、この島の自然的位置のみによつて齎されたるものに非ず。却つて英帝國の勢力に依つて賦與せられ、その世界支配形態によつて支持せられたるものなることを思はざるべからず。さればこそ英國の世界支配が欺瞞に充ちたるが如く、そのまゝに新嘉坡もその繁榮と堅固とを謳われながら、而も軍事的、政治經濟的脆弱性を潜めたること筆者の既に論破せしところなり。

もとより筆者は亞歐連絡の關門マラツカ海峽を扼する新嘉坡の位置を輕視するものにあらず。而も現在世人によりて多く論ぜらるゝところの新嘉坡の重要性なるものは實に上記の如き英國的重要性にして、日本の主體的立場より之を批判せば自ら歸結の異なるべきところあるは見易き理なるべし。言ふまでもなくかゝる英

國的紐帶の破碎の爲に、その結節點たる新嘉坡を正常に評價するは目下の喫緊事たりと雖も、もしそれ我が南方政策の建設的面に於て尚この英國的遺産を繼承するに汲々たるものありとせんが、或は東亞統治の大計を誤るなきを保せず。

思ふに新嘉坡の位置するマレー半島南端部は、西方よりする勢力の南洋に覇を唱へんとする時必須の要地たりしが如し。古代に於る印度文化の滲透、中世に於けるアラビア人の活動等皆これを徵證するものあり。更にこれを白人侵略史に見るも、所謂大發見時代以降南洋に到れる最初の白人たるポルトガルのアルブケケは、一五一〇年印度西岸ゴアを奪取するや未だセイロンを略取するに及ばずして直ちに東して翌年マラツカを襲ひ、爾來久しきに亘つてこの地を南洋貿易の策源地となせり。今日マラツカに残されたるポルトガル人の策源地は雜草離々たるの間に空しく一六二〇の年號を刻みて往年霸權の跡を止むといふ。

ポルトガルに代りて南洋の覇者たりし和蘭も亦はじめその根據地として擇びしものは新嘉坡に近きバンカ、ピリトン等の島々なりき。彼らはやがてスダ海峽の利に着目し、その基地をバタヴィアに移せしが、尚マレー半島はその掌中にあり、彼等が壇に香料の島々を獨占し得たりしもの亦この南洋への二大通路を扼せしが故に他ならず。

和蘭に代わりし英人が新嘉坡の建設者なること再び喋々を要せずと雖も、當時その有力なる競争者たりしフランスがこの據點の先取せられしを嘆じ、マレー半島の最狭部を開鑿して運河を通じ新嘉坡の價値を減滅

せしめんとするの舉に出でたることは、彼も亦新嘉坡の重要性を認識せし所以に他ならず。今日に至るまで種々の議論を醸しつゝあるクラ運河問題は實にこゝに端を發せしものなりとす。

果して然らば政府は今日の新嘉坡によつて象徴せらるゝマレー半島南端部の占據如何は西方よりする勢力の南洋制覇の鍵鑰たりしこと論なし。思ふに印度方面より南洋を窺ふものに取りては、マレー半島、東印度諸島によつて抱かれたる南支那海は外海なり。従つてこゝに入るの門戸としてマラツカ或はスダの海峡を陋し扇形に擴がる南洋地域の物資をこの要に於て西方へ吸収するの態勢を取るべきこと理の當然といはざるべからず。こゝに新嘉坡、パタヴィアをして白人の爲の要衝たらしむる所以の存するを見る。

要之、新嘉坡の地政學的意義は西方勢力の南洋制覇の爲の據點たること明けしを雖も、もし東方或は北方よりの南海に對する勢力を想定する時、その意義また自ら異らざるを得ず。而もこの北方よりの勢力とは、他なし。嘗てこの地域を霸廢せしめたる支那帝國と、而して現在この地に皇道の光被を意圖するゝある我が日本と是なり。

二、南部佛印海岸の歴史地理學的 성격

斯くの如く南支那海は、西方勢力よりこれを見れば纔に狹隘なる海峡を以て通ずる外海なるも、これを北方よりする日本或は支那より見れば一の内海たるに過ぎず。所謂濠亞地中海の名ある所以にして、正に東亞の民族に取りて Mare Nostrum たるべきものなり。

果して然らばこの海面に沿う島嶼郡を制壓し、その豊饒なる資源を吸引するの地點は、これを遠くマレー半島に求むべきにあらずして、却して南支那海の中央に位しよく南支の諸港と連繫呼應するの位置を保たざるべからず。この意味に於て南部佛印海岸の有する歴史地理學的 성격は吾人に示唆するところ甚だ大なるものあるに似たり。

夙に古代よりして今の佛印の地は支那勢力の波及するところなりしこと、史籍これが明記を存し、秦の始皇が越南征服は暫く措くも、漢代以降こゝに郡縣の制を布き、後漢の馬援が遠征によつて一層漢文化の滲透を見たるは又近時の考古學的研究によつて明白に裏書きせらるゝところなり、而も當時に於て既に海上貿易は甚だ盛大を極め、單に南洋諸國のみならず遠く印度、

西南アジア方面とも交通ありしこと周知の事實に屬す。漢期の安南統治は實にこの南海の資源と貿易とを兩つながら掌中に收めんと欲せしに他ならず。當代支那貿易港の史乘に著はるゝものまづ番禺（廣東）に指を屈すべきが如きも、これと並びて日南の殷盛亦逸すべきにあらざるなり。

日南は漢代に於る支那最南端の郡治たり。その遺墟は略ゝ安南海岸ソーラーヌ附近に比定せられ後代廣南期の王居を定め、現在も王宮を存する順化に近き歴史的要地にして、ソーラーヌ港の貿易的價值は、我が御朱印船活躍時代、南進の先驅者等がこの附近二ヶ所に亘つて日本町を建設し、支那、和蘭の商賣とその商權を争ひし史實を以てしても窺ひ得べく、この地今なほ日本橋（來遠橋）の遺址を存し、名古屋情妙寺所藏茶屋四郎次郎交趾交易圖はこのソーラーヌ港に於る日本船入港の實景を傳へたり。而もこれ近世のことに非ず。葉調國（セイロン）樺國（北部ビルマ）等の諸國の日南徼外より來貢せしこと漢史屢々その記載あり、有名なる大秦王安敦即ち羅馬皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌスの使臣が遠く萬里の波濤を越えて漢室に入貢せしも亦この港に於てなりき。

然るに後漢末支那の安南に對する統治力弱まるに及びて、この地方に住せしチャム人その羈絆を脱してこゝに一國を建つ。支那史乘に林邑或は占城等の名を以て記載せらるゝもの即ち是なり。チャム人（或はチャンパ人）は現在佛印に於て僅か數萬を算するに過ぎざる衰亡の民族なれど、もとインドネシア系の慄悍なる海洋種族にして、南印度バラヴア文化の影響を傳へ、順化に近き茶番に都し連りに北侵の勢を示せり。その國土が安南沿岸の狹隘なる平地にとゞまりしにも關らず、國勢大に振ひ今日なほその故都附近に壯大なるチャンパ文化の遺跡を残し得たりしもの。實にこの南支那海に面する好位置に位し南海貿易の利を收め、且はその海賊的活動によつて富有を致せしが故に外ならず。されど唐末宗初安南人の國家的獨立あり、活潑なる民族活動を起して南下の勢を示すや、繁榮を誇りし占城も次第にその壓迫を被り、更に南西よりは、クメール人の侵寇あり、遂に後年安南人に全く併吞せらるゝことゝなりぬ。

クメール人は今日フランスの保護國たるカンボヂヤ王國に僅にその餘端を保つに過ぎずと雖も亦古代より中世に亘る南海の富強國の建設者なりき。古く扶南國

として現はれ後に眞臘と稱せられたるもの即ちこれにして、メコン下流の地帯を占據し、支那、印度と通交し、又連りに四周の地を拓きタイ灣東岸よりマレー半島にも勢力を及ぼし、チャンパの衰運に向ふに及び印度マレー方向よりの賣船の寄港地として南海の貿易權を壟斷せり。されば三國時代長江沿岸に勢を張りし吳王孫權も使節を派してこの國と交易を求めたりき。所謂吳時外國傳の名によつて僅にその逸文を傳存する一書は、實に當時に於ける吳使の見聞録にして、この國に集まる諸外國の記事をも併せ敘べたるが、その後唐代支那商舶の積極的に洋上に進出するに至るまで殆んど四百年の間支那人の海外知識がこの記載を多く出づることなかりしを見るも亦扶南の貿易活動が如何に廣範圍に亘りしかを物語る一證となるに足らん。然るに扶南の後を受けたる眞臘は九世紀の交一時スマトラのバレンバンを中心とする室利佛逝の王國麾下に入りしも、再び十世紀以降のその最盛時代を現出し、十一世紀にはメコン、メナムの全流域を支配せることマスペロ氏の説くが如し。かのアンコール・ワットの燦然たる文化を開きしもの實にこの民族にして、かの趙如透の諸蕃志に「殿宇雄壯、侈麗特甚」と記さるゝ國王の豪華を極めたる生活も、亦この南海の官業貿易によつて齎されたるもの多きに處る。是に由つて之を觀れば佛印南部海岸地方が南支那海の貿易通交に於て絶好の位置を占め得たりしこと更に縷言の要なきに似たり。されば漢民族が唐代以降從來の崑崙船(外國船舶)の來貢に俟ちたる貿易形式を脱して積極的に海外進出を試むるや、この地帯にその活動の根據地を求めんと欲したること故なしとせず。例へば元が南海諸國を制壓せんとするや、まづ着眼せしは船城の地にして行中書省(中央の中書省の地方的出張機關)をこゝに設置し、南方經營の一大據點たらしめんとす。所謂元の安南征討の擧も、その眞意は占城領有の道をこゝに籍さんとせしに外ならざるなり。而も新興民族の意氣軒昂たる安南人の反撃に遭ひ、元の企圖空しく破るゝに至りしが、その後再びジャヴア遠征の師を起して成らざりし所以のものも實に占城に於て確固たる根據地を樹立し得ざりしに由るを斷ざるを憚らざるべし。更に明代に至り永樂帝の時連りに南海の經營に努め、太監鄭和をして南方諸國を探撫せしむること前後七回に及びしが、その船隊が常に基地として擇びしもの亦安南海岸占城の地なりしを想はざるべからず。

然りと雖もこの明の經略にして尚且つ占城地方を完全なる自己の勢力圏に收め得たるにはあらず。鄭太監の遠征を稱するもの實は單なる武装の官業貿易に過ぎざりしなり。即ち思ふ支那が漢末以降順化以南の佛印南部海岸にその政治的宗主權を掌握せしこと絶えてなかりし一事は漢民族の南海制覇を遂に完成せしめざりし所以にして、明末以降華僑の大發展に伴ひ南洋の經濟權を壟斷し得たりと雖も、西方勢力のひとつびマラツカ、スンダに現はるゝや、もとより硝たる基礎に關くところありしその覇權は一朝にして土崩瓦解し、空しく白鬼の頭使に甘んずるの已むなきに至りぬ。

なほこゝに再思すべきは、支那のかゝる南洋よりの退却が、又漢民族自身の頽勢を直ちに結果せしめたる事實にして、豊饒なる南洋の經濟的意義とその地政的價值とは支那帝國の更に廣く東亞諸國の存立の爲に有史以來既往の史家の評量を越えて遙かに大なるものありしなるべし。越南は瀆越の唇齒とは支那史家の常に説くところ、而も唇齒たるもの何ぞ越南の一角に止まらんや、實に南海の全地域こそ東亞に取りて不可缺の構成部分なることを思はざるべからず。

説いてなほ詳かならずと雖も、支那或は日本より南海を制壓するの據點が現在の佛印南部海岸に求めらるべきこと炳として歴史のしめすところ、これを以て現代の指針となすに毫も不可なきに似たり。

然らば我々は今かゝる歴史地理的背景を負ふ佛印南部海岸の地政學的意義に就き再び新たなる考察を進めざるべからず。

三、西貢港の地政學的意義

今試みに南部佛印パラダン岬を中心として半径二〇〇〇浬の圓圈を引くに、北は雲南より福建、臺灣を含み、比島、ボルネオ、スマトラ、アンダマン、ニコバルを全くその圏内に包攝し、セレベス、ジャヴアを通じてビルマの大部分を容る。この圓こそは正に所謂南洋圏と然らばこのバダラン岬附近を以て所謂南洋の中心と稱するも取て不可なしといふべく元師明將の道を占城に借りたる亦故なきに非ざりしを知る。

もとよりかゝる絶對距離を以てする圖上の觀察は屢々時間的距離と齟齬すること多く、定疎なる立論に終わることあるべきも、この地方に於ては、少なくともその南東面に關する限り海路を以て通ずるが故に、環南支那海に對する如上の考察がなほ妥當性を有する

を疑はず、而もこの南支那海たる、日本海、東支那海と全く等價的に我が日本の池たるべきにも拘らず、今に至つてなほ完全なる英米の海たり。即今日蘭印會談の決裂を見たるも亦正にかゝる因由によるものと斷ずべき歟。バタヴア政廳の不遜なる、ひたすら英米の武威を借りて我が正當なる要求を距み、壘を高うして自ら守るもの、要は我が武力のこゝに及ばざるを信ずればなり。然り而うして皇國海軍の精強を以てするも、今直ちに蘭印遠征の師を起さば、これを公平に見て基地を占城に得ざりし元軍舟師の履轍を踏むなきを保せず、艘艦百艘備へ足らざるにあらず、而も今日これを用ふるの術なきに至らしめたるもの、我が政治外交の貧困によりしにあらずにして何ぞや。

然らば我が日本が今や圓南の鵬翼を張り、實質的に東南アジアを大東亜のうちに包括せんとせば、南支那海の中樞を握るべき要地に據點を建設すべきこと急務中の急務なること喋を要せず。世人或は臺灣にこれを求め、或は海南島の位置を過大視し、更に皇軍ハノイ進駐を以て望外の悦びとなす。何ぞ地理に迂きの甚しきや。

これを歴史に見るにかゝる要地としてまづ注目せらるべきものは占城の故地ツーラーヌ港なり。然れどもこの小灣たる、直ちに安南山脈の峻壁を負ひ、狭小なる沿岸平野を除きては背後地を稱すべきものなく、且つ港内土砂の堆積著しくして今日外洋船は二裡の沖に停泊せざるを得ず、東北季節風の候にありては、これが掩護物を有せざれば風浪高くして繫船に便ならず、況んや有名なる颱風の屢々襲ふありて年々の被害少からざるに於ておや。

こゝに於てか我等の着眼は自らに西貢港に轉ぜざるを得ず。

西貢は安南人が交趾支那經營の據點とせし嘉定府の故地にして、メコン川の分流西貢河に面し、海岸より六五軒の内にありと雖も、現在の施設をもつてすら僅に二萬噸級の大船舶を容るべく、中型級以上の船舶二十艘を停泊せしむべき岸壁を備へ、更に海中二十ヶ所の繫船設備を有す。加ふるにフランス東洋艦隊の根據地を併設し、一八八八年竣工せし大船渠をはじめ萬般の施設、第一次歐洲大戰前にあつては本國ツーロン軍港を凌駕せりといふ。その規模の既に甚だ大なりしを見るべし。而も季節風による影響なく、颱風もこの部分に至れば殆どその害を見ず、且つ印度支那の諸港に

注ぐ諸河川は、バンコック、ラングーン、ハイフオン等に於けるいづれも熱帯河川の特徴として土砂の流出著しく、河口に門洲をつくりて大汽船の航行に障害を與ふるも、サイゴンのみはメコン中流にトレン・サツプの大湖を有し堆積物の搬出を調節するが故に全くその憂ひなく、巨船の出入に何らの困難をも感ぜしめざるなり、されば佛人が河港としての諸條件上海に劣らずと誇稱するも亦故なきに非ず。之をハイフオンの僅か一萬噸以下の船舶を出入りせしむるに、満潮時を待たざるべからざるに比して如何に恵まれたるかを知るべく、今次歐洲大戰直前の統計によるも外洋入港船入港噸數は年九〇萬噸にたらざるに對し西貢は實に三五〇萬噸を算して佛印第一の商港たるの位置を占め得たり。

更にこれを後背地につきて見るに西貢の負ふメコン下流部は印度支那に於る最も豊饒なるデルタの一に數ふべく、且つ廣くカムボジヤ、ラオスの低地に廣がり、佛印輸出の大宗たる米穀の主要生産地帯をなす。而も單に米産に止まらず、肥沃なる赤土帯はゴムの植栽に適し、その他綿花、玉蜀黍等有用農産物の寶庫たり。ゴムの如き區々たるマレー半島の小平野に於てすら英國の努力は世界需要の殆ど半量を充すに足りたるが、もし佛印當局にして夙に意をこゝに注ぎしならんには英領マレーの十倍の産額を擧ぐることも易々たるものありしならん。見るべしひとたび斯業のこの地に開かるゝや數年ならずして即ちフランス本國の全需要量を充してなほ餘りある成功を見たることを。

而もこの豊饒なる大後背地の物資を集散すべき運輸の手段は、デルタを流るゝ無數の水路によって圓滑且つ大規模に之を行ふを得べし。現在ブノンペンには千五百噸級の大船を溯江し得べく、而もこの内陸に位置する都會にしてなほ港内に四十二萬噸の船舶を同時に停泊せしめ得べき廣表を有す。更に溯りてその中流部に至れば、メコン川の現状は屢々急湍に妨げられ運輸の不便を免れずと雖も、更に佛印當局による改修計畫あり、その完成の暁に於てはサイゴンの後背地は更に廣くラオス地方に達し、佛領ラオス、並にタイ國東北部の高原地方をも包含するに至るべし。

されば現在と雖も西貢は佛印經濟の中樞をなし、人口十五萬、政治的首府たるハノイに對し宛も我が東京に對する大阪の地位を占む。且つ對岸に提岸市あり、華僑の本據として名高く、人口十九萬（内、支那人十

萬)、精米、醸造、製氷等の輕工業盛にして佛印唯一の工業都市とも稱すべく、この兩市を合すれば正に佛印第一の經濟都市たるの實を備ふ。統治者佛人の怠慢なる、この地の暑熱を厭ひて北方に移り、久しく開發を怠りて土民の搾取にのみ汲々たるものありしが、かゝる状態に於てすらなほ且つこの繁榮を致せしもの、その地理的優越に由ると斷ぜざるを得ず。もしそれ我が國にしてこれが建設に意を注がんか、忽ち新嘉坡の殷盛を凌駕し得べきこと火を賭るよりも明かなるべし。

かゝる西貢の位置は、又南支那海制壓の爲の好據點たり。この意味に於てこの地は嚴たる武力を以て装はれざるべからず。然れども現在の如く商港と軍港とを同時に併設すること或は策の上なるものにあざらん歟。新嘉坡の如き亦この形式を襲用すと雖も、これ他に適地なく、已むを得ざるに出でたるものにして、既にその軍港の狹隘なる、大艦隊の收容に困難を告げ、軍事専門家の間に論議を醸しつゝあり。然るに西貢港はその東北に好箇の錨地あり、名づけてカムラン灣といふ。即ち日露の役、バルチック艦隊の寄港地として我らの耳朵に親しきところ、現在は佛印海軍の小根據地たるに過ぎずと雖も、灣内廣表四二〇〇陌と稱せられ、殆ど新嘉坡軍港の十倍に達す。而も季節風は狭まりたる灣口の地形と、こゝに横たはるラグネ島とによつて完全に遮蔽せられ、灣内水深は概ね一〇—三五米に達し、大艦巨船を容るゝに苦しまず。況んや近代的海軍の必須の要求たる副根據地として西貢港として、又西貢港建設の不可分的要素として、カムラン灣根據地の築成を提唱せんと欲す。

かくして西貢に大貿易港を興し、その後背地たるカムボジア、ラオスを開發し、南支那海の物資をこの地に集散し、同時にカムラン灣に巨大なる軍事基地を設けて南海を制壓せば我が日本の圖南の業既に半ば成ると稱するも過言にあらざるべし。勿論筆者は西貢建設を以て足れりといふにあらず。又新嘉坡、パタヴア、マニラの軍事的、經濟的位置を輕視するものにも非ず。されどこれら諸港の價値は前述の如く現在の英米的支配形態の下に於て評價せらるべきに非ずして、却つてあくまでも日本の南洋計畫のうちに主體的に把握せらるべきものたるべく、換言せば中樞的位置をもつ西貢との關聯に於てその独自の意義を見出すべきものなり。筆者は曩に提出せる報告に於て、西貢を以て新嘉坡の副根據地たる意味に於て重要なりと進言せり。今その

不明を恥づると共に、却つて新嘉坡は西貢の副根據地たるべく東漸する西力に對する南海防衛の阻塞たると共に、又印度洋進出の前進據點たる點にその眞意義を認めんと欲す。又これを西貢につきて見れば、この港が略々等距離に新嘉坡パタヴア、マニラ、ダバオ等の重要な副根據地を廻らし、これらの總括者たる位置を占むることに於て一層その價値を高むといふべく、更により本國的意味をもつ廣東或は高雄等との關聯に於て益々その重要意義を見出すべきものなり。

今や我が南進政策に於ける西貢港の重要性は闡明せられたり。然らば我等がこれに對して採るべき方途果して如何。

四、現下に於る西貢建設の方途

人或は言はん、現下の事態に於て西貢建設論の如き殆ど不可能事に屬す。日本はなほ支那に事を構へたり。何ぞ力を南に割くの違あらんやと。その言や一を知りて二を知らざるものなり。支那事變の解決は支那本土に存するにあらず。實に世界に存するなり。少くとも南方問題の解決なくして何の事變處理ぞ。南方に於る英米の勢力の残存を許して單獨に蒋介石政權の打倒を論ずる如き、まさに痴人の夢なるべきのみ。

皇軍の曩に北部佛印に進駐するや、安南人は箠食壺漿してこれを迎へ、獨立の氣運澎湃たるものあり、餘波は及んでタイ、ビルマを蔽はんとしたること我等の耳目に新たなるところ而も荏苒として今日に及び、一旦軍靴の響に慄伏せる群鼠輩の再び我が寛恩に忸れて跳梁を壇にするに至りしはまことに、忍びざるところに非ずや。殊にハノイを抑へられたる佛印當局がその基地を秘かに西貢に移し、南部佛印を根據としてド・ゴール派の暗躍と相通じ、英米的勢力と結託して我が南進の勢を阻まんとす。而も我が國の路に當る者右顧左眄を事とし使臣を派して「有効裡に」協商の實を擧げんと欲するが如きは歴史の必然を知らず、或は國家百年の悔を残すの虞なしとせんや。借問す、我が日本の主張する新秩序の精神と英米舊勢力との間に如何なる共通の根柢かある。假令蘇張を今日にあらしむるとも、會談百遍して一の妥協を求め得ざることもとより明けきなり。抑々日佛印經濟交渉の成立により果して佛印物資は初期の如く我が國に流入しつゝありや。將又今次日蘭會商の決裂は何を物語りつゝありや。筆者也より臺閣の諸公と遣外の使臣が夙夜國事に奔走せ

らるゝの勞はこれを甚だ多とするものなり。而も敢て苦言を提せんと欲する所以は、唯諸公の或は歴史への透察を開き態度の果斷を失はるゝなからんかを危惧するによるなり。

果して然らば西貢建設の業の如きも、之を所謂外交交渉によつて進捗し得べき性質のものにあらず。取るべき策は一のみ、即ち皇軍の南部佛印進駐これなり。

このことたるや最近に於ける獨逸とヴイシー政府の關係より見れば、必しも流血の慘を予想し得べきにあらず。外交とは實にかゝる決意と實力とを背景として事態を圓滑に進展せしむるの點に存す。本來不可能なる會商に日を過して徒に外侮を受くるが如きは斷じて外交の名に値せざるなり。或は言はん、これによつて米國の參戰を促すことあるを虞ると。米國の參戰は米國自身の事情によつて決定す。もし彼にして戦はんと欲すれば、何ぞ我が佛印進駐を待たんや。而も一面よりすれば彼らは俟に所俟樞軸國に對して事實に於て宣戰せるに非ずや。若干噸の鐵と石油を惜しみて拱手してその來襲を待ち、殊更に自らを不利の態勢に置くが如きは迂愚の甚だしきものといはざるを得ず。

且つ近時の英佛關係は、英國の佛印に對する積極的活動に好箇の辭柄を興へつゝあり。マレー防衛の第一線が南部佛印にあること既に筆者が前報告に論じたところ、シリアに於る英軍の不逞が再びカムボジャ、交趾の野に繰返さることなきを保せざるなり。もしこの地にして英軍の先取するところとならば、もとよりメコン、デルタは無数のクリークに刻まれ、我が遠征軍の活動に極めて不利を齎すべきこと、かの上海附近に於る經驗に徴して明かならん。今斷じて行へば平和裡にことを行ひ得べし。四圍の情勢の已むなきに至つてなざば犠牲は即ち百倍せん。

皇軍の南部佛印進駐の意義は單にこれのみに止まらず。旭旗標としてひとたびこの地に輝かばタイ國の向背亦自から明かなるべきものあればなり。タイ國は既に我が庇護の下に佛印との國境問題を解決し、對日感情著しく好轉したりと雖も、最近に至つては英國の軍事的經濟的壓迫に抗すべくもあらず、再び英米陣營に誘引せらるゝの傾きを示せり。もとよりタイ國の英佛を怨むこと年ありと雖も、近く國都に匕首を擬せられ、日本の援を乞ふに路程の遠きに苦しむとせば、この弱小國が自己保存の必要上かゝる傾向を示すこと寧ろ當然の歸結と言はざるべからず。然れ共南部佛印に我が

勢力の樹立せらるゝあれば、この國の歸趨亦自ら知るべきのみ。思ふにメナム流域も亦クリーク縦横に走りて大兵を機動するに便ならず。且つ友邦の沃土を空しく戦火に投ずべきにあらずとせば、樽俎の間にタイ國をしてマレー進撃の路を開かしむること必須の務たるべきなり。而もこの好態勢を備へ得べき背景も亦皇軍南部佛印進駐に存することを思はざるべからず。かくして南支那海は我が海軍と空軍の制壓下に入り、印度支那の東部亦我が陸軍の鐵蹄下に置かるゝとせば、新嘉坡と馬尼刺と、この英米の二大據點も殆ど策を施すの餘地なきに至るべく、旌旗ひとたび動かば我が國威の英領マレーよりスマトラ、ジャバアを席の如く捲かんこと掌を返すが如くなるべし。

而も西貢占據の目的は單にかゝる軍事的意義にとどまらず、寧ろ將來の我が南方計畫の一環として考慮せらるべきものなれば、皇軍進駐と同時にこの地方の經濟開發、港灣施設の改善、メコン河流の改修等に着手すべきことを俟たず。聞くならく、獨軍ポーランドに入るの日、戦火未だ收らざるに早くも既定の道路計畫を實行しつゝありきと。我が國に於ても即日科學者、技師等を動員し、大規模なるメコン流域の開發計畫を樹立すべきこと緊急の要事たらん。

筆を擱くに當り重ねて言はん、南部佛印は南洋圏の要樞たり、これを制するの方途は一に皇軍の即日進駐あるなり。もとより兵を動かす自から機ありと雖も現事態を歡ずるに一日遅るれば一兵を損じ、兩日遅るれば十兵を傷らん。先に筆者は新嘉坡の脆弱性を論じ、急遽その側背を衝くべきを進言せり。而も今日の新嘉坡は既に昨日のそれに非ず。アンザツク十萬タイ國境に終結し、米國製航空機は陸續として補給せられつゝあり。もとより皇軍の精強なるこれを破碎するに難からずと雖も、なほ多くの兵を損ずべき虞あるを奈何せんや。南部佛印進駐の如きも徒らに荏苒として英米の爲に日を籍さば、現地將兵の勞苦今日に千倍するものあらん。即ち菲才自ら憚らずして西貢港の地政學的價値を論じ、再び南部佛印への即時進駐を進言する所以なり。説くところ或は激越の調を免れず、屢々不遜の言辭を弄したるなきかを虞る。願はくは微意の存するところを諒せられ幸いにして寛恕を給へ。

(昭和十六年六月廿日稿了)

